しる。おとゞ、家はとられていみじきあたかたきと思ひしこゝちも、この玄たるなりけりとおもふに罪もなく、さきざきの耻も思ひ消えて、「子どもの中にさいはひありけるものを、何しにおろかに思ひけむ。かの家は、この人の母の家にてことわりなりけり」と言ひいます。かゝれば北の方、妬くいみじくて氣色我にもあらで、「かの所をこそさも領せめ。この年ごろ造りつる草木を物入れて。それ運びとり給へ。家買ひ給ふあたひにこそ渡し給はめ」といへば越前の守「こはなでふ事ぞ。さらぬよそ人のやうに物し給ふかな。おのづから此のぞうにはかばかしき人なくて、見つくる人ごとにおもしろの駒はいかにいかにと笑はるゝがはしたなきに、同じ殿ばらといへど只今のおぼえのたぐひなき人にいふに、えてねんごろ[illegible]になりぬるこそたのもしく嬉しけれ」といへば三郎の大夫、「いでや、それはことか、この君の懲せられしさまはいとといみじかりき」。越前の守、「いかにいかに懲じ給ひし」と問へば「いかばかりかうたてありし事」とて片端よりつぶつぶとかたりて、「いかに阿漕などいひつらむ。見え奉らむにつけてこそ耻しけれ」といへば、越前の守つまはじきをして「おないみじ。おのれは國にのみ侍りて知らざりけり。あさましきわざをこそは玄給ひけれ。この衛門の督は思ひおき給ひて、かく耻を見するやうには玄給ふなりけり。我らをいかに思ひ給ふらむ。すべて交らひもせずやあらまし」と耻ぢ惑へば、北の方、「おなかしがまし。今は取り返すべき事にもあらず。あいなし。ないひそ。憎くおぼえしまゝにせしぞかし」といふにかひなし。「少納言、侍從などいふもかしこにこそありけれ」といふを、御だち聞きて、「我らなどて今まで參

らで、玄ひたる世を見つらむ」とて羨しういみじうて、「今だに參らむ。御心ははためでたかりしかば、寄せ給ひてむ」と若きものどもいふ。はらからの君達、あさましと思ふ中にも、三の君は、我がをとこ取りたる人のたぐひなれば近うて聞え通はむをねたしと思ふ。四の君は我をはかりてから憂き身になしたる人なれば、とびとよりも見むにつけて、いみじく心うかるべきを思ふ。かのいつしか孕みし子は三つにてもたり。父にも似ず、いとをかしげなる姫君なりけり。我が身心うし。尼になりなむと思ひけれど、このちごのいとかなしうおぼえければ、ほだしにて、え思ひはなれであるなりけり。少輔はいとにくき者に思ひしみて、すげなくのみもてなしければ來わづらひてなむありける。中納言、つらきことは思ひやみて我が身のおぼえなく玄ひ人にもあなづられつるを嘆くに、おもだゝしき事ありといと嬉しくて詣でむと出で立ち給ふに「今日は日暮れぬ、あす」との給ふに、北の方、わが子どもよりも有樣いかに珍らかに見えむと胸いたし。三四の君「かゝれば清水にて懲りぬやといはせたりしにこそありけれ。かくつひには聞え給ふべかりけるものを、多くの耻を見せ給ひしかな。かいつらね人々出でしには、さばこの君のよせ給ふなりけり。年ごろびんなげにてすゑ奉りしを妬しと思ひしみ給へるなりけり」。北の方「そがいと胸いたうかくさまざまに妬きたふをせられぬる事を、いかで玄てしがな」といへば、むすめども、「さばれ、今はなおぼしそ。御婿ども多かり。直き御心つかひ給へ。典藥の助をいみじくうたせたりしは思ひおきたるにこそありけれ。男君知りてぞ玄給ひけむ」と口々にいひわかしつ。つとめて、衛門の督殿よりとて御

文わり。

「きのふ、越前の守して聞えし御せうそこは申されけむや。御いとまあらば今日かならず立ちよらせ給へ。聞えさすべき事わり」

と聞え給へり。御かへりには、

「きのふはえかものし侍りしかば、すなはち參らむとせしを日暮れてなむ。只今まゐらむ」

と聞え給へり。されば、さる御心せさせ給へり（仕無三字）。越前の守もとありければ御車のしりにて來たり。「中納言參り給へり」と聞ゆればかうの殿「これへ」と聞え給へれば入り給へり。みなみのもやの廂にて對面ゑ給へり。女君は几帳の内に居給へり。「おまへの人、北おもてへ」とのたまへば皆いぬ。指し對ひて對面ゑ給ひて「この家のかしこまりも聞ゆべく侍るを、こゝに又人知れず嘆かるゝ人も侍るめるを、かゝるついでに聞えさせよとなむ。この領じ造らせ給ひけむ、ひとへに（二字）道理なれども劵のさまを見侍れば、こゝにこそは御前よりも知りまさるべく侍れと思ひ給へしに、道の遠からぬほどに御せうそこもなくてわたらせ給ふは人數にもおぼされぬなめりと見給へしに、などかさしもおもはしおとすべきと心づきてなむかく俄にわたり侍る。年ごろつくろひ御心入りたりけるに、かく妨げたるやうにてわたしたるいとものし。なほこゝは奉りてよかしと嘆き侍るめるに、同じくはたしかに領せさせ給へ。けん奉らむとてなむ御せうそこ聞え侍りつる」とのたまへば、中納言、「いとものかしこき

仰なり。年ごろあやしくうせ侍りにし後に世に人に（仕無三字）も聞え侍らざりつれば世になきなめり、忠頼若う侍らばこそ行きめぐりあひ見ずとも思ひ侍らめ、老い衰へて、今日あすとも知らぬを、うちすてゝ影かたもなく聞えぬは猶世にうせにけるなめりと悲しう歎き侍りつるに、この家はかれ侍らばこそ領に侍らめ、今はいかゞせむ。こゝに知るべきにこそ侍れとていたうあばれぬさきにつくろひ侍りつる。かうの殿に侍ふらむとうけたまはらざりつ。いとめでたう思ふやうにとはおろかなるやうにこそさむらひけれ。今までかくなむとも知られ侍らざりけるは忠頼をびんなしと思ひ置きたるにや、又おもぶせなり。これが事知れじと思ひて侍るにやあらむ。二つの疑恥しく、けん何かたまはらむ。またも參らせまほしくなむ。今まで死に侍らぬ事をあやしと思ひ侍りつるはこの人の顔を見むとてなりけり。今なむあはれには侍る」とてうち泣きほたれ給へば、かんの君、さすがにあはれにて、「こゝにはすなはちより御夜中曉の事もしらでやと歎き侍りしかど、道頼が思ふ心侍りて暫しと制し侍りしなり。その故は、西の方に住み侍りしより時々忍びてまかりかよひ見侍りしに、御けしきもこと御子よりもこよなくおぼしおとされたりき。又北の方の御心ばへ憂くあさましく、つかひ給へる人よりも劣りにさいなみしを見聞き侍りしかば、世にありと聞えまつるとも善しとおぼさじ、少し人なみなみになりて、つかうまつりぬべからむ程に知られ奉れと聞え侍りし。部屋に籠めて典薬の助に許させ給へりけるがいと心憂く思う給へしかば、世になきさまに御覽せらるとも何ともおぼさじと思うたまへて、道頼がつらしうしと思ひおきつる事

の忘れ侍らねば、殿をばびんなしとも思ひ聞えざりしかども、北の方のなさけなくおぼえ侍りしかば、祭など見侍りしに殿の御車といひ侍りしを、なめげなるさまにをのこども、かつはいかにと見知るさまにていとよくも御覽せさせずやとおぼえ侍りしもびんなく思う給ふれど、明暮ことみこどものやうに見給ふ事の難げなりしを、まづ夜晝見奉らぬ事を申すめれば、人の親子の中はあはれなりけりと見給ふれば、いかで仕うまつらむとなむ思ひ給へなりにたるを、をさなき人々も、およすげまさるめるを見せ奉らでやなど思う給へばなむ」と片はしよりつぶつぶと聞え給へば、中納言いと耻しうて、この事どもを聞き給ひて、おぼし置きたりける事と限なくいとほしくて、え御いらへはかばかしからず。「こと子どもより思ひ落す事も侍らざりしかど、母具したる者はまづこれにと言ふまゝに、まげられて、げにいとほしき事も侍りけむ。されば いとことわりなり。述べ聞えさすべき事も侍らず。典藥はいとゆゝしき事、さるものにはいかなるものか許し侍らむ。部屋に籠め侍りし事も思ふやうならぬ事をえたりと聞き侍りしかば、妬く口惜しくてなむ。何事よりも若君達をまづ見奉らむ。いづら、今たゞに」とのたまへば、男君、前に立てたる几帳押し遣りて、「こゝにさむらふめり。出でゝ對面え給へ」と申し給へば、耻かしけれどゐざり出で給へり。父おとゞ見給へば、いみじく清げに物々しくねびまさりて、白くきよげゐる綾のひとへがさね、ふたあゐの織物の袿着て居たまへり。見るに、これよりはよしと思ひかしづきしむすめどもにまさりたればかゝりけるものを打ち籠めて置きたりしを、げにいかに思ひけむとはづかしうて、「つらきものに思ひおきて今まで知られ給はざりける。對めしぬるは限なくなむ心のびて嬉しく」との給へば、女君、「更にさ思ひ聞えぬを、この君のさいなみしをりおはしあひて、聞き給ひて、猶びんなきものにおぼし置きためりかし。しばしなえられたまひそとのみはべるめるに、つゝみてなむ。心には更に知り侍らぬなめげさも御覽せられつる事をいかゞと限なく思ひ給ひつる」との給へば、「そのをりに、いみじき耻なり。何事におぼしつめてかくものし給ふならむと思ひしを、今日聞けば、君をおろかに思ひきこえたりしとて勘當し給ふなりけりと承はりおはすれば、なかなかにいとうれしくなむ」とてうち笑ひ給へば、女君いと哀とおぼして、「さてしもこそかしこけれ」と申し給ふほどに、かんの君、いと美しげなる男君を抱きて、「是は御覽せよ。心なむいとうつくしく侍る。天が下に北の方もえ憎み給はじとなむ思う給へる」とのたまへば、「そもけしからぬ事を」とかたはらいたがり給ふ。中納言は見るに、老心地にいとかなしうらうたう、たゞおぼえにおぼえてゑみまけて、「こちこち」とのたまへば、さる翁におぢて首にかゝりて抱かるれば「げにや天が下の鬼心の人もえにくみ奉らじ」とて「いといとおほきにおはするはいくつぞ」、「三つになむなり侍る」となむ父君申し給へば「まだや物し給ふ」。「この弟は、殿になむめされにし。まだをんなど侍れど今日はつゝしむ事侍り。後に御覽せさせむ」など申し給うて、みだいまゐり、御供の人々にもわざとのまうけにはあらで牛飼までにいと清げにあるじ ゑ給ふ。男君「衞門、少納言、その越前の守よび入れて物せよ」とのたまへば、衞門、臺盤所の方に呼び入るゝにつけてもいと耻かしけれども、我がし

たる事かはと思ひて入りぬ。三まばかりあるに疊清げに敷きて、整へたるやうに劣らず見ゆる御達二十人ばかり居なみたり。御まへにありけるが「たて」とのたまひけるが、きつどひたるが居たるなりけり。越前の守色なる人にて、いと興あり嬉しと思ひて目をくばりて見わたす。物もいはれず、知りたる人だに五六人ありけり。これもしかにこそありけれとのみ見ゆ。衛門、「殿の醉はし奉れとのたまふに青うて出で給はゞびんなし。わかうどたち盃まゐり給へ」とて、かはるがはる強ふるに醉ひ給ひぬ。「衛門たすけ給へ。しる人げなくて懲じ給ふな」といふ。逃げむとするに、いとわかう清げなる人のをかしういひて圍みてにぐべくもあらず。わびてうつぶしに倒れふしたり。中納言もかからの君も御盃たびたびになりて、醉ひ給ひて萬の物語をなむ云給ふ。「今は身に堪へむ事は仕うまつらむとなむ思ひ給ふるを、覺さむ事は猶のたまはむ嬉しかるべき」と申し給へば、中納言いと嬉しと思ひたる事限なし。暮れぬれば、かへり給ふまゝに、おとゞにはころもばこひとよろひに、片つ方にはなほしさうぞく、今片つ方にはひのさうぞくひとくだり入れて、世に名高きおびなむ添へたりける。越前の守には女のさう束一具に綾のひとへがさねそへてかづけ給ふ。中納言、醉ひて出で給ふとて、「世に今まで侍りつるが心うかりつるに、嬉しき契に」などのたまふ。御供の人多くあらねば五位に一かさね、六位に袴一具、雜色にこしざしせさせ給ふ。よろしからぬ御中と見つるを、いかならむとあやしく思ふ。歸り給うて北の方に衛門の督のの給へる事ども、かたはしより、「典樂の助にはまことやあはせむとし給ひし、耻しげにのたまへるにおもて赤む

心地してなむありつる。ちごの美くしげなりつる事限なし。人々の有樣、いみじきさいはひありけるかな」とのたまふに、北の方いと妬しとはおろかなるに、「いでおな聞きにく。そのかみ物とやは思ひ給へりし。部屋に籠めよとはおのれこそ行ひ給ひしか。我は知らじ。ともかくもせよと放ち給ひしかばこそ典樂も何もかゝぐりよりたりけめ。今人物めかし給ふに、我がせし事を人のせむやうにのたまふは何ぞ。あまり華やかなる事は長からず」といふに、越前の守いみじう醉ひてよりふしながら、いみじうめでたかりつる事を語り臥せり。「卅人の女房たちの中にこもりて多くこそ強ひにたれ。三の君の御方のそれ、四の君の何の君、かのおもと、まろやさへなむ侍ひつる。花を織りてさうぞきて、いとよしとなむ思ふ」といふを、三四の君は一ところに臥して聞きて、「世の中はあはれなるものにこそありけれ。この君の落窪に住みて部屋に籠り給ひし時は、まろらにまさりて人つかひとられむとやは思ひし。父母のおぼさむ事はづかしくもあるかな。なぞや尼にやなりなまし」と三の君泣けば、四の君もうち泣きて、「そがはづかしき事、かくすくせも知り給はで、うへのげんかくにおぼしかしづきしをいかに人思ひ合せむ。まろ等、この頃憂き事出で來にしをりぞ尼になり侍りあむと思ひて侍りしを、いつしか身のなり侍りしかば、えならで、これ出できにし後よりはた人の心なりけること、これ物のこゝろ知るまで見むとおぼしなりて今まで侍りつること」と二人語らひうち泣きて、四の君、

「人のうへと昔は見しをありふれば今はわが身のうさ世なりけり」。三の君、

「うきことの淵瀬にかはる世の中はあすかの川のこゝちこそすれ」といひ明し給へり。つとめて贈物見給うて「色より始めて翁の身にはあまりたる。このおびはいと名だかきおびを何しに賜はらむ。返し奉らむ」とのたまふほどに、「衛門のかうの殿より御文」といへば、いそぎ取り入るゝ人おほかり。

「きのふは暮れゆく惜しくも侍りしかな。急がせ給ひしかば年ごろの御物語も聞えさせずなりにし。今よりだに、時々立ち寄らせ給はずば心憂くなむ。これなどか忘れさせ給ひにし。猶はや渡らせ給ひね。さらずば猶びんなきさまにおぼしたらむとかぎりなく思ひ給へなげくべくなむ」

とあり。四の君のもとに御文あり。

「としごろ、いとおぼつかなく思ひたまへつゝかくなむときこえまほしながら、つゝましき事多くて忘れやし給ふらむ。

「忘れにしときはの山の岩つゝじいはねど我にこひはまさらじと思う給ふにこそ、いと心うけれ。うへにも御方々にも今は對面にと思ひ給ふれば、うれしくなむと聞え給へ」

とあり。ばらから四人なみゐたる程に、とりかはしつゝ見給ひて、姉君達我が許にも物し給へかしと今は語らはまほしきぞいみじきや。落窪に居たりしほどは「いかに」と問ふ人もなかりしものを、おとゞの御返し、

「やがて昨日はさむらはむと思ひしかど、方のふたがりて侍りしかばなむ。今よりはいと

うれしく明暮もさむらひぬべしと思う給へしも命延びてなむ。さて賜はりし劵は賜はるまじきよしは聞えはべりしを、おほかうせさせ給ふ御勘當のふかきなめりとかしこまり思ひ給ふる。御おびもかゝる翁の身には闇の夜に侍るべければ返し參らせむと思ひ給ふれど、御志のほど過してとなむさむらひつる」

とあり。四の君の御返し、

「年ごろは、杉の去るしもなきやうにて尋ね聞えさすべきかたなくなむ思う給へるに、いともいとも嬉しくてなむ。人もよしとは心憂くも推しはからせ給ひけるかな。

うちすてゝわかれし人をそことだに知らで惑ひしこひはまされり」ときこえたまへり。かくてのちはこゝろ去らひつかうまつりたまふ事かぎりなし。おとゞはたとしへなきまで尋ねおはす。越前の守大夫など唯今の時の所なれば耻をすてゝ參り仕うまつる。をんな君は嬉しきものにおぼして、いかでとし給ふ中に大夫をば御子のごとおぼしたり。「いかで今は北の方君達にも對面せむ。こなたにもわたり給へ。母君にはちひさくて別れ奉りし後、見なれ奉りしまゝに親となむ思ひ聞ゆる。いかで仕うまつらむと思ふに、この年ごろおぼしや疎みたらむ女君達へも同じ心に聞え給へ」とのたまふ。我をおぼしたる事ぞ限なき」とかたれば、北の方、いと德つきにしかば、さも思ふらむ、我にもいみじくおぢたり、懲せしを思ひおかば、この子ともをぞびんなく思はざらまし、男君のおぼしおきたるにこそありけれ、まことかの物縫ひし夜、ひかへたりけるはこの君なりけりと思

ひよわることとありて、やうやう文かよはしていひつく。かゝるほどに、衞門の督、女君と語らひ給ふ、「あはれ中納言こそいたく老いにけれ。世の人は老いたる親のためにするけうこそいとけうとおもふ。七十ぢやむそぢなる歳の賀といひてあそびがくをして見せ給ひ、又若菜まゐるとて年のはじめにする事、さては八講といひて經ほとけかき供養する事こそはあめれ。さまざま珍しきやうにせむとては、いかなる事をかせむ。生きながら四十九日する人はあれど、子のするにてはびんなかるべし。これらが中にのたまへ。せむとおぼさむ事せさせ奉らむ」と申し給へば、女君いと嬉しとおぼして「がくはげにおもしろくをかしき事にこそあれど、後の世まで御身にやくなし。四十九日はげにゆゝしかるべし。八講なむこの世もいと尊く、後の爲にもめでたくあるべければ、去て聞かせ奉らまほしき」とのたまへば、男君、「いとよくおぼしたり。こゝにもさなむ思ひつる。さらば年の内にし給へよ。いとたのもしげなくなむ見え給ふ」とて明くる日よりいそぎ給ふ。はつきほどにせむとて經佛書かせ、ぶしよばせて佛きよらなるべくと男君、女君心にいれ給へり。國々に絹、糸、しろがね、こがねなど召す。御心にこゝろもとなしとおぼす事なし。かゝるほどに、俄にみかど御心地なやみ重くて、おり給ひて、とうぐう位に即かせ給ひぬ。この男君の御妹の女御の御腹の一の宮になむおはしける。その御弟の二の宮、坊に居させ給ひぬ。御母の女御、きさきに立ち給ひぬ。衞門の督、大納言になり給ひぬ。中納言には三の君の御男。宰相には大納言の御弟の中將なり給ひぬ。すべてこの御ゆかりのよろこびし給へるいとめでたくこの御代にのみなりはてぬ。

大納言の御ぼえいみじかるまゝに、しうとの中納言、いとおもだゝしく嬉しと思へり。七月の中にはおほやけの事いとあわたゞしくいとまなきうちにも、この御八講の事たゆみ給はず。はつき廿一日にとなむ定め給ひける。我が御殿にてし給はむとおぼせど、繼母君達たはやすくわたらじとおぼして、中納言殿にわたり給ふべしとなむ定め給ひて、中納言殿をいみじうすりせきせ砂子敷かせ、新しく御簾疊など用意せさせ給ふ。中の君の御男の左少辨、越前の守なども皆この殿のけいしかけたれば、やがてそれらを行事にさして行はせ給ふ。寢殿を拂ひ去つらひて、大納言殿のみつぼねは北の廂かけたり。君達北の方のみ局には塗籠の西のはしを去たり。あす事はじめむとて夜さりわたし奉り給ふ。「せばからむを」とて人々はとゞめ給ひて車六つ七つして渡り給ひぬ。この度ぞ北の方君達などにも對面ありける。濃き綾の袿、女郎花色の細長着給へり。色より始めてめでたければ、かの縫物の祿にえ給ひしきぬのをりを思ひ出づる人あるべし。あるじの北の方、三四の君と事の中に昔物語去給ふ。昔落窪といひしときも衰へずをかしげなりと見しを、今は物々しく北の方とさへねびて、けはひ殊にすぐれて聞えし君達着給へる物こよなく劣りて見ゆ。北い方、いかゞはせむと思ひなして、物語して、「まだをさなくておのが許に渡り給ひにしかば我が子となむ思ひ聞えしを、おのが本去やうにたち腹に侍りて思ひやりなく物いふ事も侍るをさやうにてやもし物しきさまに御覽せられけむと限なくいとはしくなむ」といへば、君は下には少しをかしく思ふ事あれど、「何か。更に物しき事やは侍りけむ。思ひおく事侍らず。唯いかで思ふさまに志を見

え奉りにしがなと思ひおく事とて侍りしことなむ」とのたまへば、北の方、「嬉しくも侍るかな。よからぬものども多く侍るなれば思ふさまにも侍らぬに、かくておはするをなむ誰も誰も喜び申し侍るめる」と申し給ふ。明けぬれば、つとめてより事疾くはじめ給ふ。上達部いと多かり。まして四位五位數知らず多かり。「年ごろ知ひ惑ひ給へる中納言はいかでかく時の人を聖にてもたりけむ、さいはひびとにこそありけれ」と言ひあざむ。聖の大納言はましてはたちあまりにて、いと清げにて物々しく出で入り事行ひあり給へば中納言いとおもだゝしく嬉しくて老心地に涙をうち落して喜び居たり。御弟の宰相の中將、三の君の男の中納言いと清げにさうぞきつゝ參り給へり。三の君、中納言を見るに絶えたりしむかし思ひ出でられて、いと悲しうて目をつけて見れば、さうぞくより始めていと清げにて居たるを見るに、いと心憂くつらし、我が身のさいはひあらましかば、かくうち續きてありき給はじも、こよなきほどならでいかによからましと思ふに我が身の心うくて、人知れずうちなきて、

「思ひ出づやとみれば人はつれなくてこゝろよわきは我が身なりけり」と人知れずいはる。事はじまりぬ。阿闍梨律師などいとやんどなき人多くて、あはれに尊き經どもとて經一部を一日に充てゝ九部なむ知始めたりける。無量壽經阿彌陀經などそひたるなりけり。一日に佛一はしらを供養せむと始め給ひければ合せて佛九はしら、經九部なむかゝせ給ひける。清げなる事限なし。四部にはいろいろの色紙に、いろいろのこがね知ろがねまぜて書かせ給うて、軸にはいと黑うかうばしきぢんをしておき口の經箱に一部づゝ入れたり。今五部は紺

の紙にこがねのでいして書きて、軸には水晶して蒔繪の箱、蒔繪には經の文のさるべき所々の心ばへをして一部づゝいれたり。唯この經佛見る、おぼろげのものは入らじと見えたり。朝座夕座の講師に鈍色の袷のきぬどもかづけ給ふ。すべて心もとなき事なく知盡さむと思ひ給へり。日のふるまゝにたふとさまされば、すゑざまには人々も上達部もまゐりこむ。五の卷のはうもつの日はよろしき人より始めせうそこを聞え給へりければ、所いとせばげなり。はうもつの事も充て給ひければ、袈裟やず數やうの物は多くもて集まりたるに取りて奉らむとするほどに、左のおほいとのゝ御文大納言殿にあり。見たまへば、

「今日だにとむらひに物せむと思ひつれども、あしのけおこりてさう束する事の苦しければなむ。これは知るしばかり捧げさせ給へとてなむ」

とあり。青き瑠璃の壺にこがねの橘入れて、青き袋にいれて五葉の枝につけたり。北の方、女君の許に御文あり。

「急ぎ給ふ事ありとは承りしかど、のたまふこともなかりしかば、もろゞゝろなるさまも人見給はずやありけむ。これは女はかくまめやかなるものを引き出でけると塵を結ぶと聞えてはべるは」

とあり。唐のうすものゝ枠葉むら濃なる一かさねに、いと清らなるあけの糸五兩ばかりつゝを女郎花につけ給へり。ずゞの緒をおぼしたるなるべし。御かへり聞え給ふほどに、中納言殿よりと中の君の文あり。見給へば、

「いとたふときことおぼしたちけるを、かくなむとものたまはざりけるは、よろこぶ功德入れさせ給はじとにやと心うくなむ」

とて、こがねして開けたるはちすの花を一枝つくりて、少し青くいろどりなして、しろがねをおほきやかに露になしたり。又中宮よりとて宮のすけ御文もて參りたり。これはけいめいして、御使けそうならぬ方にするて、越前の守、大夫などいひしこの殿の御たまはりにて左衛門の佐になりたるなど盃さしあるじし給ふ。御文には、

「今日はさわがしきやうに聞けば何事もとゞめつ。これはけちえんのために」

とあり。こがねのすゞ箱に菩提ずの緒なむ入れさせ給ひたりける。はらからも人も見るに、男がたのやんごとなき人にかく用ゐて、我も我もと玄給ふにこよなきさいはひと見ゆ。中宮の御かへりまづ聞え給ふ。

「いといとかしこまりて承りぬ。今日の事はたゞこのおほせをなむみづからさゝげてかしこまりて聞えさせ侍る。よろづはこの事はてゝみづから參り侍りて又々かしこまりごと啓すべき」

と聞え給ふ。御使には綾のひとへがさね、袴、朽葉のからぎぬ、うすものゝかさねの裳かづけ給ひつ。皆事はじまりて上達部君達さゝげてめぐり給ふ。白銀黃金のはちすの開けたるをなむ人々多くしたりける。中納言のみなむしろがねを筆のかたに造りて、やい軸にいろどりなして、うすものにすかし給へりける。袈裟などやうのものは數もしらず取りつゝみてなむお

きたりける。たきゞにはすはうをわりて、少し色黑めて組してゆひたりける。日ごろの中に今日おむひとまうに物入りたらむと見えける。やんどなき上達部の持ちてめぐり給ふを見る人々、「いみじう老のさいはひ面目ありける人かな」と譽む。「猶人はよからむむすめをこそ神佛に申してもたらめ」といひあへり。かくて九日、いといとかしこう玄出で給ふ。三の君、中納言をけふやけふやと思ひ出で給ふに、さもあらで止みぬ。いみじう心うしと思ひつるたましひやいきてそゝのかしけむ、事はてゝ出で給ふに暫し立ちとまりて左衛門の佐のあるをよび給ひて、「など疎くは見る」とのたまへば、佐、「などてかむつまじからむ」といらふれば、「昔は忘れにたるか、いかにぞ。おはすや」とのたまへば、「誰」と聞ゆれば、「誰をか我は聞えむ。三の君と聞えしよ」とのたまへば、「知らず。侍りやすらむ」といらふれば、「かくきこえよ。

いにしへにたがはぬ君がやど見ればこひしき事もかはらざりけりとぞ。世の中は」といひて出で給へば、佐、かへりごとをだに聞えむとおぼせかし、名殘なくもある御心かなと見る。いりて、「かうかうのたまひて出で給ひぬ」と語れば、三の君、暫し立ちとまりて給へかし、なかなか何しに音づれ給ひつらむ、いと心うしと思ひて返事いふべきにしあらねば、さて止みぬ。大納言殿、御としみの事などいといかめしうして歸り給ひぬ。されば「今ひとひふたひばかりだにおはしませ」と申し給へど、「せばくて、をさなき者どもいといとむづかしうて侍れば、今これらとゞめてまゐでこむ」とて、強ひて大納言殿わたし奉り給へば、おとゞ、

「いとたふとく哀に侍りつる事をさるものにて、中宮、左大臣殿より始め奉りてかしこきみ心ばへを見奉りつるに、命延びて、老の面目とはおろかなり。翁の爲には經佛一卷を供養し給はむなむいみじきことに侍るべき。かくまうなる事をせさせ給へる事」と泣く泣くよろこべば、大納言も女君は更にもいはず、かひありて嬉しとおぼす。「この翁のいとかしこき物と思ひ給へて誰に傳へ置かむと年ごろかくし置きて、中納言殿いまし通ひし時、もとめ給ひしかど取り出でずなりにしは、若君の御料にて物しおき給ひけるにこそありけれ。若君に奉らむ」とて、いとをかしげなる錦の袋に入れて奉り給へば若君ゑり顔にうち笑みて取り給ひつ。笛いと美くしとおぼす。ねもかしこし。さて殿へ夜更けて渡り給ふ。大納言、「中納言のいみじく嬉しと思ひ給へりしかな。何事を文して見せ奉らむ」とのたまふ。かゝるほどに、左のおとゞのたまふ、「老いもて行くまゝに衛府づかさ堪へず、若う華やかなるわかをとこのそくにてなむ堪へたる」とて、かけ給ひつる大將、大納言に讓り給ふ。御心にかなへりける世なりければ誰かは妨げむ。いと華やぎまさり給ふ事限なし。中納言いよいよ嬉しう喜び給ふ。いと大事にはあらねど起き臥し惱み給ふを、大將殿の北の方歎き給ひて、あはれにの給ひしを、今少し仕うまつらむと思ふに、今暫しだにおはせなむと念じ給ふ。ことしなんなゝそちになり給ひけると聞き給うて大納言のおぼしける、ゆくさき遠く、又も云てむとおぼゆる人ならばこそ長閑になども思はめ、人も云きりたるやうに思ふとも七十の賀せむ。我がせむと思ひしほいとげむ、懲ずべきかぎりはあまたゝびしてき、嬉しとおぼゆる事は唯ひとたびにて止みなばいとかひなし、死にて後には萬の事すれども誰か見はやし嬉しと思はむとする、こたみばかりの事、力の堪へむ限はせむと思はし立ちていそぎ給ふ。國々の守どもゝ唯みけしきのまゝに仕うまつり、いかでいかでと思ひたれば、ひとつづゝ物のたまへど、いとやすう、ひとびとの御前のきやうの事をなむわて給へりける。衛門の尉はかうむりを得て三河の守になりにければ、衛門はただ七日がほどいとま申して、ゐてくだりけるに、女君、旅の具云ろがねのかなまり一具、さうぞくよりはじめていとくはしくなむ云てくだし給ひける。そが許にも「かうかうのいそぎをなむする。絹少し」と召しにはしらせにつかはしたりければ、すなはち守は男君の御許に百匹奉り、めは北の方の御許に茜に染めたる絹二十匹奉れり。舞すべき子どもの事など召し仰せなど云給ふ。御調度つくし給ふ。こがねなむ多く入りける。父おとゞ「などかくしきりて、まうなることはする」とのたまはす。「さはあれど後のよはひいくばくもあらじ。生ける時嬉しとおもはえさせよ。こゝなる子の事は我せむ」とのたまひて、もろ心にいそぎ給ふ。大將殿をいみじくかなしく云給ひ、御心に入りたまふ事なればなりけり。云もつき十一日になむ云給ひける。こたみ我が御殿に皆ひきゐて迎へ奉り給ひてなむ。委しくはうるさければ書かず。例の人の唯いとやかましう猛なりけり。屏風の繪、ことどもいと多かれどかゝず。云るしばかり、たゞはしのひとひら、ゆかつきの云歌

「朝ぼらけかすみて見ゆるよしの山桜や夜のまに越えて來ぬらむ」。ささらぎ、櫻の散るをあふぎて立てり。

「さくら花ちるてふことは今年より忘れてにはへ千代のためしに」。やよひ三日、桃の花咲きたるを人折れり。

「三千とせになるてふ桃の花ざかり折りてかざゝさむ君がたぐひに」。うつき、

「郭公待ちつるよひの去のび音はまどろまねどもおどろかれけり」。さつき、菖蒲ふく家にほとゝぎすなけり。

「聲立てゝ今日しも鳴くは時鳥あやめ去るべきつま屋なるらむ」。みなつき、祓去たり。

「みそぎする川瀬の底のきよければ千年のかげをうつしてぞ見る」。ふつき七日、七夕まつれる家あり。

「雲もなくそら澄みわたる天の川今やひこぼしふねわたすらむ」。はつき、嵯峨野にところずどもせんざいはりに、

「うちむれてはりに嵯峨野の女郎花つゆもこゝろをおかでひかれよ」。ながつき、白菊多く咲きたる家を見る。

「時ならぬ雪とも人のおもふらむまがきにさけるしら菊の花」。かみなつき、紅葉いとおもしろき中を行くに、散りかゝればあふぎて立てり。

「旅人のこゝに手向くるぬさなれや（紅葉ヤてらる山ノもみぢば・神）」（十一月云々歌論）

「上句歌論」よろづ代を經て君につかへむ」。去はす、山に雪いと白くふれる家に女眺めて居たり。

「雪ふかくつもりてのちは山里にふりはへて來る人のなきかな」。御杖の、

「八十坂を越えよとされる杖なればつきてをのぼれ位山にも」などなむありける。廣くおもしろき池の鏡のやうなるに龍頭鷁首樂人ども船に乘りて遊び居たるはいみじうおもしろし。上達部殿上人は居あまるまで多かり。左のおほいとのおはしたり。かづけものなむ、數しらずありける。中宮よりも大袿十かさね中納言殿よりかづけもの十かさね（袿ヲさまざまに奉り給へば、宮の御達、藏人も皆物見むとてまかでぬ。中納言忽ち御心地も止みてめでたし。日ひとひあそびくらして事はて、、夜更けてまかで給ふに物かづけ給はぬはなし。やんごとなきには御贈物そへて去給へり。左の大い殿、中納言殿にいとかしこき馬二つ世に名だかきさうの琴二つ（絃奉り給ふ。御まへの人々に隨ひて物かづけ給ひ、こしざしせさせ給ふ。越前の守に、「この事ばかりは我が思ふやうにせよ」とてあて給ひければ、いとめやすくしたり。二日三日ばかりとゞめたてまつり給ひて渡し奉り給ひける。女君かくし給ふ事をいとうれしと聞え給ふ。大將いとかひありておぼす。

かくてやうやう中納言おもくなやみたまへば、大將どのいとほしくおぼしなげきて、ずはふあまたたせさせたまへば「中納言、あにかはいまはおもふこともはべらねばいのち惜しくもはべらず。わづらはしく、何かはいのりせさせたまふ」とまうしたまふ。よわるやうになりたまへば「なほ死ぬべきなめり。いましばし生きてあらばやと思ふは、われ年ごろしづみて、きのふ今日のわかうどゞもに多く超えられてなりおとりつるなむ耻に思ひける。我が君のかばかりかへりみ給ふ御世に、命だにあらばなりなむと思ひぬるに、又かく死ぬれば我が身の

大納言になるまじき報にてこそありけれと、これのみぞあかず覺ゆる事、さては老のはて死のはてのおもだゝしさは、おのれにまさる人世にあらじ」とのたまふを大將聞き給うて、あはれにおぼゆる事かぎりなし。女君、「いかで大納言をがな一度なし奉りて、他かぬ事なしと思はせ奉らむ」とのたまふを聞き給ひて、げにさせばやと思せど、かずより外の大納言になさむ事かたし、人のはた取るべきにあらず、我のを讓らむ御心つきて、父おとゞの御許にまうで給ひて、「かくなむ思ひ給へるを、をさなき者ども多く侍れど、それが德を見すべき行く末あるべき事にもあらぬかはりにはこの事をし侍らむと思ひ侍る。みけしきよろしう定めさせ給へ」と申させ給ふ。「何か。さ思はむ事を早うさるべきやうに奏し奉らせよ。大納言はなくともわしくはあらじ」と我が心なる世なればと思しての給へば、限なく喜び給うて申し給うて、奏し奉らせ給ひて、中納言、大納言になり給ふ宣旨くだし給ひつ。これを聞きて大納言、煩ふ心地になくなく喜び給ふさま、親にかくよろこばれ給ふに功德ならむと見ゆ。よろこびにおきたちて願たてさす。定業の命にても延べ給へと人にも願立てさするけにや、少しをこたりて、思ひつよりて起き居て、うちへ參るべき日見せ、とかくせさすべき事あておこなふとても、「我子ども七人あれど、かく現世後生嬉しきめ見せつるやありつる。かゝりける御ーを、少しにてもおろかなりけむは我が身の不幸なるめ見むとてこそありけれ。子ども三人智とりたれど今に我にかゝりてこそはありつめれ。あまさへ憂き耻の限こそ見せつれ。この殿は塵ばかり仕う奉るともなけれど、御かへりみをかくこよなく見る、却りては耻しき心地

して。我死なば、かはりにはをのこごにまれ、をんなごにまれ、君に仕うまつれ」といとさがしういひいます。かゝれば北の方、にくし、疾く死ねかしと思ふ。その日になりていと清げにさうぞきて、男君、女君、一ところにおはすほどにて拜み奉り給へば、「いとかしこし」と聞え給へば、「おのれはおほやけもかしこくもおはしまさず、唯わが君のみこそ嬉しくかたじけなく思ひ給へ。この世に仕うまつらで死ぬとも、大かたまもりとも なり侍りてなど念じ侍る」と申し給ふ。それよりまかで給ひて、左の大い殿に參り給うて又うちに參り給ふ。人々に祿給ふ事も同じやうにて猛なる事もなければ書かず。大納言はその日より臥して、又重く苦しうし給ふ。「今は塵ばかりも思ふ事なければ、死なむ命も惜しからず」といひ臥し給へり。いと弱くなり給ふと聞き給ひて大將殿の北の方渡り給へり。おとゞ、かたじけなく嬉しと思ひ給へり。御むすめ五人つどひて仕うまつりなげき給ふ。おとゞ、ことみこどもの仕うまつり給ふは物ともおぼさず。大將殿の北の方の添ひおはするを嬉しと、いみじうめでたきものにおぼして、ものもまゐり給ふ。湯漬をなむまゐり給ひける。たのもしげなくなりはて給ひて、「生ける時そうぶんしてむ。子どもの心見るに、はらから思ひせず。女どちのうちにもうとうとしくあめれば、ろなううらみごとども出できなむ」とて越前の守を御前に呼びすゑて所々のさうの劵、おびなど取り出でゝえらせ給ふに、少しよろしきは大將殿の北の方に奉り給うて、「こと子どもこれを少しにてもうらやましと思ふべからず。同じやうに力人り、親にけうじたるだに少し人々しきになむよろしき物とらする。いはむやあまたの年ごろかへり

みるを恩にやと思へ」と、いとさかしうのたまふを君達はことわりとおぼしたり。「この家も、ふりてこそわめれど、廣うよろしき所なり」とて大將殿の北の方に奉り給へば、北の方聞きて泣きぬ。「のたまふ事どもはさものたまひぬべけれど、又いかゞ渋み聞えざらむ。年ごろ若うより添ひ奉りて、六七十になるまで見たてまつりたのみ奉りつる事又なかりつる。子ども七人もたり。などこの家をおのれに賜はらざらむ。子どもをこそ我にけうずることなかりきとておぼしもすてめ、世の人の親は、もはらさいはひなきをなむなからむ時いかにせむとは思ふなる。大將殿におい奉りては、この家は得給はずともいとよくありなむ。男君もいとたのもしう、みつばよつばもまうけ給ひてむ。三條もさばかり玉のやうに造りて奉りたり。いとよし。をのこにおきてはをとこある子どもはかばかしく家もたるもなかりき。よしそれは言ひもてゆけば、とてもかくてもありなむ。おのが身この二人の子どもはこゝ立ちねと懲せられむをりは、いづこにかあらむとするぞ。おほぢにたてとや。いと道理なくものなのたまひそ」といひつゞけて泣けば、おとゞ「子どもゝ思ひ捨つるにはあらねどうるはしくこそはせめてなくとも、世に大路にも立ち給はじ。年ごろの苦勞には子どもを見たまへたりとも仕うまつりてむ。越前の守我がかはり取りそへて仕うまつれ。三條の家はわが家かは。はんぢやうかの御領なり。大將殿も見給ふに、少しはかばかしきものえ奉らで死なばいふかひなきものとおぼすべし。天が下にのたまふとも、こゝはえ奉らじ。けふあすとも知らぬ身を、なうらみ給ひそ。物ないはせたまひそ。いと苦し」とのたまへば北の方、又うち出づれど、子ど

も集まりていはせず。大將殿の北の方これを聞き給ひて、いとはしく哀とおぼして、「北の方の聞え給ふ事いとことわりなり。こゝには唯何もかもなたびそ。君達にあまぬく奉らせ給へ。ましてこゝにたれもたれも住みつき給へるに、おもはぬ方に侍らむ、いと見ぐるし。猶はや奉らせ給へ」と責め申し給へば、おとゞ「おのれはえ取らずまじ。おのれ死にはべらむ時、ともかくも心とし給へ」とて更に聽き給はず。よきおびなどたまさかにありけるなども皆大將殿に奉り給ふ。越前の守物しと思へど、親の御けしき得給ふ人の御有樣いふべきにあらねば、うちも出でず。あるべき事どもよくしたゝめて、大將殿の北の方をよろづにうれしく、「御德により面目なるめを見つる」と返す返す申し給ひて「はかばかしからぬ女子どものいとあまた侍りつる、よくよくかへりみ給へ」と申し給ふ。「承はりぬ。身の堪へむ限はいかでか仕うまつらざらむ」とのたまへば、「いと嬉しき事」とのたまふ。「むすめどもこの御ことに玄たがへ。君と思ひ奉れ」などさかしくの給ふまゝにいとよわくなり給へば、誰も誰もいみじくおぼし歎く。遂に七日に消え入り給ひぬ。しもつきの事なりけり。いとはしむ時にもあらず。ことわりとはおぼしながら、御子ども女男あつまりて、惜みなげき給ふさまいとあはれなり。大將殿は若君たちにそひ給うて、我が御殿におはすまゝに立ちながらおはしつ。泣きあはれがり、かつは後の御事あるべきやうの沙汰もみづから入り居なむと玄給うければ、父おとゞ「新しきみかどの位たまうてほどなく、長々とあらむいとまはいとあしかるべし」とせちにの給ふ。女君も、「をさなき人々こゝに迎へむは物忌などするにゆゝしかし。籠めお

きたるに殿さへおはせずば、いとうしろめたなし。な居給ひそ」と聞え給ひければ、我が御殿にてならはぬひとりずみにて、君達うち眺めわそばしてさうざうしくおぼさる。かく疾く亡せ給ひぬるを見給ふにつけても、よくぞ思ふ事をいそぎしてけるとおぼす。かの殿には御忌なき日とて三日といふにをさめ奉り給ふ。大將殿の御送に四位五位いと多く歩みつゞきたり。「げにのたまひしやう、死のさいはい限なし」といふ。御忌のほどは誰も誰も君達例ならぬ屋のみじかきにうつり給うて、寢殿にはだいとこたちいとおほくこもれり。大將殿おはせぬ日なし。立ちながら對面し給ひつゝ、すべきやうなど聞え給ふ。女君の御服のいと濃きに、さうじのけにすこし青み給へるがわはれに見え給へば、男君うちなげきて、

「なみだ川我がなみださへ落ちそひて君がたもとぞふちと見えける」とのたまへば、女、

「神くたすなみだの川のふかければふちの衣といふにぞありける」など聞え給ひつゝゆきかへりありき給ふほどに、みそかの御忌はてぬれば、「今はかしこに渡り給ひね。子ども戀ひ聞ゆ」とのたまへば、「今いくばくにもあらず。御なゝなぬかはてゝ渡らむ」とのたまへばこゝになむ夜はおはしける。はかなくて御なゝなぬかになりぬ。この殿にてなむしける。こたみこそはての事なればとて、大將殿いといかめしうおきて給ひけり。子ども我も我もと程々に隨ひて玄たまひければいと猛にぎらぎらしき法事になむありける。事はてゝ、大將殿、「今はいざたまへ。部屋にもぞ籠むる」とのたまへば、「けしからず、今はかけてもかゝる事なのたまひそ。忘れざりけりと聞き給はゞおぼしつゝむ事出で來なむかし。なき人の御かはり

には、よろしうおぼされにしがなとこそ思はめ」とのたまへば、「さらなる事、女君達にも君こそは問ひ給はめ」とのたまふ。越前の守かく顧み給ふと聞きてかのおとゞの奉れとてそうぶんし集め給ひしものども所々のさうの劵とり出でゝ、もて參りて、怪しう侍れどもむかしびとのいひおき侍りしかばなむ」とて奉れば大將殿見給ひければ、おび三つ、一つは我がとらせしなり。今一つはさすがにわろし。さうの劵こゝの圖などなむありける。大將殿「けしうはあらぬ處々をこそは領じ給ひけれ。この家はなどか君達北の方の御中には奉り給はざりし。ことどころのあるか」との給へば、女君、「さもなし。こゝはかう久しう住み給へれば、得じ。北の方に奉りてむと思ふ」とのたまへば、男君、「いと善きこと。これは君得給はずとも、おのれあればおはしなむ。皆うらみの心どもあらむ」とうち語らひ給ひて越前の守近う呼び寄せて「そこにぞその事どもは玄らむ。などいとこゝがちには見ゆるぞ。がうけとわづらはしがりてあるか」とうち笑ひ給へば、「更にさも侍らず。もと物し給ひし時、皆玄置きてわづけられたるなり」と申せば、「さかしう玄給ひけるかな。こゝに誰々も住みつき給ふめるを、何しにかはとこゝにのたまふめればなむ。北の方玄り給ふべし。このおびふたつは衞門の佐と、そこにと一つづゝ、三のなり所の劵とおび一つとゞめつる。むげにさしおき給ひけむ御心ばへの、かひなきやうなれば」となむのたまへば越前の守「いとふびんなる事、みづから玄置き侍らぬ事なりとも殿になむ玄ろしめすべき。いはむや更に我がかく玄おくなどいひおき侍りにし。違ひてはたれもたれも皆少しづゝ分たれ侍るめるものを」とて取らねば、大

將「怪しくもいふかな。みづからの心ひがさまに云おかばこそあらめ、かく見給へばこゝにえ給ふ同じ事、この君はおのれあらむ限はさても云てむ。うちつゞきをさなき人あればたのもし。かうてはやう四の君なむ思ふ人すくなきやうにものし給ふなるを、おのれいかうに云り聞えむと思ふ。その君たちの得給はむに添へられよ。今二所をば御男達につけて仕うまつるべき」との給へば、越前の守畏まりよろこぶ。「まづかくなむと物し侍らむ」とて立てば、「もし返しなど云給はむ。取りて物し給ふな。むつかし。同じ事をのみいへば」とのたまふ。「おびは猶かくて人に賜はせ、つかはせ給はむ」と申し給へば、「今用ならむをりは物せむ。疎き人達にあらねば」とて強ひて取らせ給ふ。守、北の方君達に、「かうかうなむの給へる」といへば、北の方、「この家はいとをしかりつるに、いと嬉しく」とのたまへば、猶我はと傾じ代へらるゝと見ると思ふに、いと妬ければ、「落窪の君のかく物し給ふか。あなうれはしの事や」といふに、越前の守唯腹だちに腹立たれて爪はじきをして、「うつしごゝろにはおはせぬか。さきざきはいとはしく耻かしき事のありけるにおもてていたき心地す。人のいふべき事か。まろらをいたづらになし給はむとや。物しとおぼしける程は、いかばかりの耻を見ちようぜられ給ひし。ひきかへて、かくねんごろにかへりみ給ふ御徳をだにかつ見てかくのたまふ。まして昔いかなるさまに。人ぎゝも我が身も物ぐるはしや。落窪何窪とのたまふ」といへば、北の方、「何ばかりの徳か我は見侍る。おとゞは父なればこそせしにあめれ。取りはづして落窪といひたらむ、何か僻みたらむ」といへば、越前の守「哀の御心や。物思ひ知り給はぬぞかし。

徳は見ずと、御心にこそさしあたりて見ずとおぼすらめ。大夫、左衛門の佐になりたるは誰が云給ふにか。景純は此の殿の家司にて加階せしは誰がせしぞ。今にても見給へ。父をのこも人々しくならむ事は唯この御徳、先は家も賜はぬにこの家領じ給はましかば、いづこにひきつゞきておはせまし。まづ唯おぼしわはせよ。目のまへなる事どもを見れば嬉しくあはれにおぼえ給はずや。景純等も國を治めて徳なきにしあらねど、めをまづ思ふとて、母へはえ奉らず。今にてもえ奉るまじきは子は志の薄きぞかし。おのが生みたらむ子どもだにかくおろかにて仕うまつらぬ。御身はかく哀なる御心ばへを泣く泣くこそ喜び聞え給はめ」とともにかくに言ひ知らすれば、げにと思ひていらへもせず、「御かへりいかゞ聞えむ」といへば、「いさ、ものいへばひがみたりとかしがましういへば聞えにくし。よきこと知りものゝこゝろ知りたらむ人推しはかりて申せかし」といへば、守、「人の爲に申すにあらず。御身の爲の事なり。三四の君の御前をもいかにも仕うまつらむと大將殿ののたまふは北の方の御心に隨ひ給ふにこそ。ひとつ腹の御心だにかくやはある」とあめれば、「かくこの御かたのの給ふ事まろはいかに。心うし。我が得たらむたばの庄は年によね一斗だに出で來べきにあらず。今一つは越中にてたは易く物もはかるべきにあらず。辨の殿のえ給へるは三百石の物出でくなり。かく遠くわしきは景純がえりくれたるぞかし」とさいなみけれど、誰も誰もおとゞの云おき給ひしを皆見給ひて、「かくはの給ふべき。唯これにて覺せ。隔なくかたみにかへりみるべき人だにかゝる心をもたまへる」といへば、北の方、「あなかしがまし。いたくな言ひ云づめ

そ。誰も誰も貧しければ言ふにこそあらめ」といふ程に左衛門の佐の來あひて、「心にもあらずおぼえ、身貧しけれど、よき人はかくことに操にをかしうぞある。まづ北の方のこゝにおはせしほどは聞い奉り給ひしが、聊のたまへる事聞えざりきかし。かく心苦しき御年のよはひも、あはれに隨ひて心やすらかありとこそはみそかにのたまふめりしか」とのたまへば、北の方「いかで我死なむ、憎み惡しきものにの給へば、罪もあらむ」とのたまふに、「あなかしこ、よしょし、聞えさせじ」とて二人ながらかいつゞきて立てば、さすがに、「やゝ、この御返り事申せ」とまねき給へど、聞き入れぬやうにていぬ。左衛門の佐、「などかくあしき親をもち奉りけむ。いかで御心ようなるべからむといのりをだにかけむ。我等か爲にも大事なり」といひて、御返り事は諸共にいひ合せて大將殿へ聞え給ふ。「畏り承りぬ。こゝにも今は殿ひとりをなむたのもしき者に思ひ聞えさすべき。賜はせたる所々の券は若き人々、むかしの御ほいたがはむはいかでかとつゝみ侍るを、御志のかひなきやうにやはとて、玆になむ賜はり留めつる。この殿の御事はいと心ばへ深う奉らるめりし所をあだに物せさせ給はゞ物しくや。なき御影にもといとほしく侍るを、券猶おかせ給ひね」とて券返し奉る。この券をこの越前の守の取りて立ちければ、北の方返し奉るにやあらむといと怪しくて「それはなどもていく。さの給へらむものを、もてこもてこ」と呼び返しけれど、あな物ぐるほし、大事の物をおろかにもいふかなと聞きけり。大將殿の聞き給ひて「よそびとの許へいかばこそものしと思ひ給はめ。北の方の御世の限はおはして後には三四の君に奉り給はゞ同じ事、はや置き

給へれ」とて、皆渡り給ひぬ。女君は、「今またも參りこむ。かしこにも渡り給へ。故殿の御かはりには君達北の方をこそは見奉り仕うまつらめ。何事も覺束なからずとのたまへ。隔なくおぼしたらむをのみなむ嬉しかるべき」などあはれに語らひおき給ひてなむおはしにける。おとゞのおはせし時よりもをかしき物は日ごとに怠らず、君達にもまめなるものは夜中曉にも運び奉り給へば、北の方、げに我が子ども男女あれど、をのこ子はすゞろなるに、我がためはらからのためする、いとあり難しとやうやう思ひなりぬる程に年かへりぬ。つかさめしに左大臣殿太政大臣に、大將殿左大臣になり給ひぬ。次々の御弟どもなりあがり給へれど、一ところの御うへを書きいだす。あいなければかゝず。左大臣殿の北の方のおんさいはひを人々も御はらから達もめでたううらやむ。中の君の御男の左少辨、身いと貧しとて、受領望まむとて左大臣殿の北の方につきて申しければ美濃にいたはりなし給ひつ。越前の守、今年なむ代りけれど、國の事いとよく、なしたりければひきたてよくて、やがて播磨になりつ。衞門の佐は少將になりぬ。たれもたれも「この御德にて」とあつまりて北の方によろこび聞かせ「これやは御德見たまはぬ。今よりはなほ口にまかせて物なの給ひそ」といへば「げにことわり」といひてけり。「この度の司召はこのぞうのよろこびなりけり」と人世にいふ。かく心にまかせて玄給へば、父おとゞのせむとおぼす事もまづこの殿にの給ひあはするを「あしかりなむ。な玄給ひそ」とある事は、せまほしとおぼしながらえ玄給はず。我が心にいなと思す事も、この殿二度三度と玄きりて申し給ふ事はえ聞き給はではあらねば、司めし玄給ふ

にも數ならぬもこの殿の御德にてぞなりける。みかどの御をぢにてかぎりなく覺したる、御身は左大臣ばかりにて御ざえは限なく賢く、おしはりてのたまはむ事を言ひかはすべき上達部もおはせず。父おとゞはた同じみ子といへど、せめて悲しきわまりに添くかしこきものにおぼしたり。なかなか御子なむ親の心ばへには見えける。世の人もかく知りて「おほい殿よりは左のおほいとのにこそ仕うまつらめ。それをぞおほいとのもよしとおぼしたる」とて少し物のぞみたるは參り仕うまつらぬなければ、皆華やかにて出で入り給ふ。左の大い殿の北の方、馬のはなむけさまざまいかめしうし給ふ。殿の人なるうちに御用意かぎりなし。馬鞍、調じ具して賜はり、「かく委しうする事は、こゝにのたまふ事あればなり。かく下りて他かぬ事なくよく仕うまつれ。おろかなりと聞かば更にかへりみじ」との給ふ。美濃の守かしこまりうれしくて、めでたき女がたとおもひて「かうかうなむのたまふ」とまかでゝかたる。「よく仕うまつれと申し給へば、御德にかゝりたる身にこそあれ」といへば、中の君もいとうれしとおぼしたり。「今はいかで三四の君によき人わはせむと人しれず見るに、さるべき人なきこそくちをしけれ」とのたまひわたる。北の方、三四の君に夏冬の御ぞ、御ものなどいとゆたかに、故殿の生きてたてまつり給ひしにも優りていとゆたかに、御位のまさるまゝによろづをし給ひ、こゝろもとなきことなし。御子うみ、御袴着給ふ事どもいとまなくて書かず。はじめの男君は十にて、いとおほきさにおはすれば宮づかへすともわやまちすべからず。かしこくおはすれば春宮の殿上せさせ給ふ。ふみを讀み給ふにもさとくらうらうしく、

心がらもいと賢ければ、若うおはしける帝におはしませば遊がたきにめしつかひ、をかしきものにおぼして、さうの笛ふかせ給ふ時教へさせ給ひければ、父おとゞ、いとかなしとおぼしたり。おほぢおとゞの御殿に養はれ給ふ君は九つになむおはしける。御兄の殿上玄給ふをうらやましげに覺して、「我もうちにいかで參らむ」と申し給へば、おとゞうつくしがりて、「などか今までは言はざりつる」とて俄に殿上せさせ給へば、父おとゞ、「まだをさなく侍るものを」と申し給へば、「なにか。その太郎にはまさりてかしこくなむある。弟まさりなり」とのたまへば、父おとゞ笑ひ給ひぬ。うちに參りて奏し給ふ「これなむ翁の限なくかなしとおぼえ侍る。思しめしてかへりみせさせ給へ。兄のわらはにおぼしませ。つかさえさすとも兄にはまさらむ」と。「すべてこの子を太郎にはせさせ給へ」と常にのたまひて御名もおと太郎となむつけ給へりける。この御弟のひめ君は八つにて、いみじうをかしげになむおはしける。又ば今より二つなくかしづき給ふ。その御おとうとも六つ、をのこ子四つにておはしける。又このごろもうみ給ふべし。かゝるまゝにおろかならず思ひ聞え給へる、ことわりなり。おほきおほいとの、今年なむ六十になり給ひければ、左のおほいとの、賀の事つかうまつり給ふ。事の作法いとめでたし。唯思ひやるべし。舞はこの二所せさせ奉り給ふ。劣らずをかしく二所ながら舞ひ給ひければおほぢおとゞ涙を落してなむ見奉り給ひける。かくすべきことはすでさず、いかめしう玄給へば御德はいやまさりなり。はかなくて月日過ぎて、女君服ぬぎ給ふ。いづれもいづれも子ども相榮ゆるほどにて御はての事などしつくしたまひける。繼

母、かく子どものよろこびをしけるを御徳と喜びければ、いと嬉しとなむおぼしける。左のおとゞ、いかでこの君たちによき聟どりせむとおぼして見るに、さるべきがなとおぼし渡るほどに中納言の筑紫のそちにてくだるに俄にめうせたりけるを聞き給ひて、人がらもいとよき人なりとおぼしきざして、うちに参りあひたるにも心とゞめて語らひ給うて、さるべきをりに此の事のすぢをほのめかし給ひければ、「いとよきことに侍るなり」と申し契りてけり。左のおほいとの、北の方に申し給ふ、「しかじかの人をなむいひちぎりたる。上達部にもあり、人がらもいとよしとなむ思ふ。三の君にやあはすべき。四の君にやあはすべき。いづれにか」との給へば、「いざ御心に定め給へ。まろは四の君にとなむ思ふ。いとほしき事ありしかば、思ひもなほし給ふばかりに」との給へば、「このつごもりにくだるべかなり。疾くして む。北の方にさのたまへよろしう思ひたらば、こゝにてあはせむ」とのたまへば、「文にては長々とも書かむ。みづから渡らむとすれば所せし。少將播磨の守などに詳しくの給へ」などと聞え給ふ。つとめて少將を北の方呼び給うて、みそかにのたまふ、「みづから渡りて聞えなむと思へども、見さしたる事ありてなむ。かうかうの事をの給ふ。いかなるべき事にかあらむ。心にくゝはあれどひとりある女には思ひの外なる事もあり。この人いとよき人なめり。誰も誰も宜しと思ひ給へる事ならばこゝに迎へ奉りてともかくもせむとなむの給ふめる」との給へば少將「いとも畏き仰にこそ侍るなれ。あしき事にても殿の云かのたまはせむは辭び聞えさすべきにあらず。ましていとめでたき事にこそ侍るなれ。かくなむと物し侍らむ」とて

親の御許へいきて「云かじかなむの給ふ。いみじうよき事なり。いかなる人なりとも唯今の時の大臣ばかりの御むすめのやうにてのたまひあはせ給はむをおろかには思はじ。おもしろの駒にいふかひなく笑はれ謗られ給ひしを、これにて耻かくし給へとおぼしたるなめり年は四十ぢ餘りになむある。故おとゞおはして、おほしの給ふともかばかりの事はえ云給はじ。親にまさりて哀に、とざまかうざまにいたくよろしうなさむとおぼしたる限なく嬉しき事、早う四の君、かの殿に參らせ給へ」とのたまへば、北の方、「我がなからむ跡に、かくてのみあるをうしろめたなし。唯受領のよからむをがなとこそ思ひつるに、まして上達部にもあなり。いといと嬉しき事なゝり。かくこまかに後見るがあはれなる事、女君よりは殿こそ御心ばへあはれなれ」と言へば、「殿も北の方をいみじう思ひ聞え給ふあまり、まろまでは來るぞと聞き侍る時もあり。まろをおぼさばこの腹の君達を男も女も思はせとこそ申し給へばいみじきさいはひおはしける。數ならぬかげまさらだに女は見まほしくなむあるを、この殿は、すべてこの北の方より外に女はなしと覺したる。うちに參り給ひてもきさいの宮の女房達の清げなるにたはむれにも目見入れ給はず、夜中にも曉にもかうたどりてぞまかで給ふ。女の男に思はるゝためしには、この北の方をしたてまつるべし」などいひて、「いかゞのたまふとさうじみに問かせ奉り給へ」とのたまへば、「四の君渡り給へ」とのたまへば、おはしたり。北の方、「かうかうの事なむ、かのおほい殿ののたまふなるを、をこに人のおぼしたりし御身を、いともよき事となむうれしく思ふを、いかゞおぼす」とのたまへば、四の君おもて赤

めて、「いとよき事に侍れど、かゝる身をしらぬさまにや。なでふさる事か侍るべき。人のおぼさむもかつはかの殿の御耻ならむ。いと見苦しからむ。心憂き身なれば尼になりなむと思へど、おはせむ限は例のかたみに見え奉るをだに仕うまつるに思う給へてなむ、今までだに侍る」とて泣き給ひぬれば、思ひ知り給へりけりと哀にうち涙ぐみて居たり。北の方、「あるまがまがし。なでふ尼にかなり給ふべき。しばしにても猶華やかなるめ見給はむぞ人もかくぞありけると思ふべき。おのがことに隨ひ給ふと思ひてこの事し給へ」とのたまふ。少將、「御返りはいかゞ申さむ」といへば、「この君はかくなむとのたまへど、こゝになむいと嬉しき事と唯ともかくもみ心しておぼさむかたに云なし給へ」とのたまへば、「を」とて立ちぬ。殿に參りて、しかしかなむありつる事を申し給へば、北の方、四の君ののたまふ事をあはれがりて、「さもおぼすべき事なれど、世にある人はかゝるたぐひ多かなりとおぼしなすべく」とのたまふ。殿聞き給ひて、「北の方だにさのたまはゞさうじみものしとおぼすとも疾くしてむ。いとよき人なり。この月つごもりにくだるべし。同じくば疾く」との給ひき。「はや四の君わたし給へ」と少將にのたまへば、暦とりに遣りて見給ふに、この七日いとよかりけり。何事にかさはらむ、人々のさう束はこゝにしおかれたらむ、まうけの物して西の對にてせむとおぼして、西の對しつらはせ給ふ。「四の君、はや渡り給へ」と聞え給へば、「はやはや」といそがし給へど、ほいなき事なればいとうたて物憂くおぼえて「今々」といひて、更に思ひも立たねば、「この事ならずとも、渡り給へとあらむはおはすまじくやあらむ。あなひがひがし」と

いひて、わたし奉りつ。おとなふたりわらはひとり御供にはありける。御むすめは十一にて、いとをかしげなり。いかまほしとおぼしたるを、見苦しからむとてとゞむるを、いと悲しとてうちなかれぬ。左のおほいとの、待ち受け給ひて對面し給ひて、あるべき事ども申し給へど、なかなか初めよりもはしたなく耻かしうおぼえて御いらへもをさをさ聞え給はず。この北の方の三つが弟にて二十五になむおはしける。おもしろの駒は十四にて聟とりて十五にて產み給へりけるなり。この北の方は二十八になむおはしける。みかよかのほどにこの君をいたはりかしづき給ふこと限なし。七日になりて西の對に我諸共にわたり給ひぬ。御供の人々、なえたるはさう束一具づゝ賜ふ。人少なゝりとて我が御人、おとな三人わらは一人、下づかへ二人とわたし給ふ。さう束どもしつらひたる儀式いとめでたし。母北の方ことはらからたち、唯こゝになむ來りける。暮れゆくまゝに出で入りいそぎ給ふ。弟の少將、忝くうれしと思ふ。夜うち更けて、そちいましける。少將しるべして導きて入れぬ。四の君、人もいふがひなくもあらず。この殿もかくゐたちてし給へば、かなふまじかりけりと思ひなしてなむ出で給ひける。手あたりけはひなどのをかしげなれば嬉しと思ひけり。聞え給ひけむ事は聞かねば書かず。明けぬれば出で給ひぬ。北の方、いかに思ふらむとなげき給へば、「文はたびたびやらねど心長きたぐひなむある。世にもおろかには思はじ。かたみに心あはぬけしきしたるこそかしこくもあらぬことぞ。まづ君を例のけさうのやうにやはわびいられ聞えし。思ひ出でゝ時々聞えしかど、みそめ奉りし後おむなはざりにてやみなましかばと悔しかりし。さお

ぼゆるぞをかしき」など語らひ給ひて、二所ながら起きてこなたにおはしぬ。四の君、まだ帳の内に寢給へり。北の方、「起き給へ」と起し給ふほどに、そちの文もて來たり。男君取り給ふてまづ見侍らまほしけれどかくさむとおぼす事も書きたらむとてなむ。後にはかならず見せ給へ」とて几帳の内にさし入れ給へば北の方取りて奉り給へど、ふとしも取り給はず。「さば讀み聞えむ」とてひきあけ給ふ。四の君、かのはじめのおもしろの駒の書き出だしたりし文を思ひて、又さもやあらむと胸つぶれて思ふに、讀み給ふを聞けば、

「逢ふことのありその濱の眞砂をばけふ君思ふかずにこそとれ。いつのまに戀のとなむありける。「御かへりはや聞え給へ」とあれどいらへも云給はず。おとゞ、「その文云ばし」とせめてのたまへば、「何のゆかしうおぼすならむ」とてさし出し給へれば、「いたう書きそへためるは」とて、「御かへり給へ」とて又さし入れ給ふ。「はやはや」と硯紙具してせめ給ふ。四の君、返事もこの殿の見給ひつべかなりといとはづかしくて、えとみにも書き給はず。「あなみぐるし。はやはや」とのたまへば物もおぼえで書く。

「我ならぬ戀ぢもおぼくありそ海の濱のまさごはとりつきにけむ」とて、ひき結びて出し給へれば、おとゞ、「あなゆかしのわざや。この返事は見でやみぬるこそくちをしけれ」といひ居給へるさまいとをかし。使に物かづけさせ給へり。そちは、この二十八日になむ、船に乗るべき日とりたりければ、出で立ち更にいと近し。かくて左のおほいとのには三日の夜の事今始めたるやうに設け給へり。「人は唯かしづきいたはるになむ男の志もかゝるものをといとはしき事そはりて思ひなる。こまかにと口入れ給へ。こゝにてことはじめたることなればおろかならむ、いとほし」とのたまへば、女君、むかし我を見はじめ給ひし事思ひ出でられて「いかにおもほしけむ。阿漕は、心うきめは見聞えじとおぼして、いかに、まろ見はじめ給ひしをり、始めてやんごとなくのみおもほしまさりけむ」との給へば、殿いとよくほゝゑみて、「さてそらごとぞ」とのたまひて、近うよりて、「かの落窪といひたてられてさいなまれし夜こそいみじき志はまさりしか。その夜思ひ臥したりしほいの皆かなひたるかな。これがたふにいみじう懲じふせて後には喜ぶばかり顧みばやとなむ思ひしかば、四の君のこともかくするぞ。北の方は嬉しと思ひたりや。景純など思ひ知りたなめり」とのたまへば、「かしこにも嬉しとのたまふ時多かめり」との給ふ。暮れぬればゆいましぬ。御供の人々に物かづけ、饗などせさせ給ふ。四日よりは日たけつゝなむ出でける。物々しく清げにめやすし。おもしろの駒といひつつ口にいふべきにあらず。そちのいふ、「罷りくだるべきほどいと近し。したゝむべき事どものいと多かるを、明くればまかり、暮るればまゐるに、怠りてなむあしきに、かしこに人もなし。わたり給ひね。又くだらむといはむ人召し集めてはやおもはしたて。日は唯十餘日になむある」とのたまへば、女君、「とほかゝる所にたのもしき人々をおき奉りてはいかで」とのたまへば、そち「さは一人罷りくだれとや。唯かく一日二日見給ひて、やみ給ひなむとや」とおぼし給ひてわらひたまふさまいとやすらかなり。女君をそち、かたちはをかしげなめり、心やいかゞあらむと他かず思ひけれど、かゝるやんごとなき人のわざと云給へる

に、けふわすくだるべきにすつべきにあらずと思ひて、「もろこしに何事も玄給へ」とて俄に迎ふれば、「けしうはあらぬ聟とり、いと疾く迎ふるは」と笑ひ給うて、御おくり、さるべき人々むつましき、御前にはさし給へり。車みつして渡り給ひぬ。殿よりありけるごたち、「今は河しにか參らむ」などいひければ、北の方、「猶參れ」と強ひて遣り給ひつ。我がそひてありき給ふ所にもありければ、もとの御達、「いつしかとも代り居給ふかな。御心いかならむ。きんだちの御爲おしういみじうもあるべきかな。只今の時の人の御ぞうとて、おしたちてあらむかし」などおのがどち言ひあへり。はじめの腹とて太郎は權の守、三郎は藏人よりかうぶり賜はりてある。この頃死にたる腹のをんなご十。二つなるをとこごなむありける。この二人をなむ父かなしくすとはおろかなり。權の守も式部の大夫も送せむとて、いとまおほやけに申して皆くだるに、そちかづけもの玄給へば、人々の裝束にとて絹二百疋、染草ども皆わづけ給へれば四の君、それぞれと並べて取りふれむかたなし。玄やらむやうもおぼえで母北の方にいひやる。「かうかうのものどもせよとて絹どもあめれど、いかゞ玄侍らむ。殿より侍る人々も若うのみありて言ひ合すべき人もなし。いと戀しくもおぼえさせ給ふを、をさなき人も見まほしく侍るを、忍びて渡り給へ」と言ひやりければ北の方、少將を呼びて、「かくなむいひたる。夜さり忍びてわたらむ、車玄ばし」とのたまへば、「忍びてとおぼすとも人もまさに知らじや。又旅だちたるに、さらさらしき道に子もたまへる、子引きさげて居たらむいと見苦しからむ。亡せにけるめの子たちとて十ばかりなるあるを、そちは呼び出でゝつか

ひ給ふめれば、いとあはれなめり。我左のおほいとのゝうへに申し給うて、よかなりとのたまはゞ渡り給へ」といへば、北の方、いとあたはず思ひて、「あの殿のゆるしなくば親子のおもても見でくだしてむずる」とて唯ひそみにひそみ給うて、「何事もこの殿のおはせむかぎりは、えやすくすまじかめり。我こそ人を隨へしか、人に隨ふ身となりにたるが悲しき事。又我がいふ事同じ心にいらへたる子こそなけれ」とのたまへば、少將、例の御腹だち給ひぬと見て、「何しにかは。言ひあはせ給ふびんなければ玄か申しはべるに、かくさいなむなむいとこそ苦しけれ」とて立ちぬ。うれしと夜晝よろこべど、腹だに立ちぬればなほ癖にてかくなむありける。少將、左のおほいどのにまゐりて北の方に、「かうかうなむ侍りつる。その事とはいはで戀しく見まほしく玄給ふ」とかたれば、北の方、「ことわりにあめれ。はや渡し奉り給へかし」。少將「帥も渡れども思ひ給はざらむに、ふと物し給ひなむ。びんなかるべき」といへば、北の方「それもさるべき事。さらば御みづからおはして、帥の聞かむをりに御せうそことて、いと戀しくなむおぼえ給ふをあからさまにまれ渡り給へ、遠くおはすべき程もいとのこり少くなりにたれば、いとあはれに心細うなむ、これよりまれ出で立ち給ふべきやうに、京におはせむ限は見奉らむとの給ふと聞え給はむにつけて、そこにおのづから氣色見えなむ。それに隨ひて渡りも迎へもし給へ。その小き君はその子とはな玄らさせ給ひそ。御供にてゐて下り給ふとも、一人おはせむが御心細さにとて北の方のそへ奉らせ給ふにありなむ」とのたまへば、少將、いとおもふやうに思ひやりありて、めでたくぞのたまふ、嬉しうあらま

はしき御心かな、我が親の非道に腹立ち給ふこそ物いふかひなけれと思ひて、「いとようのたまはせたり。さらば云か物し侍らむ」とて、殿へいくも苦しけれど、戀しと思ひ給ふにこそあらめと思ひて。女君も同じ所におはす。「いかで物聞えさせむ」といへば、そち「こゝにて聞え給はむにもわへぬべき事ならば疾く入りてきこえ給へ」といへば、少將入りて云かじかなむといへば、女君「げにいかで對面せむ。こゝにもいと戀しくなむおもほえ給へば、いかで參りこむとなむ、昨日聞えたりし」とのたまへば、帥「かしこへ渡り給はゞ、二ところの通ひせむほどに、ものしくおのがためになむあしかるべきを、添くともこゝに渡らせ給へかし。人侍らばこそつゝましくもおぼさめ。をさなき人ばかりなむ、それをびんなかるべくばはなれたる方におき侍りなむ。京に物し給ふべきほどはげに今日あすばかりあり。對面なくていかでかは」とのたまへば、さだめしも云るく、「その事をあむかしこにもなげかるめる」といへば、そち「はやよろしう定めてこなたに渡し奉り給へ。そちに參り給はむ事は猶あしくなむある」といへば、少將「さらばかくなむと物し侍らむ」とて立てば、四の君「かならずかならず、よくそゝのかし給へ」とのたまへば、「承りぬ」とて出でぬ。母北の方の御許に來て、「腹だゝせ給へる恐しさに、ありつるやうにかうかう、左のおほいとのゝうへののたまへる事、云かじか」といひて、「はかなき事なれど人に劣るまじく故あり。かしこくこそのたまひしか。心にさいはひあるものなりけれ」といふ。北の方、いくべき事を限なくよろこびて、「げにげによくもおぼしよりけるかな。三の君もいざ給へ。よさりにてもと思ふ」とのたまへば、

「いとにはかならむ。あすなどやよろしう侍らむ」といふ。明けぬれば渡らむのいそぎ云給ふ。すくよかなるきぬどものなきぞいといとほしき。「かくしの方にやあらむ」との給ふ。左のおほいとの渡り給ふと聞きて、御ぞなどはあざやかにもあらじとおぼしよりて、いと清げに云おきたる御ぞ一具、又姫君の御料なるひとくだり、「ちひさき人に着せたてまつり給へ。旅にはあらはなる事もあるものぞ」とて奉り給ふ。北の方喜ぶ事さすが限なし。「人はうみたる子よりも、まゝ子の德をこそ見るべけれ。我が子七人あれど、かくこまかに心云らひかへり見るやはある。物のはじめにこの子のなりの萎えたりつるを思ひつるに、限なくも嬉しくもあるかな」と例よりも心ゆき喜ぶも帥殿へいけと計ひたるが限なく嬉しきなりけり。暮れぬれば車二つして渡り給ひぬ。四の君、いとうれしと思ひて、日ごろのありさまかたる。むすめは、このごろの程にいとおほきにをかしうさうぞきて居ればまづかき撫でゝいとかなしとおぼゆ。「これをいかにしてゐてくだらましと思ひなむみだれ侍る。猶まろが子と知られむ耻かしき事」といへば、北の方、「左のおほいとのゝうへは云かじかのたまひける。いとよき事なり。まろが着たるものこの子の着たるものゝあの殿より賜はる」といへば、「かくいみじくのたまひおぼしける人をなどて昔おろかに思ひ聞えけむ。まろが上をなむあかなか親たちに饒りて、殿の御ぞきをなむ一よろひたまへる。人々のさう束、几帳屏風よりはじめてたゞおぼしやれ。これかく云給はざらましかば、こゝの御達もいかゞ見ましとあむ嬉しき」といへば、北の方「いやいや繼子の德をなむ見る。さ云り給へ。このあんなる子ゆめゆめ憎み給

ふな。おのが子どもよくかなしう玄給へ。おのれは昔憎まざらましかば、暫しにても耻を見、いたきめは見ざらまし」とのたまへば四の君「まことにことわり」といふ。母北の方見るに、帥はいとものものしく、ありさまもよければ、さいへどもやんごとなき人の玄給へる事はこよなかりけりとよろこぶ。かくていといそがはし。今參ども日に二三人參りぬ。いと華やかなり。少將これを見るにも左のおほいとのをいみじう思ふ。播磨の守は國にてえ知らざりければ、人をなむ遣りける。「左のおほいとの、北の方、この君にかうかうの事玄いで給へり。この月の廿八日になむ船に乘り給ふ。その國に着き給はむ、あるじまうけし給へといひたれば、守、よろこび思ふ事限なし。一つ腹の家だに智どりせむとは思ひよらざりつるを、この君は猶我等を助け給はむとて佛神のし給ふと思ふ。國の守のゝしりて、人々の着くべきまうけし給ふ。この守母にも似でいとよくなむありける。左のおほい殿より渡りし御達、「今は歸り參りなむ」と申したれば、「京におはせむ限は仕うまつりはてよ。又くだらむと思はむ人は參りもせよ」といはせ給へれば、これもいと苦しき事はあるまじかめれど、暫しのほども見る に君に似奉るべくもおらざめり、初より見奉りそめでくだりなむはいかゞせむ、おなじほどの殿にだに御心よからむ方にこそ仕うまつらめ。いはむや更にこよなや。萬の事淨土の心地する我が殿をうち捨てゝまからむこそ物ぐるほしけれと、下仕まで思ひて一人もくだらず。おとな三十人、わらは四人、下づかへ四人なむぬてくだるかずに定めたりつる。日の近うなるまゝに、はらからたち皆渡り集まりて、今はわかれ惜み、哀なる事をのたまふ。人々參り

あつまりて、さうぞき華めきたるを見れば、おほいとのにうちつゞきてはこの君ぞさいはひおはしましける」といへば、「これも誰が玄奉る。そのおんさいはひのゆかりぞかし」と口々に言ひあへり。あさてくだり給ふとて、「左のおほいとのに對面玄奉らでは、いかでかは」と參り給ふ。車の多からむは所せしとて三つばかりしてなむうち渡しける。北の方對面して聞え給へる事どもは書かず。思ひやるべし。たれもたれも御供にくだる人々に、北の方、いとよくしたる扇二十、かひすりたる櫛、蒔繪の箱に玄ろきもの入れてこゝの人の語らひけるして、「かたみに見給へ」とて取らす。御達も思ふやうに心ばせありて人に思はるゝと嬉しくおぼゆ。人もめでたういみじと思ひて、おのおのかたらひ得契りて、かへりて、「この殿をよしと思へれど、かの殿を見つれば儀式よりはじめてけはひことに見はべるに、心こそうつりぬれ。わはれ仕うまつらばや」としのびつゝいひあへり。つとめて御文あり。

「よべは、ほどへむ年のつもりを取りそへて聞えむと思ひ給へしを、夜みじかきこゝちして、はかなき身をしらぬこそわはれに思ひたまふれ。

「はるばると峯の白雲立ちのきて又かへりあはむ程のはるけさ、まことに道の程見給へ」とて蒔繪の御ぞびつひとよろひに、片つ方には、かづけ物一襲に袴具しつゝ、今什八字片つに方には、さうじみの御さう束みくだり、いろいろの織物うち重なりたり。上には唐櫃の大きさに滿ちたるぬさぶくろに中に扇百入れてうち覆ひ給へり。又ちひさきぬばこ一よろひあり。この御むすめにおこせ給へるなるべし。片つ方には御さう束一具、片つ方には黄金の箱

にしろいもの入れてすゑ、ちひさきみぐしの箱入れたり。くはしく書くべけれどむづかし。姫君の御文には、

「今日のみと聞き侍れば何でゝちせむとなむ。
をしめどもしひてゆくだにあるものを我が心さへなどかおくれぬ」とあり。そち見て「いとおほくの物どもなりや。いとかくしもたまはでありなむものを」といふ。御使どもに物かづく。四の君、更にきこえさせむかたなくて、

「そら雲の立つそらもなくかなしくて別れゆくべきかたもおぼえず。賜はせたる物どを人々見るも嬉しく、いみじう物さわがしうて」

となむある。むすめの君の御かへり、

「これより近きほどだにきこえさせむと思ひ給へるほどになむ。おくれぬものはこゝにも、

身を分けて君にしそふるものならば行くもとまるも思はざらまし」とあむありける。北の方への、今宵の御かへりをなむ見て、母北の方なくとはおろかなり。「悲しくするむすめになむありける。なゝそちに我はなりなむとする。いかでかむとせなゝとせ生けらむとする。あひ見で死なむ事」と泣けば、四の君、いみじう悲しうて、「さればこそいかゞとは聞え侍りしか。強いて御心とつかはすにこそ侍るめれ。今はとゞまり侍るべきにあらず。心づくしになおぼしそ。さりともあひ見侍らではやみ侍らじ」といへば、母北の方「我やはこの事はせ

し。左のおほい殿の玄給ひしかば、悲しきめを見せ給はむとて腹ぎたなきわざを玄給ふなりけり。何か嬉しと思ひけむ」とのたまへば、四の君、「今はいふかひなし。暫しのほどにても御手離るべきすくせこそは侍りけめ」といひなぐさむ。少將、「世にかくばかりやは親子の別はすれど、かゝることと言ひつゞけて泣かずかし。聞きにくしや」と制し居たり。そちは左のおほいとのにまかり申しに参り給へり、おとゞ對面玄給うて物語玄給ふ。「よそにても志侍りしを今はましてなむ。そのちひさき人のくだり侍らむをらうたくせさせ給へ。故おほぢ殿のいみじくかなしう玄たまひしかば、こゝにてもおほしたてむと物し侍れど、かの母北の方一人のしたまふを、せめて心苦しがりて添へらるゝなめれば、えとゞめでなむ」とのたまへば帥「堪へむ心の限は仕うまつらむ」といふ。暮方に罷り出づれば、御裝束ひとくだりかづけ給ひ、かしこき御馬二つ奉り給ふ。いとこまかに玄給へり。かへりて、帥、四の君に「かうからなむのたまへる。ちひさくおはする君はいくつぞ」と問へば、四の君「十一ばかり」といらへ給へば、「老いたりと見しおとゞの、いかにをさなき子もたまへりける」といふもをかし。帥、「殿の御達のかへらむに、何か賜へたる」と問へば、四の君、「何か取らせむ、さるべき物もなければ」といらへ給へば、帥「いといふかひなき事のたまふ。この日ごろありて、たゞに歸し奉らむとおぼしけるよ」とはづかしげにのたまうて、これはおろかなる心ぞかしと帥は思ひて殘るものありけるを取り出でゝ、おとな三人には絹四疋、綾一疋、すはう一反、わらはには絹三疋、蘇枋、下仕には絹二疋、蘇枋そへてとらすれば、そちはなさけありけりと思ふ。

さて時とりて曉に急ぎ立ちていとさわがし、北の方泣く泣くかへりなむ事を思ひわびて、四の君をとらへて泣き居たるほどに、こがねしてすきばこをころもばこの大きさに結べるに、朽葉のうすものに包みて入れたり。「いづこよりぞ」と問へば、「唯おのづから御覽ずべきなりとまうして使かへりぬ」と申せば、あやしくて見ればうすもの海の色に染めて玄きにはしきたり。こがねの洲濱中にあり。ぢんの船うけて、島に木ども多く植ゑて、洲はまいとをかし。物や書きたると見れば、玄ろき色紙にいとちひさくて船のうきたる所におしつけたり。放ちて見れば、

「今はとて島こぎはなれ行く船にのひれふるそでを見るぞかなしき。聞ゆるからに人わろし。よしよし聞えじ」

と書きたり。おもしろの駒の手なればおぼえなくおさまし。誰か玄いづらむと北の方も見て驚きあやしがる。四の君、あはれにいひ契りなども例のやうにもせざりしかば、思ひ出づる事なけれどこれを見るにぞさすがに思ひ出でらるゝ。少將は「これを左のおほいとのゝ姫君に奉り給へ」といへば、母北の方、「をかしき物にこそあめれ。猶もたまへれ」といふめれども、四の君も、猶萬にし給ふめるものをと思ひて、「よかなり」といふ。少將も「猶々」といひて、「我奉らむ」とて取りてけり。おもしろの駒は思ひよらざりけれど、妹どもの心ありければ、子などあればと思ひてたゞにやはとて玄たるなりけり。夜更けてなむ母北の方かへりける。寅の時に皆くだりぬ。車十あまりなむありける。おほやけの「疾くまかれ」と重ねて宣

旨くだりければ山崎にも居たらで、やがて急ぎくだりにけり。おくりの人々も皆帥、物かづけてなむかへしける。殿の御達皆かへりまゐりて、日ごろのものがたり、我やはせしとのたまふ事をかたれば、笑ひになむわらひ給ひける。北の方、玄ばしは見ぐるしきまで戀ひ泣きけれど、日ごろ過ぎにければうちわすれにけり。帥は播磨の守待ちうけていみじういたはりける事は書かず。左のおほいとの「一所はめやすくなしつ。今一所だに玄たてばや」となむのたまひける。かくて年月經るに、めでたき事どもなむまさりたりける。大貳はたひらかにくだり着きて、左のおほいとのに物いと多く奉り給ひけり。左のおほいとのゝ太郎、十四にて御からむり、姫君十三にて御も着せ奉り給ふ。二郎君をもおとさじとせさせ奉り給ふに、父おとゞ「かくいどませ給ふ」と笑ひ給ひぬ。年かへりては姫君うちに參り給はむとて限なくかしづき給ふほどにはかなくて年もかへりぬ。二月に參らせ給ふ。書かずとも儀式ありさま思ひやれ。かぎりなくをかしげにおはすればいと時めき給ふに、いとゞきさいの宮思ひ聞え給へれば、はじめさむらひ給ふ人々よりもこよなく華やぎ給ふ。播磨の守は辨になり給ひにけり。かの衛門が男の三河の守は左少辨にてなむありける。辨の北の方にてあまた子産みいでゝ、いとおもだゝしくてまゐりまかんでしける。かゝるほどにおほい殿御心地なやみ給うて太政大臣かへし奉り給へど、帝更に用ゐ給はねば、「いといたう老いて侍れど、おほやけを見奉らぬが悲しさに今まで參り侍りつるあり。今年なむつゝしむべき年に侍れば、籠り侍らむと思ひ給ふるに、このそくにてはおほやけのやんごとなきまつりごとに參らではいと

びんなかるべし。辭し奉るかはりには左大臣をなさせ給へ。ざえけしうは侍らざめり。されば翁よりも御後見はいとよく玄侍りぬむ」と后の宮してもせめて奏せさせ給ひければ帝「何かは。生きて物し給はむこそうれしからめ」とて左のおとゞを太政大臣になし奉り給ふ。世人「まだ四十になり給はで位を極め給へる事よ」と驚きあへり。御むすめの女御、后に居給ひぬ。宮の亮に少將を中將になしてなむせさせ給ひける。兵衛の佐たち皆よろこび玄給ふ。太郎の兵衛の佐左近衛の少將になり給ひぬ。おほぢおとゞ、「我が兵衛の佐をおそくなし給ふ」とのたまへば、「いとわりなき事、おのれが子のかぎりを事のはじめにはいかゞ玄侍らむ」と申し給へば「これは御子かは、翁の五郎に侍れば何かは人の謗り侍らむ。さきには御太郎、左近のつかさになりにしかば、こたみは右近の少將になせ。叔父にて甥になり劣るやうやはある」とのたまうて、「よしよし、玄ぶ玄ぶに思ひ給ふめり」とうちにせちに奏せさせ給うて、右近衛の少將になし給うて、「かうてこそ見め。この子疾くうまれたらましかば、これにぞ我がつかさかゝむりも譲らましか」との給ひける。かなしう玄給ふとはよの常なりや。おほい殿の北の方の御さいはひをめでたしとはふるめかしや。「落窪に、ひとへの御袴のはどはかく太政大臣の北の方、后の御母と見え給はざりき」とて猶むかしの人々はみそかごともいひける。三の君は中宮のみくしげどのになむなし奉り給ひける。帥は任はて丶、いとたひらかに四の君の來たるを、北の方嬉しとおぼしたる、ことわりぞかし。かく榮え給ふを、かく見よとや神佛もおぼしけむ。とみにも死なで七十餘まで侍なむいましける。おほいとの丶

北の方「いといたく老い給ふめり。功德をおもはせ」とのたまひて、尼にいとめでたくなし給へりけるを、よろこびのたまひていますかりける。「世にあらむ人、まゝこにくむな。繼子なむ嬉しきものは一往にありける」との給うて、又うち腹立ち給ふ時は「いをのほしきには我を尼になし給へり。產まぬ子はかく腹ぎたなかりけり」となむの給ひける。死に給ひて後も唯おほい殿ぞいかめしう玄給ひける。衛門は宮の內侍になりにけり。後々のことはつぎつぎに出で來べし。御子の少將の君達、一よろひになむなりあがりたまひける。おほぢおとゞうせ給ひけれども「我思はゞな玄おとしそ」とかへすがへすのたまひければ、わづらはしくやんごとなきものになむ、弟の君をば思ひ給ひける。左大將右大將にてぞつゞきてなりあがり給ひける。母北の方御さいはひいはずともげにと見えたり。帥はこの殿の御德にて大納言になり給へり。おもしろの駒は病重くて法師になりにければ、音にも聞えぬなるべし。かの典樂の助は蹴られたるを病にて死にけり。「これかくておはするを見ずなりぬるぞ口をしき。などてあまり蹴させけむ。暫しいけておいたらむものを」とぞ男君のたまひける。女御のけいしに和泉の守なりて、御德いみじう見ければ、むかしの阿漕は、今はないしのすけになるべし。ないしのすけは二百まで生けりとや。

落窪物語 終

とりかへばや物語

いつの頃にか、權大納言にて大將かけ給へる人、御かたち身のざえ心もちゐよりはじめて、人がら世のおぼえもなべてならず物し給へば、何事かは飽かぬ事あるべき御身ならぬに、人知れぬ御心のうち物おもはしさぞいと盡せざりける。北の方ふたどころものし給ふ。一人は源宰相と聞えしが御むすめに物し給ふ。御志はいとしもすぐれねど、人よりさきにみそめ給ひてしかば、おろかならず思ひ聞え給ふに、いとゞ世になく玉ひかるをとこ君さへ生れ給ひにしかば、又なく去り難きものに思ひ聞え給へり。今一ところは藤中納言と聞えしが御むすめに物し給ふ。御腹にも、姫君のいとゝいと美くしげなる生れ給ひしかば、さまざま珍らしく思ふさまに思しかしづく事限りなし。うへたちの御有樣のいづれもいとしもすぐれ給はぬをおぼすさまならず口惜しき事におぼしたりしかど、今はきんだちの、さまざま美くしうておひ出で給ふに、いづれの御方をも捨て難き者に思ひ聞え給ひて、今はさる方におはしつきにたるべし。君達の御かたちのいづれもすぐれ給へるさま、唯同じものとのみ見えて、とりもたがへつべう物し給ふを、同じ所ならましかばふようならましを、所々にて生ひ出で給ふぞいとよかりける。大かたは唯同じものと見ゆる御かたちの、若君はあてにかをりけだかくなまめかしきかた添ひて見え給ふ。姫君ははなばなとほこりかに、見ても飽く世なく、あた

りにもこぼれちるあいぎやうなどぞ今より似るものなく物し給ひける。いづれも、やうやうおとなび給ふまゝに、若君はあさましうものはぢをのみし給ひて、女房などにだに、少し御まへ遠きには見え給ふ事もなく、父の殿をも耻かしくのみおぼして、やうやう御ふみならはしさるべき事ども教へ聞え給へど、おぼしもかけず唯いと耻かしとのみおぼして、みちやうの内にのみうづもれ入りつゝ繪かきひゝなわそび貝おほひなど玄給ふを、殿はいとあさましき事におぼしのたまはせて、常にさいなみ給へば、はてはては涙をさへこぼして、あさましうつゝましとのみおぼしつゝ、唯母上御めのと、さらぬは、むげにちひさきわらはなどにぞ見え給ふ。さらぬ女房などの御前に參れば、御几帳にまつはれて、耻かしういみじとのみおぼしたるを、いと珍らかなることにおぼし歎くに、又姫君は、今よりいとさがなくて、をさをさ内にも物し給はず、とにのみつとおはして、若きをのこどもわらはべなどゝ、鞠小弓などをのみ翫び給ふ。御いでゐにも人々參りて、文作り、笛吹き、歌うたひなどするにも、走り出で給ひて、諸共に人も教へ聞えぬ琴笛のねも、いみじう吹きたて、彈き鳴らし給ふ。物うちずんじ、歌うたひなどし給ふを、參り給ふ殿上人、かんだちめあどは、めでうつくしみ聞えつゝ、かたへは教へ奉りて、この御腹のをば姫君と聞えしは、ひがことなりけりなどぞ皆思ひあへる。殿のみあひ給へる折こそとりとゞめても隱し給へ、人々の參るには殿の御さうぞくなど玄給ふ程、まづ走り出で給ひて、かく馴れ遊び給へば、なかなかえ制し聞え給はねば、唯若君とのみ思ひて、けうじうつくしみ聞えあへるを、さ思はせてのみ物し給ふ。御心の中に

ぞいとあさましく、かへすがへすとりかへばやとおぼされける。かくいひいひしても、をさなき程は、今おのづからなど慰めて、さてもあり。やうやうとをにもあまり給へど、猶同じさまなるを、こはいかゞすべきと、よとともには、なげかはしきよりほかの事なかりけり。さりとも年月過ぎば、おぼし知る事もとのみ待ち給へるを、をさをさなほり給ふまじく見はて給ふに、猶いと珍らしう、世にためしなき御こゝちぞ玄給ひける。今はかろびたる御わりきも、つきなき程の御よそほしさなれば、殿廣々と造りて、西ひんがしの對に、二所の北の方を住ませ聞えて、殿を玉のうてなに磨きて、殿の御でゐにぞせられける。これに諸共にさし並びて心ゆく北の方のおはせぬは、猶口惜しき事なりかし。十五日づゝうらやみなく通ひ給ふ。君だちをも、今はやがて聞えつけて、若君姫君とぞ聞ゆなる。春のつれづれ御ものいみにて、のどやかなる晝つ方、姫君の御方に渡り給へれば、御帳の内にぞ箏の琴をしのびやかに彈きすさび給ふなる。女房などこゝかしこにむれ居つゝ碁雙六などうちて、いとつれづれげなり。御帳押し遣りて、「などかくのみうもれては。盛りなる花の匂ひも御覽せよかし。ごたちなどもわまりいぶせく、物すさまじげに思ひて侍るや」とてゆかに押しかゝりて居給へば、みぐしはたけに七八寸ばかりあまりたり。はなずゝきの穂に出でたる秋のけしき覺えて、裾つきのなよなよと靡きかゝりつゝ物語に扇を廣げたるなど、こちたく言ひたる程にはわらで、これこそなつかしかりけれ。いにしへのかぐや姫も、げにかくめでたきかたは、かくしもやあらざりけむと、見給ふにつけては、目もくれつゝ近く寄り給ひて、「こはいかでかくのみはな

りはて給ふにか」と涙をひとめうけて、御ぐしを掻きやり給へば、いと耻かしげにおぼし入りたる御氣色、あせになりて、御顔の色は、紅梅の咲き出でたるやうに匂ひつゝ、涙も落ちぬべく見ゆる御まみの、いと心苦しげなるに、いとゞ我もこぼれて、つくづくとことごとなくあはれに見奉り給ふ。さるはかたはらいたければ、つくろひけさうじ給はねど、わざともいとよくしたるいろあひなり。御ひたひがみも汗にまろかれて、わざとひねりかけたるやうにこぼれかゝりつゝ、らうたくわいぎやうづきたり。白くおびたゞしくしたてたるは、いとけうとかりけり。かくてこそ見るべかりけれと見ゆ。十二におはすれど、片なりにおくれたる所もなく、人がらのそびやかにて、なまめかしきさまぞ限なきや。櫻の御ぞの、なよゝかなる六ばかりにえび染の織物の、袿あはひにぎはゝしからぬを着なし給へるを、人がらにもてはやされて、袖口裾のつままでをかしげなり。いであさましや、尼などにて、ひとへにそのかたのいとなみにてやかしづきもたらましと見給ふも、くちをしく、涙ぞかきくらされ給ふ。

「いかなりし昔のつみと思ふにもこの世にいとゞものぞかなしき」。西のたいに渡り給ふに、横笛の聲、すごく吹きすましたなり。空に響きのぼりて聞ゆるに、我が心ちもそゞろしく珍らかなり。これもさななりと聞き給ふに、又心ちもかき亂るやうなれど、さりげなくもてなして、若君の御方をのぞき給へば、うちかしこまりて、笛はさし置きつ。櫻山吹など、これはいろいろなるに、萠黄の織物の狩衣、えび染の織物の指貫着て、顔はいとふくらかに、いろあひいみじう清らにて、まみらうらうしう、いづことなくいざやかにはひ滿ちて、あいぎ

やうは、指貫の裾までこぼれ落ちたるやうなり。見まほしく目も驚かるゝをうち見るには、落つる涙も物のなげかしさも忘れて、うち忍まるゝ御さまを、あないみじ、これももとの女にて、かしづき立てたらむに、いかばかりめでたくうつくしからむと、胸つぶれて見たまふ。御ぐしも、これは長さこそおとりたれ、裾などは、扇をひろげたらむやうにて、たけに少しはづれたるほどに、こぼれかゝれるやうだい、かしらつきなど、見るごとに、忍まれながらぞ心のうちはくらさるゝや。いとたかき人の子どもなどあまた居て、碁雙六うち、華やかに笑ひのゝしり、鞠小弓など遊ぶも いとさまことに珍らかなり。あないみじのわざや、さても、これはかくてあるべき事かは、いまはともかくしなすべき方のなきも、今更にせめて、女にとりなすべきやうもなかめり、是も法師になして、人に交らはせず、後の世をつとめさせむこそよからめとおぼすも、心々は又さしもあらじかし。かばかりのすくせありければ、今少しいひどころあることもこそまざらめ、ほい深き道心ならぬものから、みないたづらにしなして止みなむよしなさよなど おぼしくだく。世に似ずつたなかりけるすくせかなと、かへすがへすおぼし知らる。かやうの君達は、おのづからしどけなくもあるを、これはいといみじく、今よりはかばかしく、ざえがしこくて、おほやけの御うしろみにおひ出で給ふ。琴笛ぃ音も、天地を響かし給へるさま いと珍らかなり。どきやううちし、歌うたひ、詩などずんじ給へる聲はまこまことに斧の柄も朽ちぬべく、故郷忘れぬべし。何事も更に飽かぬことなき御有樣を、かくのみおぼし亂るゝぞいとほしかめる。かゝる御ざえかたちすぐれ給へる事やう

やう世に聞えて、うち、春宮にも、さばかり何事にもすぐれたなるを、今まで殿上などもせさせず、まじろいせぬ事と、盡せずゆかしがらせ給ひて、大將殿にもたびたび御けしきあれど、いとゞ胸つぶれ、おさましくかたはらいたければ、いまだいわけなきさまを奏して取り出で給はぬ、をわらはすがためならさじとするならむとて、かうぶりをさへおしてたまはらせてとくとくおとなびさせてまゐらすべきさまにのみ、だびたび御けしきあるにさへ、いかに聞えて參らせぬやう有るべきならねば、さりとては唯さらばあるに任せてあるばかり、これもさきの世の事ならめ、かゝるすぢにても、おのおのさても物し給ふべきちぎりこそはと、ひたぶるにおもほしなりて、今年は御裳着御元服、我も我もと急ぎ給ふ。その日になりて、この殿の御しつらひよのつねならず磨き立てゝ姫君わたし奉り給ふ。ひんがしのうへも渡り給へり。大殿ぞ御腰はゆひ給ふ。ことごとしからぬはねぢけたれど、さすがに傍らいたくおぼすなるべし。かゝる御事どもを聞くよそ人は、思ひよるべき事ならねば、唯若君姫君を思ひたがへ聞きひがめたりけるとのみぞ心えける。まれまれ委しく知りたる人は、又いかでかうち出づべき事のさまならねば、なべて世に知る人なきぞいとよかりける。若君の御ひきいれは、殿の御せうとの右大臣殿ぞし給ふ。御あげまきりの美くしさ、かねて見聞えし事なれど、いともてはなれ世になきかたちのし給へるを、ひきいれのおとゞのめで奉り給ふさまことわりなり。このおとゞは姫君のかぎりぞ四人もち給へる。大君はうちの女御、中の君は春宮の女御、三四の君はたゞにておはするを、ならべて見まほしう覺すべし。祿ども贈物など、更

に世になきさよらをつくし給へり。かうぶりはわらはよりえ給へりしかば、だいぶの君と聞ゆ。やがてその秋のつかさめしに、侍從になり給ひぬ。みかどとうぐうを始め奉りて、天の下の男女、この君を一目も見聞えば、飽く世なくいみじきものに思ふべかめり。おぼし時めかせ給ふさま、やんごとなき人の御子と言ひながら、いとたぐひなきもことわりと見えて、琴笛の音にも、作り出づるふみのかたにも、歌の道にも、はかなくひき渡す筆のあやつりまで、世にたぐひなくうちうるまひ、交らひ給へるさまのうつくしさ、御かたちはさるものにて、今よりあるべきさまに、うべうべしく、世の有樣、おほやけごとを、さとり知りたる事のさかしく、すべてことごとに、この世の物にもあらぬを、父おとゞもさはいかゞせむ、さるべきにこそといふかひなければ、今はやうやうかゝるかたにつけても、嬉しく美くしき事をのみおぼし慰みゆくを、この君、猶をさなき限りは、我が身のいかなるなどもたどられず、かゝる類ひもあるにこそはと、心をやりて、我が心のまゝにもてなしふるまひすぐしつるを、やうやう人の有樣を見聞き知りはて、物思ひしらるゝまゝには、いと怪しくあさましう思ひ知られゆけど、さりとて、今は改め思ひかへしてもすべきやうもなければ、なべて珍らかに、人に違ひける身にかなど、うちひとりごたれつゝ、物歎かしきまゝに、身をもてをさめて、物遠くもて去づめつゝまじらひ給へる、よういなどいとめでたきを、そのときのみがど四十餘ばかりにて、いとめでたくおはします。春宮は二十七八にて、御かたちなども、唯わうげづきて、けだかくおはしますが、この妹の君の御かたち、名高くすぐれて聞え給へば、いづくよりも、御

心をかけて仰ことあれど、せむかたなき御物はぢにことよせて、おぼしもかけず、げにさやうにもてかしづきてあらましかばど、いみじき御物思なり。みかどはうせ給ひにし后の御腹に、女一の宮一人おはしますを、あはれにとゝろぐるしき事に、御目はなたず、もてかしづき奉らせ給ふ。さしては内裏宮にも男みこのおはしまさぬを、天の下の大事にて、我も我もと御いのりひまなし。右大臣殿の女御、やんごとなくて侍ひ給ふめれど、一の人の御むすめならねば、后にもえし給はず。帝は、この女一の宮の御事を、朝夕にうしろめたくおぼし歎きて、この侍従の有様の、この世の物とも見えずなりゆくを、この宮の御うしろみをせさせばやと、御覽ずる度ごとに御目とゞまる。御うしろみなどの、はかばかしからぬけにや、まだいと若くあふなくおはしますを、妹の姫君のさばかりめでたうなるに見ならひて、めざましき心もや御覽せられむと、まだいと物げなき程も、少しものしきほどに見なしてなどぞおぼしめしける。かやうの御けしきを漏り聞き給ふにも、殿は胸うちさわぎて、あはれかゝらざらましかば、いかにめいぼくあり嬉しからましと、口惜しく心憂きものから、少しはゝゑまれてぞ聞き給ふ。侍従の君は、いと心かしこく、かばかりの程にも似ずあるべかしくめでたく、うちわたりにも、御かたがたの女房などは見るごとに心けさうせられて、つゆの一ことばもいかでかけられしがなと見えぎらがひけり。よからぬ身を思ひ知りながら、ありそめにける身を、えもてかくしやる方なくて変らふにこそあれ、何かは目のとまらむ。いとまめやかにもてをさめたるを、さうざうしく口をしと思ふ人多かり。その頃のみかどの御をぢ

に、式部卿の宮ときこゆる人の御ひとつ子の君、この侍従の君には、二つばかりのこのかみにて、かたち有様、いと侍従のほどにこそはあれ、なべてい人よりはこよなくすぐれて、あてにをかしく、心ばへたとしへなく、かゝらぬくまなく、このまくしなまめかしくて、思ひいたらぬかたなき心にて、此殿の姫君、右のおとゞの四の君、とりどりに名高くいはれ給ふを、いづれをもいかでと思ふ心深くて、さるべき方より、あながちに尋ねよりつゝ、心の限かぎ盡しいられ侘ぶれど、人からのいとあだなるに、つゆの事もあなゆゝしと、いづかたにも思しはなれて、かへりごとする人もなきを、わりなく歎きつゝ、この侍従のあまりいみじく物まめやかに、亂るゝ所なくをさめたるこそ、あまりさうざうしきやうなれど、見るめかたちの似る物なく、あいきやうこぼれて、美くしきさまの、かゝる女のあらましかばと、見るたびにいみじく思はしきを、妹もかくこそはものし給ふらめ、女はいまひときはまさるらむほどを思ひあまる時は、涙もつゝます憂へ泣きかへるさまの、人よりすぐれてあはれになまめきたるを、いとをかしくあはれに、このひとよりはおつかしく、うち語らひながら、我はいとうちとけむつびられず、うち出づるごとには、人の御身のよづかざりける事のみ知らるゝに、胸うちつぶるれは、いたくもあひしらはず、ことずくなゝるほどに、心耻かしうのみもておしたるを、妬くうらめしと、涙をもつゝまず思ひいられたるけしきの、心苦しきを見るにも、

「たぐひなきうき身を思ひしるからにさやは涙のうきてながるゝ」とぞ答へまほしけれ

ど、何事をさへ思ふぞと問ひかくらむも、のべどころなければ、唯あさけなくもてはなれ、すくよかなるさまにてぞ立ちわかれける。かゝるほどに、みかど御心地れいならで、久しくなりぬるは、さるべきにこそは有らめ、いにしへも、さるためしなくやはとおぼして、春宮に御くらゐを譲り給ひて、女一の宮を春宮にすゑ奉り給ひて、我が御身は朱雀院におはします。大殿も今は御年七十に及び、御病も重くのみおぼさるれば、御ぐしおろし給ひて、この殿左大臣になり給ひてぞ關白し給ふ。くぎやうつぎつぎにありわがりて、殿の侍從三位して中將になり給ひぬ。右大臣殿の女御、ささきに居給はずなりぬるを、他かず口をしくおぼして、この中將の君、人からも人にいとこよなくまさりて、いさゝかあだあだしくかろびたるふるまひなどすとも聞えぬに、ます事あるべきあらねば、それにおぼし定めて、父おとゞにも聞え給へば、をかしとおぼしながら、何かはいかに言ひてか、あるまじきことゝは物せむと覺して、「いかなるにか、かやうによづきたる心は、いめにも侍らざめるは、さりともまめやかなる方ばかりは、いとよく人に御覽せらるべきものにし侍る」とうけひき申し給ひぬ。北の方にかくあむとのたまふに、「こめかしからむ人のむすめの、あやしなど思ひ咎めいふべきならず、唯うち語らひて、人めをよのつねにもてなして、いでいりせさし」と、うち笑ひて、「よきうしろみなり」とのたまふ。まだいと若くおはすれば、うしろめたかりぬべけれど、あふなくは、又おはすべくもあらぬさまなれば、心やすくて御文かゝせ奉り給ふ。何事もおぼしわかず、をのこどものなかにも、このもしくのみ聞きならひ給へれば、けそうの方にこそはと

思ひて、

「これやさは入りて去げきは道ならむ山ぐち去るくまどはるゝかな」と書き給へるえもいはずめでたき見ものなり。御年のほどをおぼすに、いかでかゝりけむと、をかしくもあはれにも涙ぐまれ給ふ。右のおとゞには、からうじて言ひおもむけ給へる事なれば、御かへりごとそゝのかして、書かせ奉り給ふ。

「ふもとよりいかなる道にまよふらむゆくへも知らぬをちこちの山」。かくて後は、常に聞え給へば、われすゝみ給ひにしことなれば、その日とおぼしたちにたり。いとやんごとなきいきほひおはする人にて、すぐれてかしづき聞え給ふ御むすめに、大殿の三位の中將をとりよせ給ふ。御けしき有様、何事もなのめによろしからむやは。そのころ大納言なくなりにたれば、次第になりのぼりて、樺中納言にて左衛門督かけ給へば、いとゞ花やかにて、めでたしともおろかなり。式部卿の宮の中將も、宰相になり給ひぬれど、かたがた盡しつる心のひとかたは、かく鹽焼く烟に聞きなしつることを、よろこびも何とも思はぬ顔に、ゆきあふ折々は少し心おく氣色に歎き去めりたるを、中納言はなぞや、かく思ひたる人を、かひがひしく見給はでとをかしく思ひ給ひけり。中納言は十六、女君は十九にておはすれば、かたちも心も、かたなりなる所なく、よきほどに、年より始め、他かぬ所なくめでたくて、姉君たちよりも、こよなく親たちのおぼしかしづきつる、我がこゝろおごりも人知れず、かみなき位にも及ぶべき身とおぼしつるに、こよなくあさはかなる心地するを、けしきには出し給はね

ど、かくやはものをと、心の中にはうち歎かれながらも、唯人がらのいとをかしくすぐれて、うとましきもてなしもなく、唯いとあはれげにうち語らひつゝみなるゝまゝに、思ひもおとされ給はざりけり。よるのころも、人めにはうちかはしながら、かたみにひとへのへだてはなきありて、うちとくる方なきも、深くはいかでか知る人あらむ。いとゞ人めに見えて、今めかしくまつはれ給ふ事ど殊になく、唯あてやかに、めやすきほどの御なからひに見ゆるは、かばかりの他かぬ事なき御有様を、幾千世重ぬともあくまじきを思ふ程よりはと見ゆれど、男君はまだいと若く物し給へば、さこそはすぐし給へど、物つゝましくおぼさるゝなめりなど、罪もなくことわりにて、もてかしづき給ふさま、世にたぐひなし。又けさうがまし、遊びたはれたるけしき、はたゆめになく、大殿、うちの御あそびなどよりは、ことなるよがれなどもし給はぬを、唯月ごとに四五日ぞあやしく所せき病の、人に見えかゝづらふべきにあらぬを「もの、け起るをりをりい侍れば」とて、御めのとの里にはひ隠れ給ふをぞ、いかなることぞと心おかるゝふしにはありける。九月十五日、月いと明きに、御遊にさぶらひて御とのゐなる夜、梅壺の女御のまうのぼり給ふを、里ゆかしくはあらねど、藤つぼへ通る塀のわたりに立ちかくれて見れば、更けぬる月のくまなくすめるに、火取もたるわらはの、濃き袙に、うすものゝかざみなめり、透き通りたるに、髪いとをかしくかゝりて歩み出でたり。女房も皆打ちたるきぬに、うすものゝからぎぬぬぎかけたり。唯今のそらおぼえてをかしく見ゆるに、女御は御几帳うるはしくさしていみじくもてなしかしづかれ給ふさまの心にくゝめでたき

を、あはれ、我もよのつねの身をも心をもてなしたらましかば、必ずかくてぞおりのぼらまし、わないみじ、ひたおもてにて身をあらぬさまに交らひわりくは」、うつゝの事にはあらずかしと思ひつゞくるに、かきくらさるゝ心ちして、

「月ならばかくてすまゝし雲のうへをあはれいかなる契なるらむ」。我こそちぎりつたなくてかゝらめ、姫君だによのつねにてかやうのまじらひし給はましかば、他かぬ事なからまし、身を歎きても一人はよのつねにて おはすと見てこそはかやうのおりのぼりのかしづきもせましなど、我が身ひとつの事を思ひつゞくるに、これより出でゝやがて深き山に跡も絶えなまほしく覺さるゝまゝに、とばかり見送られて、ありつるひとりごとを思ひつゞくる程に、「逢萊洞の月」と、聲は似るものなく澄みのぼりたるを、宰相中將も今宵の御遊に侍ひて、今は唯ひとかに大殿の姫君の御事を思ひこがれて、例のかひなくともこの 中納言に恨みもし、又世になきかたちけはひも見まほしさにも慰めむと思ひて、まかで給はずなるぬるを、いづくの隈にはひかくれて見えぬなるらむとうかゞひわりけるに、この聲を聞き惑ひ尋ね來て見れば、織物の直衣指貫に紅のつやこぼるゝばかりなるを脱ぎかけて、いとさゝやかに見ゆれど若くをかしげにて、月影に光るばかりめでたく見えて、常よりもうちしめりたるもてなしけしき袖ぬれわたるに例ぬめたるに似ず、世にあきかをりなるを、をのこの身にめでたく見ゆるを、まして人の此のひとともかけよらむを聞き忍ぶ人はあらじかしと羨しく我が身耻しけれど、ひきとゞめてわりなき事を恨みいふも、いとえんにをかしうなまめきた

るいとにくからず。人はいかにもすべて身にならはしそめ語らひなどせず、いとあまり物遠くのみもてすぐる心にも、この人ばかりにはさし放ちがたう哀れなれば、「かうのみのたまふを、あべてことよき御つき草のうつりやすきはうしろめたけれど、心苦しう思ひ聞えさするをりをり侍れど、みづからの心にまかすべき方なき事にて、唯かぐのみ承るこそかひなくいとほしけれ」とうち歎きて、身を思ひ知りつる名殘いたくながめつるけしき、かばかり思ふ事なげなる身に、何のあかぬ事と、世と共に歎かしきならむ、あまりことさらびまめやかなるもいみじう思ふ事のあるなめり、見る人とても飽かぬ事ありとは聞かぬを、常の事にそれをばめならしていかばかりの事のかくはおぼゆるならむ、この頃の、春宮などの御事か、それもこの人の御身にはいとみじうありがたかるべきことならず、いたくつゝむ事ある人の殊の外にあはれなるかなど、推し量りけしきとりて、よろづにとりなし言ひ「覺さむ事は身にかへても、たばかりけしきとりてかなへ奉りてむ。深く隔て給へるこそ」と恨むるにいらへむ方もなければ、「我が身になりて聞え合せたらむに、去かやすかりぬべき御心なめり」とうち笑ひて、

「そのことゝ思ふならねど月見ればいつまでとのみ物ぞ悲しき」。答へたる聲もいみじうにほひあり。なつかしうおぼゆるに今めかしきくせはほろほろとなかれて、

「そよやその常なるまじき世の中にかくのみ物を思ひわぶらむ。いと罪深くのみ思ひ知られ侍れば、この御けしきを見はてゝ深き山に跡を絶えなむと思ふ」と語らへば、「そはしも

さおぼしたゝむ時は、おくらかし給ふなよ。いかでかくて世にはあらじとそゞろに覺ゆる心の年月に添へてもまさり侍れど、さすがにえこそ思ひたち侍らね」とあはれにうちかたらひ明しておのおのまかでゝも、この中納言萬めでたくすぐれたるなかにも、けちえんにこまやかなるけはひなどの、女にていみじう見まほしうをかしうもあるかなと戀しきにぞ、いとゞ妹の姫君は思ひやられける。かく心を盡し思ひまどへど、かけてなずらひに聞きいるべき氣色ならぬを、いかにせむと思ひ侘ぶるに、院のうへ、春宮を今はたち離れて近くもえ見奉らせ給はぬを、御めのとなど言ひてもはかばかしく心ばせある人も侍はず、我が御みづからはいと物はかなくいはけなくのみおはしますを、うしろめたく覺束なくおぼし歎き聞えさせ給ひて、この大殿の姫君、聟どりうちまゐりの方は思ひ絶えて聞し召すを、此御うしろみにせばやと覺しなりて、參り給へるに御物語などこまやかに聞え給ふについでに、「中納言の妹はいかに去なさむと思ひおきてられたるぞ」と問はせ給ふ。例の猶御けしきあるかと胸潰れて「いかにもいかにも思ひ給へず、親と申せどあさましうとく耻かしきものに思ひて、見え侍れば汗になりて心地さへたがへたる人なれば、尼などになしてその方におもむけて止みなましとのみなむ思う給へなりにたる」とてうち泣き給ひぬるをげに世を遁れむとにはあらざりけりと、哀に御らんじて、「それいとあるまじき事なり。春宮はかばかしき人なく、おのれを立ち離れていと心苦しきを、その君御あそびがたきに參らせ給へ。世の中にともかくもあかば后には居給ひなむ」と仰せらるゝに、中納言の事おぼし出でられても、これ

もさるべきやうこそはあらめと、嬉しくも珍らかにもさまざま御心亂れて、「げにさほどの交らひは仕りもやせむ」とて、「母なる人にのたまひわはせむ」とてまかで給ひぬ。うへにかくなど聞え給へば、「今やいかなるべき事にかと、え思ひ定められでなむ」とのたまへば、中納言の有樣を見れば、これもかうざまにてよかるべきにもあらむ、仰せ事たがへず、げに后の位に定まり給ふやうもありなむ、思ひの外にめでたき事にてこそはあらめとおぼすあらましごとにも、胸うちさわぎ給ふや。御いのりさまざまにせらる。「同じくはとく」と仰せらるれば、十一月十日ごろに參らせ奉り給ふ。何事かは飽かぬ事あらむ。女房四十人、わらはしもづかへ八人、めでたくかしづき立てゝ參らせ給ふに、よのつねなるべき御交らひにもあらぬに、その事となくて侍ひ給はむもそゞろなれば、ないしのかみになりてぞ參り給ひける。春宮は梨壺におはしませば御つぼねは宣耀殿にせられたり。さば夜々のぼりてひとつ御帳に御とのごもるに、宮の御けはひはあたりいと若くあてにおほどかにおはしますを、さこそいみじうものはぢし、つゝましき御心なれど何心なくうちとけたる御らうたげさには、いと忍び難くて、よるよる御殿居の程いかゞさし過ぎ給ひけむ。宮はいとあさましう思の外におぼされど、見るめけはひは聊うとましげもなく世になくをかしげにたをたをとある人ざまなれば、さるやうこそはと、ひとへによき遊びがたきとおぼしまとはしたる、世になくわはれにおぼえ給ひけり。畫などもやがてうへの御つぼねに侍ひ給ひて、手ならひ讀かき琴ひきなど、おきふしもろともに見奉るに、よろづつゝましく耻かしきものと、うもれし程

のつれづれよりは何事も紛るゝ心ちし給ふ。今とても煩はしき思ひあるまじきあらねば、宮の宰相も離れず、なかなかさびしき窓のうちに籠り給へりしほどこそ思ひまうく方なかりしか、なかなかゝる方に立ち出で給へるはいと嬉しくて、夜ひる宣耀殿のわたりを離れず、大方のけしきをも見るに、けだかうもてなしたるさま大方のおぼえ世にもいみじきを、いかならむ世に我が思ひかなへむとのみぞ思ひける。その年の五せちに、中院の御幸ありければ、皆人々をみにて參る中にも、宰相中將權中納言あをずりいとゞいみじう見ゆ。宰相はいとゞそゞろかにをゝしくあざやかなるさまして、なまめかしうよしあり、色めきたるけしきひとをかしう見ゆ。中納言ははなばなと見れども飽くまじうにはほはしく、こぼるばかりのあいぎやう似るものなきにもてなしわりさまもさはいへどなごやかにたをたをといとなつかしきほどの、人にこよなくすぐれてめもあやなるを、御方の人々惜しと見るに、宮の宰相はいさゝかも人のけはひする所はたゞにも過ぎず、必ず立ちとまり物などいふを、中納言は見るめに違ひて、宰相の行きもやらず滯りがちなるをしりめに見おこせつゝ過ぎぬるを、ひのくま川ならば暫し水かへとも、うち出づべく皆見送らるゝなかにも、えみていみじと思ふ人ありけり。御隨身の立ち後れて參れる、申すべき事ありがほにけしきばみて侍へば「何事ぞ」と問はせ給ふ。「麗景殿の細殿の一の口にうち招きとゞめて、參らせよと侍りつる」とて、いみじうえんなる文取り出でたり。「あなおぼえな」とて見給へば、

「あふことはなべてかたきの摺ごろもかりめに見るぞえづゝろなき」といとをかし

げなるを、「あやし誰ならむ」とうちはゝゑまれて、さわがしければかへりごともせず。なさけなしやと、いとはしさに、事はてゝ皆人も靜まりぬるに、夜深き月のいと明く澄めるに、麗景殿の細殿をとかくたゝずみて、

「あふ事はまた遠山のすりめにて玄づゝろなくみけるたれなる」とうそぶくに、人ごゑもせず。人のなきにやと思ふに、文いだしつる一の口に、

「めづらしと見つる心はまがはねど何ならぬ身のないりをばせじ」と答へたるけしきもなべてならずをかしかなり。立ちよりて、

「名のらずば誰と知りてかあさくらやこの世のまゝも契かはさむ。これやかたきのすり衣なりける」などそこはかとなく言ひすさむけはひの、ちかまさりはたなつかしう、いみじくあいぎやうづきたるを、いとゞ心にしみてをかしと思ふに、のどやかに立ち給へる、いかゞあらむと、いとつゝましうなやましけれど、よのつねのさまに、亂れいりなどすべうもあらず。女も、女御の御おとうとやうの人なるべし。なべてのけしきならずと見知らるれば、なさけなからぬほどに語らひて、人々來る音すれば、うち忍びて、立ちあがれぬ。かやうにひとめも見る人の、心をつけてまちおぼさむ所も、人の聞き傳へむ事も知らず、聞えごちかくるあまたあれど、人のほど輕らかならず、いとをかしかりぬべければ、なさけなからぬ程に折々いひかはしさらぬかきませのほどは、知らず顏にて聞きすごし、いとこよなく物どほく、もてをさめ給へるを、玉のきずと、飽かぬことに思ふ人々あり。この宰相の、あまりすぐさず

たづねよりいひかゝりうかゞひありくを、をかしと思ふ人おほかり。『その年たちかはり、朔日ごろ霞める空は、春の氣色とのみ見えながら、まだふるとしにかよふ雪、うち散りをかしき程に、宣耀殿に參り給へれば、中納言も侍ひ給ひけり。里の御すまひにてはいにしへはうへたちの御いどみごゝろの名殘殊の外にうとうとしかりしかど、この二所の外には又たぐひもなし。我が世も知らぬを世づかぬありさまをも、こと人に言ひ合せ給はむよりは、かたみにうち語らひつゝこそすぐしたまはめと言ひ知らせつゝ、おのおのおよすげ給ひしより、みすの内には入れ給ひしかど、殊の外の御物はぢに、母屋の内のみすのへだては、猶あべかりしを、うちに參り給ひては、おりのぼりの御かしづきの程に、けぢかくならひ、かんの君も世をおぼし知り、やうやうおもなれゆく心にや、今はたゞ几帳ばかりのへだてにて、物などなつかしう聞え給ふ。世に似ずをかしき御けはひなど我が身はさるものに言ひおきて、この御有樣をだに、例の人に見奉らばやと、飽かず悲しうおぼす。かんの君も、この御ありさまを見る度ごとに、胸うちつぶれつゝかたみにおぼし亂るゝ心のうちにも、おのづからさるべきほどゝ言ひながら、うとからずあはれも深かりけり。御をつらひは、紅梅の織物の御ぞ、御几帳はみへなるに、女房などは梅のいつへをひとへうち重ねつゝ、紅梅の織物の唐衣、蒲黃のみへの色あひも、世になくつくして、數もなくなみゐ侍ふに、中納言紫の織物の指貫、紅の色ふかくつやこぼるばかりなるを出して、あざやかについゐ給へる形の、常よりもはなばなとあたりにこぼるゝあいぎやう、見まほしくおつかしげなる事、いとたぐひなきを、例の世と

共に胸わく世なき。殿の御心のうちなれど、見るにはうちゑまれて、物思ひも忘るゝ心ちして、御帳の内をさしのぞき給へれば、紅梅のうへ濃く匂ひたる御ぞどもに、濃き掻練、櫻の織物の御小袿、紅梅がさねの御扇をもて紛らはし給へる御かたち、中納言の顔のにほひを、うつしとりたらむ程に、見わきがたきまで通ひ給へれど、これは今少しあてに薫りなまめきたる所やこよおくをかしからむ。御ぐしは、つやつやとまよふすぢなく、ゆるゝかにかゝりて、たけに二尺ばかり餘り給へる。すゑつきの白き御ぞにけざやかにもてはやされたるなど、いづくともおく、繪に書きたる程なるを見るごとに、あないみじと胸うちふたがりて、この御有樣のよろしやかに飽かぬ所わらましかば、さればや、尼法師になして、深き山に跡を絶え給はむ事もわたらしき思ひはうすくやわらまし。かくすぐれ給へる御さまどもにつけては、うれはしうもかなしくも、かたがたもろき涙ぞこぼるゝ。暮れて月いと明きに、「御琴の音もいかゞなりたる。」「中納言の笛の音に合せて、承らむ」とて、箏の御琴そゝのかし聞え給ひて、中納言に横笛奉り給ふ。例のすみのぼりをかしげなる音の、遙に雲居を分けて響きのぼるやうに、おもしろういみじきを、涙とゞめがたきに、かき合せ給へる御琴の音、劣らず限なきを、あたりもさらぬ宮の宰相、立ち聞きけるに、笛の音も琴の音もいみじのとや此の世の物ならぬいもせの御ざえどもかな、かたちありさまも、かくこそはあらめと聞くに、そゞろに涙こぼれて忍ぶべくもあらねど、まやのあまりをうちうそぶきて、そりはしの方に立ち出でたれば、中納ごん琵琶をふと取り替へて、おし開きて、さませと搔きならしたるに、「とばり

帳ならぬこそ侘しけれ」とて心時めきせらるれど、おとゞのことごとしきさまして、出でゐ給ひぬれば、かひなく口惜しうて、いとすくよかになりぬ。ことてんじやうびと、かんだめなど參りて、御たいめんあるにも、宰相は、ありつる御琴の音の耳につきて、さばかり何事にも世の一つものなる、中納言のめうつしにも、いかばかりならむ琴の御耳にもとまり奉りなむと思ふに、いとねたく口をしうて、琵琶奉り給ふを、わりなくすまひ給ふ。女房など、中納言殿にこそひとしからね、なべての人にはこよなくすぐれたるを、いとなつかしうをかしと見けり。同じみ垣の内になりては、時々かやうの音を聞くにも、岩うつなみのとのみ思ふ事の、かなふべき世はなげなるを思ひ侘びて、霞み渡れる月のけしきにも、心のみ、空にあくがれにたるに、ながめ侘びて、れいの中納言殿に語らひて、慰むめとおぼして、さきなどもことごとしうもおはせず、忍びやかにておはしたれば、例ならずしめやかにて、「うちの御とのゐに參らせ給ひぬ」といふ。かひなく口をしう、うちへや參らましなどながむるに、箏の琴の音ほのかに聞えたるに、さと耳とまりて、さならむかしと思ふに、これもおさからず、心を亂りし人の鹽燒く烟になりにしぞかしと思ふに、今とても思ひ放たぬ心は、胸うちさわぎて、とかく紛れ寄りてかいまめば、はし近くすだれを卷きあげて、彈き出でたる音を聞くよりも、月影にいと身もなくきぬがちにて、あえかに美くしうあまめきたるさま、あいしのかみときこゆともかぎりあれば、これにはいかゞまさり給はむとする、優れたる名は高けれど、かくは思はざりしを、まことにいみじうありけるかなと思ふに、又たましひは、この人の袖のうち

に入りぬる心地して、見すてゝ立ちかへるべき心ちもせず、うつしごゝろもなくありにければ、さは今宵入りなむと思ふに、夜更くれば人々はとかくより臥し、あるは庭におりて、花の影に遊ひなどして、御まへには人もなきに、琴の上に傾きかゝりて、つくづくと月を詠めて、

「春の夜も見る我からの月なればこゝろづくしのかげとなりけり」とひとりごちたる、父母とても數多の中に優れたるおもひ限なかなり。見る人とても、さばかりめでたく優れて、ゆきかゝづらふ所もなく、いとあまり世づかぬまでまめやかなるを、何事の心づくしあるにかと聞くに、いよいよすぐし難くなりまさりて、押しあけて、つゝまず歩み入り給ふを人々は、中納言のおはすると思ひて驚かぬに、ふとよりて、

「わすられぬこゝろや月にかよふらむ心づくしのかげと見けるは」。けはひはあらぬに、あさましとあきれて、顔をひき入れ給ふを、かき抱きて帳の内にゐて入りぬ。「やゝ」とおびゆるやうに云給ふを、御まへ近き御めのとごの左衛門といふ聞きつけて、「殿のおはしましつると思ひつるをいかなれば」と驚きて寄りたるに、言ひやる方なくいみじき御けしきなるに忍びやかに泣き給ふけはひなるを、「あな心うや。いとつらく覺しすてしか」と、云ふねき心に逝れぬ御契はかゝる世もありけるぞかし。「いかにおぼすとも、今はかひあるべき事かは。唯さりげなくてを」とこしらへ給ふに、その人なりけりと聞くもあさましういみじけれど、げにいふかひなければ、人にだに知らせじと思ひ、「御まへには入らせたまはぬなり。まろは御まへに候はむ。月をもはなをも、よく見あかし給へ」といへば、わかき人々「あはれ知れらむにこそ」と言ひながら、あそび出でぬめり。女君は中納言にならひて、人はたゞのどやかにはづかしう、うちかたらふことより外にはなきものとのみおぼすに、いとおしたちなさけなきもてなしなるに、絶え入りぬばかり泣き沈むけはひありさまの、限なくあはれにらうたげなるに、かくてのちも心安く、あひ見ざらむ事のわりなきに、猶中納言は怪しがりける人かな、いみじうまめなるは、この人に志のたぐひなきとのみ思ひしを、さま異なりけるひじりごゝろにこそありけれと、めづらかにもさまざまおぼゆ。あふ人にしも他かぬ夜を、まいてはかなうあけぬなり。左衛門いられわぶれば、出でぬべき心ちもせねど、さりとてあるべきならねば、なくなく心のかぎりたのめ契りて、出で給ふ心ち、いめのやうなり。

「我がためにえにふかければみつせ川後のあふせも誰か尋ねむ。猶おぼし知らぬこそかひなけれ」といへど、いらへもせず。左衛門にいみじき事ども語らひて、立ちかへりて、夢かとだにえ思ひわかず、よゝと泣かれぬ。女君はましてあさましう、うつゝともおぼえぬ心まどひに、消え入る心ちして、起きもあがり給はねば、「御こゝちの侘しきにや」など、人々見奉りあつかふに、中納言、うちよりまかで給ひて入り給へるに、いとゞいかで見え奉らむと、侘しきまゝに、ひきかづき給へるを、「などかくは」と問ひ給へば、御前なる人、「よべよりれいならずおはしまして」となむ聞ゆれば、いとはしく心苦しうおぼして、そひ臥し給ひて、「いかにおぼさるゝぞ。今まで御せうそこのなかりけるよ」など、いとなごやかに、あてはかに、あつかひ給ふにつけても、いとゞめづらかなりつるけしきは、ふと思ひ出でられて、胸ふた

がりぬ。うへもいかなる御こゝちぞとおぼしさわぎて、まつりはらへなにやかやとさわがしければ、中納言も立ち出で給はず、添ひ居給へば、左衛門が許に立ちかへり、ひまなき御文をだに見せ奉らず、あと絶えたるまゝに、宰相の君は、月ごろのものおもひにいよいよ重ねつる心ちして、侘しく堪へがたく、かくては生きめぐるべきこゝちもせず、年ごろものゝいとかくおぼえましかば、今までいきめぐらましやはとおぼえて、これかれと惑へどすべきやうもなし。左衛門が許には、日にちたびみくらの山の所なきまでかきつくし給ふを、若やかに物深からぬ心地には、えもいはず、あてになまめきたる氣色して、命も絶えぬばかり、泣き侘び給ひしあかつきを、いとあさからず心苦しと見奉りにし心のしみにしかば、御ふみのひまなき言の葉など、あはれに悲しげなるも、いとはしくはなちがたく、色めきたる心に思へれば、いといめのやうなることの後、そのまゝにいみじくおぼし入らせ給ひて、御心ち例ならず物し給へば、殿のひまなく添ひおはして、かひなきまでも、えこの御文をひき出でぬよしを、同じさまに書きおこす。げにさもあらむかしと、消え入りぬばかりなりし氣色も思ひ出づるに、うらめしさも忘れて戀しく悲しきに、我も起きあがり、ありきせむともおぼえず、つくづくと起き臥し歎き侘びつゝ、さても中納言の淺からず見えながら、いかなりける事ぞとよ、ありし世のほどにこそ、中納言も泣き沈むらめ、大かたの人がらは、いとめでたく目もあやに優れて、なつかしうあいぎやうづきながら、かやうの方は、あながちにもと、妬くうち思ひ放ちて、なさけなくもてなしてすぐすなりつらむかしと思ひやるも、いと珍らかに、あり

がたかりける人の心なり。今よりのちうちやとけむと思ひやるさへ、胸うちふたがれば、いかにかまへて、盗み出でゝしがなと思へど、かけても我に心をかはし、露の言の葉をかはさばこそあらめ、さりとてひたぶるに亂れ入るべきやうもなし。さばかりこめかしく、あえかなりつるけはひ有様には、中納言のめでたく、なよびかになつかしう、唯うち語らふのみこそ、あはれに心につきて思ふらめ、我をばなさけなくうかりしとぞ、思ひ出で給ふらむと思ひやるに、涙もとゞまらず。月を見るにも、「見るわれからの」と一人ごちし思ひ出づれば、かきみだる心ちす。中納言は、さしてその事とおどろおどろしからぬ御心ちにて過ぎゆけば、さのみもえ籠り居給はず、大殿うちなどに參り給はむとて、「かくのみはればれしからぬ御心ちを、ありき侍らむほどこそいとしづ心なかりぬべけれ。よのつねに起きわがりなどして試みさせ給へ。何事も同じ心に聞え合せて過しつるこそは、いつまでと心細く覺ゆる道のはだしにも、まづ誰よりもひきとゞめらるゝ心ちもし侍りつれ。かくてのみしづみ臥し給へるを見侍れば、いとゞながらふべくも侍らず、物むつかしう覺え侍る」と、御ぐしをかきやりつゝ、はなばなとにはひみちたる御顔に、涙をうけ給へるまみのけしき、いみじうわはれなり。女君、いさゝかをゝしく、荒々しきけはひもなく、唯うち語らひて過しつるは、つゆにても心おくふしまじりても覺えざりつるを、我が世に知らぬ憂き契ゆゑ、この人にも隔たりおぼえぬべき事とおぼしつゞくるにこたへもやり給はず、いとゞ顔をひき入れて泣き給ふけしきなれば、いと心得がたく、もし我をおろかなりなど、人の聞えたるにやといとはしく心ぐる

しければ、うちなげき、「いと疾うまかで侍りなむ。御前に人多く侍ひ給へ。ものゝけなどのするわざなめり。心えぬ御けしきのまじるは」と、言ひ澄きて出で給ひぬ。うちに參り給へれば、ないしのかんの君の御方に、女房など珍しがりきこえて、日ごろの物語などするついでに、「宰相の君といふ人はいかにぞ。里の去るべにあらぬ身の、常にうらみらるゝがむつかしきに、ゆづり聞えてし都鳥は、あなづらはし、わたくしの志そへられしとにや、この日頃は音あきこそめやすく侍れ」とこまやかに笑ふ。辨の君、「その中將は惱み給ふ事ありとこそいふなりしか。げにひまなくゆきあひ、うるさきまで音づるゝ人の、この日ごろ音なきはうべなりけれ。いとほしかりける事かな」と聞き驚かれて、うちよりまかで給ふまゝに、立ち寄り給へれば、うち聞くに胸つぶるゝものから、あさからず驚かれて、たいめんし給へれば「日ごろ例あらぬびやうざにかゝり侍りて、閉ぢ籠り侍りつるがいぶせさに、うちに參りて侍りつるに、いたはらせ給ふ事ありて、久しく參らせ給はずといふ人の侍りつれば、驚きながら」とのたまふ。顏赤む心ちして、いとゞ去づかならぬ心の中ながら、「わさとことごとしかるべきに侍らねど、みだりがはしうおこり立ち侍りぬる時、はた動きなどもせられぬくせにて、ゆでなどし侍るとて籠り居侍るに、この物せさせ給ふびやうざ、誰にか」といふにも、うち忘れてひがごとも去つべし。ことごとしからず言ひなせど、いといたく青みおもやせて、まめやかにくしだるを、れいは見る度ごとに、うるさきまで、よろづに語らひ亂るゝに、ことすくなにしめりたる、げにおぼろけならずこゝちのあしきなめりと見ゆるもいとほしけれど、女君

の例ならぬ氣色のおぼつかなければ、「まことに御けしき猶例ならずげなり。瀧のよどみ耻しげなるまでもやせ給ひにけるかな。御心ちの苦しきにはあらず、いかなる御心ちの亂れぞ」とうちはゝゑみて言ひあてたるに、おもて赤む心ちすれども、これにぞうち笑はれて去をれ姿は、今のみや御覽ずる」といたく亂れぬ程のけしきにて、かへり出で給ふ。夕暮のたどたどしき霞のまより、にほひこぼれたる櫻の花もにほひおさるゝまでめでたきを、つくづくと見遣りて、かゝる人に朝夕めなれて、我をば何とかは思はむ、疎きせずつらきを、ことわりかなと思ひつゞくるに、いとゞ思ひやるかたなく涙こぼれて、つゆまとろまでのみ夜を明し給ふ。かくのみなげきいられ、人目もえ憚りあふまじく責め侘び給ふ。左衞門、いと心よわく語らひ靡かされて、中納言、例のうちの御とのゐなる折々、夢のやうに導き入れ給るを、女君は、たびごとに涙にまつはれて、つゆにても人にけしき聞きつけられては、いかでながらふべき身ぞと、おぼし入りながらも、ほのかなるゆきあひのをりをり、うつし心もなきまで泣き惑ひいらるゝさま、なまめかしう哀げなるも、たび重なれば、見知られ給はずもあらず。中納言のいとめでたく優れながら、よそよそにて、人めばかりなさけあるまさにのどやかにさまよきめうつしには、かういといみじう、死ぬばかり思ひいらるゝ人を、志あるにこそと思ひながら、けしきにても人の漏り聞きたらむ時と、恐ろしうそら耻かしきに、人去れぬ哀のみ知れずしもあらずなりにけるも、我ながらいと心うと思ひ知らるゝ。かくのみ物を思ひ、はればれしからで明し暮すに、殊におぼしもわかぬに、みつきよつきにもなりぬれば、皆人

見奉り知りて、おとゞ「この月ごろ、さしてそこはかとなき御こゝちの、かくのみ例ならぬは、もしあるやうあるにや」と尋ねあないし給ふにも、たしかならぬ限は、さも聞えざりつるを、御湯などまゐる人々見奉りて、「さにおはしけり」と聞ゆれば、いといみじとおぼして、名みひろごりて、今まで御いのりなどもせざりける事と騒ぎ給ひて、「中納言の志などの、よこめもせずねもごろなる樣にて、さばかりの人ざまにては、殘る隈なくてすきありかむも、いかに咎むべきぞ。聊のまよひなく、まめやかなるさまのあり難く、世のためしにも引き出でつべきぞかし。ましてこの人の顔つきに似たる人さへさし出でなば、我が家の光にこそはあらめ」と涙ぐみつゝ言ひつゞけ給ひて、いみじくゑみて渡り給ひて、帳の前に居給へるに、いと苦しくて寢給へるに、殿も御けはひの近くすれば、起きあがり給へるに、いみじく嬉しとおぼしたるさまにて、寄り給ひて、「いかにぞ。例ならぬ御心ちを、今まで聞かざりける事、御いのりなどもせさすべき事」と泣きに泣き給ふを、あやし、かやうには常に心ちなやましくのみ覺ゆるを、怪しかりける事の後は、物なげかしく心細くのみ覺ゆるを、まことにさる事もあらば、中納言いかにおぼさむ、同じさまにて見え奉らむことの、いみじさをおぼす心まどひに、あせになりておはすれば、「あいなの御物はぢや」とていみじく嬉しとおぼしたるさまぞ、かぎりなきや。かへり給ひても、さまざまのくだもの、なにやかやとおぼしいたらぬ隈なく、あつかひ聞え給ひて、うへにも、「疾く渡りて見給へ」と聞え給へば、「耻しうもおぼすらむ。あまりけゑようにな聞え給ひそ」との給へば、「いでやそこぞ大將女御の御かたがたを

こそ思ひ聞え給へれ。この御方には愚なるなめり。かく云るくなるまで知らぬ人やはある。年頃思ひ聞えしほいありて、我が胸をあけ給ふべき事とて、御めのとゞも召して、「必ずしも え見知り給はじ。けふよき日なり。夜さりおはしたらむに、ほのめかし聞え給へ」などのたまふほどに、中納言おはしたり。「さりや、夜をだにふかし給はぬさま、この人の御心おろかにあはあはしからましかば、いかに胸いたからまし。女は后になりても何にかはせむ。この人に用ゐられたらむのみこそめでたかるべきことなれ。かしこく思ひよりにけり」と我れぼめをし、言ひちらし居給へるもいとあはれあり。中納言、御もの參らする御まかなひに、なかづかさのめのと侍ひて、おとゞのおぼし悅びて、「疾く聞えさせよ」とのたまはせつるよし、ほのめかし出でたるに、中納言、胸うち潰れて、あさましと聞くに、御顔のさと赤みたるを、耻しくおぼしたるなめりと心えて、さはいへど、わかの御さまやとをかしう美くしう見奉る。女君は、いとわびしく、汗も涙も一つにて、ひきかづきたまへるを、中納言も、れいのやうに臥し給へれど、何事をかは聞え給はむ。よづかぬ身の、うつしざまにてながらふるを、かりそめに云づ心なく思ひながら、その事となき限りは唯母上の人におされぬおぼえ、あなづらはしからざめるを、見すて奉りては、いかなるやみにか惑ひ給はむ、殿もふようのものにおぼし捨てず、ひとひも御覽せられぬをばいとおぼつかなきものにおぼしたるなどを、さまざま背き捨て奉りても、いとゞ罪淺からずこそならめと、さすがにすがすがしくも、思ひたゝずありふれば、遂にをこがましき事も出できぬる我が身の心の中こそ人に似ず心憂けれ、大方

の世のおぼえは、ちりつくべうもあらぬ身を、世に取りては、去れがましう見思ふ人あらむ、いみじき事なりかし、かくてありながち、いまだふれざりけるさまなどを、怪しと思ひあやむる人もあらむなど、さまざまに、いとうき身の耻しさなりや。かゝる身にては、いく世もあるまじきほど、獨あらむと思ひしを、悔しう心憂くもあるかなと、つゆまどろまず、思ひ明さるゝに、猶世の中に、跡とめむ方も覺えず。誰ならむ、かゝる事のありけるを、猶何心もなく出で入りまじらひつるを、いかにをこがましと、うち守る人もあらむなどつくづくと思ひ明してかたみにとみにも起きわがらず、そむきそむきにて起き出でたまふとて、女君をひき驚かすに、いよいよひきかづきまさり給へば「いと堪へがたきわざかな。月ごろも怪しく、ゆるされぬ御氣色と見侍りながら、曇りなきみづからの心のまゝに、何心なく御覽ぜられつるを、世づかぬ身のありさまを、いかにおぼしなるぞなどいとほしうこそなげかれ侍るに、心も知らず、殿のひとへにおぼし咎めさせ給はむこそいとくるしけれ。いかゞおはしはて給ふべき。いざや、これより過ぎたるらむ志の、ゆくへも知り侍らざりけりや。人には唯わくる方なく、御あたり離れぬばかりを、たぐひなき事に思ひ侍りけるしれじれしさも、みづからこそ、くやしくも耻しくもかへすがへす思ひ給へらるれ」と、いとのどやかに、いみじう耻しげにて、忍び難きふしぶしばかりをうちほのめかして、我が心の中にもいづくを恨み所にかはと、心ながらもをかしう覺ゆるに、いとしも、心動く程の心やましさはなきなるべし。えもいはずにはひやかに、うちほゝゑみて臥し給へるを見るに、いどゝしき心ちは、泣きしづみ

給へるも、こしらふべき言の葉も覺えねば、「御まへに人さぶらへや」と言ひ置きて、御てうづ召しておこなひ給ふにも、我が心のうちはいたく心動き、あながちに物を苦しう思ふべき故もなきに、人はをこがましともよづかずとも、さまざま目を立てゝ思ふらむこそいといみじう耻しければ、なぞや、すべて遂になながらふるをこたりに、かゝるたがひめは出で來ぬるぞなど、いとゞ思ひとぢめつるこゝちして、經をつくづくと讀みゐ給へる、何となく、物思はしき御心のすむにまかせて、うちあげていみじうたふとく讀み給ふなるを、聞きふし給へる女君の御心ち堪へがたう悲しく、おもてのおき所なく歎き亂れ給ふをも、人はいかでか知らむ。珍らしう嬉しき事を悅び思ひて、大殿にも、いつしかとほのめかし聞かせ奉り給へるを、殿は、いと怪しうあさましき事かな、中納言、今はさるかたに世に並びなくまじらひ立ちにたれば、世づかぬ身を知るとても、さのみ思ひ歎くべきならぬを、世と共に、いみじく物思はしげなる氣色なるも、かやうに、したに怪しき事のありける亂れにやと、聞き驚かれ給へど、いかなる事ぞと問ひ聞え給はむも、今はいと耻しげなるさま、親といひながら、憚られてえ聞え出で給はず。人ぎゝは、れいざまに聞きはやし給ひがほなるを、中納言は、殿のおぼすらむ事、あかなか傍いたくおぼえて、出で交らふも、我にはをこがましとも怪しとも、目をかけて見る人あらむかしとおぼすに、いとゞ人をば、雲居に物遠くもてなし、世をかりそめに思ひなすがほを、今はもてあらはして、月ごろは、女君をもさる方にあさからず契りかはして、起き臥しもなつかしうひとつ心にて、世づかぬ我が身に添ひ給ふべかりけるちぎりも、心苦

しう、よの常のまよひなどありと、聞かれ奉らずもがなと、うちの御とのゐなどにたちとまれるよなよなも、いかにおぼすらむなど思ひ憚られ、深く哀に思ひ聞えしを、かゝる事の後は、怪しくもありけるかなと、おぼし去るらむかしと思ふに、耻しうもあいなくも、心の中はへだゝる心ちして、むげにさのみうらなかるらむも、をこがましかるべければ、いとありしやうにもむつび給はぬを、女はことわりに言はむ方なく、耻しう悲しとおぼし入りて、うちとけても更に見合せ給ふ時なく、なかのうとくもといふやうになりゆく御氣色を、さはいへども、まことのちぎりこそ、心に入るらめとのみ心得るに、あながちに恨み慰むべきやうもなければ、けしきもあらぬさまにひきよけ、思ひすましたるさま、深くなりまさりておはする折も、とがちに、唯おこなひにのみ心を入れて明けくらし給ふ。大殿、うちの御とのゐがちになりたるを、珍しき事そひては、今少し志添ひなむと思ひしを、いと怪しと人々も見奉る。殿も上も「あやしく中納言さうじがちに、よがれがちに、この頃なり給へるかな。いかなる事にかあるらむ」と歎き給ふを、見聞き給ふ御心ち、おき所なく侘しう、いかで消えうせ、身をなきになしてしがなとのみおぼしなるを、かの人は、左衛門あさからず心をよせたる道の去るべなれば、心ちのありさまなど委しく聞くに、いとゞあはれに、ちぎりのほど思ひ知られて、さばれ、世のつゝましさ、人目の見苦しさも知らず、ぬすみ隱してしがなといられまさり給へど、さはたあるべき事ならねば、思ひ亂るゝ事多かる世にぞありける。中納言の君は、宰相のいとありしやうにはあらず、いみじく物を思ひいれたる氣色、素より志深しと聞しに、

この人ばかりこそあらめ、さはいへど、ことひとはえふと思ひよらじを、さらばこと人よりもうちまはり、したに思はむ事の耻しくも妬くもあるべきかなとおもひよれど、さしてさは知り難き事なりかし。なぞや、いとうき世の中に、せめてながらふべき親の御おもひなどを、深くたどる程に、かゝる事も出で來ぬるぞかしなど、ちゞに思ひあくがれて、見えぬ山路尋ねまほしき御心ぞやうやう出で來にける。そのころ吉野山に宮と聞ゆる人おはしけり。先帝の三のみこにぞおはしましける。萬の事すぐれて後れたる事なく、世の人のしとする事、かたがたのざえ、おんみやう、天文、いめ、さうにんなどいふ事まで、道極めたるざえどもなりける。この世にあまり過ぎて、昔はうがくさうとて、十二年に一度もろこしにさるべき人渡し遣してかの國のざえを習はされけり。末の世となるまゝに、人のようめこんじやういとわろくなりゆくにより、唐土に渡る人絶えたるを、我渡らむとせちに申しこひて渡り給うにければ、その國に待ち受けて「ひのもとの人數多渡り來ぬ。我が國にもかしこき人多かれど、道々のざえ、かばかりかしこき人なかりき」と驚き仰ぎて、その國の一の大臣、並びなくいつきかしづきけるひとりむすめに、聟に取りて、思ひいたづきける程に、ほどなくうちしきり、女二人を產み置きて、その母なくなりにけり。他かぬ世の人なりとても、ものとはく世づかぬ心ちもせず。この國は知らず、にほんにておのづから、女御后帝の御むすめを始めて見しに、かばかりのかたちざましたる女のたぐひなかりきと深く心をとゞめて、かへる御心も思ひ絶えにけるに、悲しういみじとはよのつねなり。やがてその國の內にて、ほいをも遂げ、身

をも捨てむとおぼしけれど、かたみにとゞまり給へる姫君に、ひき別れむ事も悲しく、覺し煩ひし程に、その大臣もかなしびに病つき、命堪へずしてなくなりにければ、いとゞたづきなくさへなりて、ありめぐるべくもおぼされぬに、その時の大臣、公卿、又聟に取らむと聞えけるを、又人を見るべき心ちもし給はざりければ、かけても聞き入れ給はざりければ、妬き心ども出で來て、殺さむとさへかまふる氣色を聞き給ひて、「惜しからぬ命とはいひながら、知らぬ國に、我が身をはふらかしてむ事いと悲しく、我をまたなく思ひあがめ、いみじく心につく人のある時こそ、ふるさとしも忘るゝ心もありけれ、ありにくゝ恐しくかへりなまほしきこと出で來て、この女君達を見捨てむも、いみじく悲しきに、もろこしの海に、なに去うと言ひける人をさせまろ、かひて渡りけるに、え渡らずなりにけるより、女通はぬ道と聞けどいかゞはせむ、船とむる海龍王もあらば、やがてわれも、旅の空に命を捨てむ、をしからずと、ひたぶるにおぼしなりてあくなりにし大臣の子どもに語らひて、逃ぐるやうにてかへりおはしけるに、惡しき龍王も、いかに心かはりける世にか、船のよどむ時なく、思ふ方の風殊更に見送るやうにて歸り給ひにけれど、世のためしにも言ひなされじ、たうの女のはらに、子どもありけるなど言はれじとおぼしたれば、この姫君たちを、いみじく隱して、ゐてのぼり給ひて、あらぬ世のさかひになりてしも、けぶりとなり給ひにし雲居さへ、遙に隔たり、悲しき事をおぼしほれて、うち去のび、この君たちをかき撫でつゝ、又人をけぢかく、この世に見るべきものとも覺されず、うち絶えはてゝ、泣く泣く過ごし給ふに、いかゞ去けむ、この

みこなむ、おほやけの御ために、うしろやすからぬ心思ひて、我こそ國の王ならむも道理なれと、おぼしよりたるといふ事出で來て、遙なる山のさかひにも、放ち遣されぬべきを、夢のやうに聞き惑ひ、すべて我この世に、れいのかたちにてあるをこたりなり。心ばかりは、あらぬ世に住みはてながら、むげにつきなく、猶君だちの御あつかひをしてまじり居たらむ事のつきなさに、いかにも我が世と物思ひ知り給ふまでと思ひすぐしける、いと悔しき事とおぼし立ちて、俄にみぐしおろし給ひて、吉野山の麓に、おもしろき御りやうありけるに、この君達もひき具し、いづちともなく人にも見え知られで入り給ひにしより後、鳥の音だになつかしく聞きなされしも、音づるゝ人なき吉野山の峰の雪にうづもれて過し給ふ。姫君達の御かたち有樣のあはれにあたらしく、はかなく掻きならし給ふ琴の音も、からくにのほんたいおぼえて人にすぐれ給へるを、哀に悲しく見奉り給ひて、今は我が身ばかりこれより深く跡絶えなまほしきに、又知る人なく、いみじき御有樣どもに、ひたすら浮世をえゆき離れ給はぬほど、いとゞ心せけれど、さりとも、おのづからいさゝかも、人めき出でたまふ道のしるべは、必ず出で來なむと、心に深くおぼしさとりて、ちぎり定めたる人を、待たむやうにおぼしけり。中納言いとゞいかで世にあらじと覺しなる事まさりて、花紅葉につけても、四方の山邊にまじり居て人に行くへ知られでは引籠るべからむ谷の隱れ峯の上の[illegible]

さすがに、思ひをそへつべき所ありやとおぼしまはすに、吉野山の宮の御うへを、委しく語り出づる人ありて「その御すみかなむ、むげに世捨て離れたるひじりの御すみかとは見えな

がら、水のながれ、岩のたゞずまひも、都にはすべて目馴れぬさまにて、ものおもひも慰め、かつは心ゆきぬべき御住ひなる」とかたり出でたるを、さる人物し給ふとは、皆聞き置き給へれば、世を背かむも、むげに山伏などのあたりに立ちよりて、その人のでしになりてあらむは、さすがに物恐しく侘しかるべきを、御心ばへもありさまも、なべてには物し給はじかしと今迄我が思ひよらざりけるよとおぼじて、この語る人を召して「何のゆかりに親しくは云りたるぞ」と問はせ給ふ。「をぢに侍る人かの宮の御弟子にて、夜晝御あたりも離れで、佛にとりわき思ひ給ふるが、やうありて侍ふに、さるべき時々、あひとぶらひまかり侍る」と申す。「いと嬉しき事かな。我その宮を年ごろいかで知り奉りて參り通ひて、世に絶えたるきん習ひ奉り、又見及ばぬふみの、所々聞きあらはさむと思ひながら、さばかり住み離れたる所ある御心に、よもうけひき給はじと思ひ憚りて、口惜しく思ひすぐすを、御氣色給はらせよろしく覺しめさればいみじくみそかに參らむ」といとねんごろなる氣色にて語らひ給ふ。「いとたはやすき事に候ふなり」と申せば「さらばこの頃の程に參れ」との給へばいにけり。をぢの僧に「云か云か、殿の權中納言殿の、かうかう申させ給ふ」と委しく聞ゆれば「さきざきさるべき人參り給ひ、御せうそこども申させ給ふもありしかど、すべてまだ世にありけりと、人にも聞きつけられじとて、更になむ聞し召し入れぬものとなりにたれば、この四五年は、音づれ聞え給ふ人もなかめるを、いかなるべき事にかは。いかにも御けしき給はりて聞えむ」とて暫しとゞめて「かうかうなむ、わざとなにがしが甥なる人を使にて賜はせたる」と

まうせば、とばかりうちおぼしめぐらして、「さばかり榮耀にまとはれて、めでたき蝶花のことのみこそ心に入るらめ。いかに聞き給ひてか、ふかき山までおぼしいるらむ。それもさるべきえん物し給ふ人にこそあらめ。いと嬉しくなむ。立ち寄らせ給へ」といと御心に入りたる氣色にて、すがすがしくうけひき給ふを、いと怪しけれど、おぼしうる所あるにこそあるべきと心得て、「いとかたき事と、いとはしくかひなくてかへり給はむとを思ひつるに、かうかうなむのたまはする」と語れば、喜びながら歸り參りて、委しく聞ゆ。かつがつ思ひかなひぬる心ちして嬉しき事かぎりなし。「あなかしこ、かくなむと人に聞かすな」と口がため給ふべし。この度あまり世を背きなむ事、あえなかるべしとおぼしなむ、又よかなりとうけひき給はじ、たゞ人の御ありさまを見奉りて、この世ならず、たのみ申すよしを契り聞えて、この度は立ちかへりなむとおぼす。「いめいみじくさわがしく見ゆと告ぐる人あれば、清きわざせさせに、七八日ばかり山寺になむあるべき。そこと知られぬれば、心あわたゞしく、人々きなどして、行ひも紛るゝ心ちす」など言ひ紛らはし給ひて、出で立ち給ふとても、女君とは、「二三日ともへだゝるべきほどはおぼつかなかるべき事を、哀になつかしくうち語らひしさるかたに淺からぬ御中と見えしを、この事の後は、かの御心の中の人めもをこがましければ、さしもわらずなりにたるを、女君はいと耻かしく悲しきものから、かゝるにつけても、あながちなる人のちぎり淺からぬあはれは、こよなく身に云みたるも、我ながらいと心うし。中納言も、さこそおぼすらめと推しはかるも、それを恨むべき故ある身かはと思ひはな

れ、よろづを見聞きしり顔ならぬぞ妬げなりける。御供には、しるべせし人ばかり、さては御めのとごやうの人、親しくおぼす四五人ばかり、いみじく忍びて詣で給ふ。九月ばかりなれば、むらむらけしきばみゆく山の氣色もあはれなるに、まだ見も知らず、遠く分け入り給ふまゝに、心ぼそくあはれに、とのうへ何事かおはしますらむと覺束なく、かりそめと思ふ道だに、かうこそおぼゆれ、まして今はと思ひたらむほどより、人わろくおぼし惑らる。

「涙しもさきに立つこそあやしけれそむくたびにもあらぬ山路を」。道よりしるべの人、先立てゝ奉り給へば、御しつらひかきはらひつくろひて、御ぞ奉りかへなどしてまちきこえ給ふ。うち入るきはにおはしたるよし、御せうそこ聞ゆるも、いたく用意して入りおはしたり。浮線綾のところどころ秋の草をつくして縫ひたる指貫に、尾花色のざうがんの襖に、紅の打ちたるぬぎかけて光を放ち、はなばなとめでたく、只今極樂のむかへありて、雲の輿よせたりとも、猶とゞりて見まほしき御ありさまなり。何事も皆口惜しくあせゆく世のすゑなれど、かゝる人のものし給ひけるよと驚かれて、とばかりまもり給ふに、いとゞもてしづめて侍ひ給ふ。みこの御有樣も、いと清げにおはしける人のおこなひにやつれ給へる樣、いろ玄ろく、頭いと青やかにわてにかはらかにて、思ひやり聞えつる程よりは、若く清げにおはします。御物語やうやうちとけゆくまゝに、ざえの程などこの世にあまりて、とこごとにすぐれたりける人かな、いかでかゝらむとめづらかにおぼす。姫君たちの人めき出で給はむ玄るべなりと、御心のうちにさとりおぼせば、いとなつかしくうちとけ給ひて昔よりの事も

も、もろこしにわたりたまひて、ありしさま悲しういみじき目を見て、世になき女二人をえ見すてず、れいなきやうなる世のおとぎゝ、かしこく身に添へて、憂かりし世のみだれにもひきかゝり、猶この人々を道のほだしにて、これよりふかくも身をえかくさぬよしを言ひつゞけ給へるも、あまりすぐしてひじりだちても見えず、あてやかにあはれげに、うちおぼしのどむるけしき、見る人も涙とゞめ難きに、我もなくなく、「さても物し給ふか。只今の人めは、人よりけに、心細くも口をしくもあるべきにも侍らね」といはけなくより、怪しく世にたがひ、人に似ぬ有樣にて、やうやう物思ひ知らるゝまゝに、世にありにくゝ、思ひなるさまを聞え給へば、皆さ見え給ふ所あれば、うち泣き給ひて、「玄か御心ならずおぼすべき事なれど、それ暫しの事なり。いかなるにもこの世の事ならず、さきの世のものゝむくいなれば、ともかくも、人のおぼすべきこの世に、よをなげき人をうらむるなむ、いと心をさなく、むげにさとりなき事に侍るべき。更におぼし厭ふべき御事にも侍らず。遂にはおもひのごと、かみをきはめ給ふべきちぎりいと高く物し給ふなり。委しく聞えさせずとも、おのづからさいひきかしと、おぼしあはするやうもあらむ。うたてさうにんめかしく聞えつゞけじ」とのたまふを、いかに見給ふにかあらむ、俄によづかぬ身を何故にかみを極むべきにかと覺す。「女君たちの御事を、はかばかしき身には侍らずとも、世にめぐらひ侍らむ限は、うしろみ奉りてむ。更にその御事うしろめたく思おぼしめしそ」と聞え給へば、「昔より更に人にかゝる事ありと聞かせ侍らぬを、さるべきにや、怪しき問はずがたりを聞え出づるも、常の事など思ひ

給へかくべきならず。かうながらも、女のみすつれど、すてられず背かれぬものにて、あひとぶらひ給ふ人なくては、侍るまじきわざとばかりを、所せく思ひ侍れど、人のちぎりすくせ皆侍るわざなれば、更にこの山に世をつくせなども、ゆいごんし思ひ給はず。しか思ひおきて侍れど、すくせといふもの侍れば、それにもかなひ侍らじ。人ぎゝおどろおどろしからず、おもりかに身を用ゐよとも思ひ給へず、唯宿世に任せてとなむ、その程のいまだ遙けきにやといと心苦しくもうるせく思ひ給ふる」とうち泣きつゝつきすべうもあらぬ御物語に夜も明けぬ。めでたくなつかしき御あたりに、御物語とて、もろこしからくにまで、覺束なく滯る所なく、地獄の底淨土の奥まで曇りなき心ちするに、よろづ心ゆき、身の歎きをもさまして、かつは哀に悲しき事多くいみじきに、立ちかへるべき心地もせず。この世に、まだもて傳へざりける書どもひろげて見せ給ふに、此の中納言の御ざえさとりのたへなる事、もろこしにも並ぶ人なしと思ひたりしを、我にも劣るまじかりけり。珍らかなる人かなと、おぼし驚かる題いだして文作らせ給ふに、おもしろく悲しき事、もろこしよりもて傳へたるふみどもにまさりて、作り出で書きいで給へる、手のさま筆のさきら、めづらかに、いみじき人をも見るかな、へんぐゑ出でたる人にこそあめれと、おぼし驚きて、うちうなきづたまふふしぶしあれば、珍しう見給ふ。はかなくて二三日過ぎぬ。宮はこの人の御有樣ざえのかぎりなきにめでゝ、おこなひもけたいし給へり。きんの御ことを、いとゆかしげにおぼしたれば、深き夜の澄める月に、掻き鳴らし給へる、物悲しくおもしろき事たぐひなし。少しばかりにて、さしおき

給へれば、とりて彈き給へる、更に同じ方ならべを、ふと聞き取りて、「いと恐ろしきまで、のこりのねは、聞えさせつるはだしとも、このはかなき人に、教へ置き侍りしに違はず、ひき取りたるとおぼえ侍るは、やまぶしの吉野の峯の山おろしに、耳ならして侍るひがみゝにや。されど、わざと尋ねさせ給へるよろこびには、うとう思ひ聞ゆべきにも侍らず」とて、姫君の御方にわたり給ひて、「かゝる人たづね物し給ひてはごろ物し給へるを、こなたにて物など聞え給へ。なべての人のやうには見えぬ御ありさまなり。ゆくりかに、人の怪しがるべけれど、うしろめたうは見えざめり」とてさるべきさまにひきつくろひ、曉近く出づる月のきりわたりあはれなるに、御せうそこあれば、えもいはぬにほひ滿ちて、まばゆきさまにておはしたれば、はし近く詠め給へる姫君たち、いとはづかしくてひき入り給ふを、「唯聞えむまゝに、かばかりよづかぬ御すまひには、何かはよの常にもてなし給はむも違へり。うしろめたくはあるまじきを」とこしらへ置きて、我が御身はあなたにおはしぬ。この御方は、少し奥にひき入りて、ちひさやかなる寢殿のいと殊更にことそぎたりしも見所あり。心とゞめて翫び給へる人の御すみかと見ゆ。うちどしめじめとひとげもせず、水にうつれる月ばかりぞさやかなる。かゝる所にいつとなく、つくづくと詠め給ひし姫君たちの御心の中いかならむと、いみじう心苦しく思ひやらるゝに、このよちかき方はなく、からぐにの心地、ものすごすごしう、深きものあはれなどは、知られ給はずやあらむなど推しはかるゝもゆかしきに、人聲もせねば、

「吉野山うき世そむきにこしかどもこと問ひかくる音だにもせず。わりなのわざや」と詠め出でゝ、うち泣き給へる氣色いみじうなつかしう哀なるを、都の人だに類ひなく思へるなかの思ひに燃ゆる人多かるに、まいてなべての人だに見ならひ給はぬ御心ちども、あさましきまでおぼさるゝに、御いらへなどおもなく聞え出づべき人もなければ、いと耻かしうわりなけれど、久しうなるも傍らいたくて、姉宮少しねざり寄りて、

「絶えず吹く峯の松風それならでいかにといはむ人かげもなし」。ほのかなるけはひ、いみじくあてに、耻かしくよしあり。心にくきほど、都にもかばかりのけはひはありがたう覺ゆるに、いづれならむと思ふに、いとゞ心もとなければ、

「おほかたに松のする吹く風の音をいかにと問ふもしづ心ろなし」。よのつねのけさうびてはあらねど、唯あはれに心深く尋ね入るよしを、いみじくなつかしげに言ひなし給ふに、少しおもなれゆくにや、をりをりあさからずさしいらへ給へる、いみじくをかしき人のけはひ、心ばへ、我にてはかひなくもあるかな、宮の宰相は、かゝる人世に物し給ふとも、いまだ聞きつけぬにやあらむ、いかに聞き惑ひ心を盡さむとまづ思ひ出でられて、我が身もなつかしくうちゑまれ、月はくまなくきり渡りたるに、蟲の聲々みだりがはしく、水の流風のおと、鹿のねなどひとつにきこえて、哀を添へ涙をもよほすつまとなる所のさま人の御わたりなり。「かゝるみすのと、いまだならひ侍らぬ事にて、はしたなく恐しくこそ思ひ給へらるれ。なうとまぜ給ひそ」とてやをらすべり入り給ひぬ。あさましくあきれ惑ひ給ひて、うつぶし

ふし給へるを、「わが君かくなうとまぜ給ひそよ。なれなれしきありさまは、よに御覽せられ侍らじ。かたじけなき事なれど、あやしながら今一人たぐひあると覺せ」といとのどやかになつかしうこしらへ慰むれど、いめのやうに思ひ騷ぎ給へるいとことわりなるに、中の君も身に添へてねざり出で給へりければ、うちそひ給へるなるべし。侍ふ人々など、こはいかにと、あわたゞしく見るもあべかめれど、いつともなく、かゝる御すまひを、心ばせきことに思ひ歎く心どもなれば、かうめづらしく、めでたき人のおはすると聞きて、心時めきせらるゝを、おのおのゝすがたども、うちなえばみたるに、かゞやかしくて入りぬるぞたのもしげなきや。こはいかにとて、寄り來る人なきよとわりなきに、人のもてなしもわやにくに、今めかしくなどもあらず。唯なつかしげなるに、我のみ思ひ騷がむもあまりなるに、心をのべて姉宮「隔てなしとはかゝるをのみや。人の思はむ所も、あさまし」とあばめ給へど、「そは唯おのづから心安くおぼしなせ。世の中にめぐらひ侍らむ限は、いかで志のかぎりを盡して、御覽せられにしがなと思ひ給ふるには、あまりおぼつかなからぬへだて多かる心ちして、いぶせく侍りければ、唯うらなく我も人もうとかるまじきよしをおもひ給へよりてなむ」など聞え給ふに やうやう慰めて物し給ふ。中の君いとわりなくて、ひきかつぎてうづもれ入り給ふを、げに心苦しくて、几帳さしかくして入れつ。「心憂くも隔てさせ給ひぬるかな。いづれをも同じ事とこそ聞えさすれ」と恨むるに、うちつゞき給ひぬべき氣色なれば、世のつねめかしくひきとゞめて、唯うちそひ臥してこの世ならずちぎり語らひふし給ふさまの、つゆば

かり疎むべきやうもなきを、いかでか見知り給はぬに、怪しうもうしろめたうもおぼゆ。明けゆくに、からやうなる人のありさを見知り給はぬに、怪しうもうしろめたうもおぼゆ。明けゆくに、いとゞわりなく、はしたなしとおぼいたり。白きひとへがさねばかり、なよ〳〵かなる御姿、いとほそやかに、ものより抜け出でたるさまして、頭つき髪のかゝり、なべてならずうちやられたるほど、袿にもいと多くあまれるあるべし。ゆゑ深くもて紛らはし給へるそばめ、いと隈なく白く美くしげにて、いはむかたなくけだかく清らに物し給ひけり。もろこしの人めかしくけどほく、人に似ぬ所やなどゆかしきに、かはかり亂れつるを、いとあてに見まほしき御有様かなとあはれにめでたく、いよいよ心の限たのめ契り給ふ。男後の御さまはた更なり。いみじくめでたきあさけの御姿を、かたみにいとめでたしと見給ふにも、あかくなりゆけば出で給ひぬ。をかしかりける人のさまかなと思ひ出でられて、御文聞え給ふ。

「今のまもおぼつかなきを立ちかへり折りても見ばや袁ら菊の花」と世のつねめきたるを、むげにさやうにとりなしけしきばむを、姫君はあいなく、人のけはひのなつかしう哀なりつるに、そこはかとなくうち語らはれつるを、今ぞいかなりつることぞとおさましく耻かしきに、心ちさへ違ひて覺え給へば、御返しも聞え給はぬを人々いみじく傍らいたがり聞ゆれど、「必ずさしも聞ゆべき事かは」とて止み給ひぬ。暮れぬればれいのそなたに渡りて、月を見つゝうち語らひ、琴の音もかき合せつゝ、明すに、心いりはてゝ、立ちかへるべき心ちもせず。はかなくて日ごろ多く過ぎゆくに、かくへだてなきさまにと聞き給へど、いかなる事

ぞなどもおぼし懲かず。「いとよし。うち語らひておはせ」とのみ聞え給へば、いとゞいかでかへだてもあらむ、さりとて、身をばかへぬものから、かくてあるべきならず、とのうへ、いかにおぼつかなくおぼし歎くらむ。右のおとゞも、いみじう恨みなげかるらむかし、みづからい御心ひとつこそ、さしもおぼさるらめと、さまざま思ひやらるゝ事多かるに、さのみもたへ籠り給はで、出で給ふとて、宮にもわさの御ころも、法服、御とのゐものなど、まことに、峰の松風おとにのみ聞き給ふばかり、荒らかにて奉り給ふ。かみしもさぶらふ人々、姫君達の御れう、紅のかい練に織物の袿など、世にあき色あひにして、さらぬ絹綾などいふ物多く奉り給ふ。御扇などなべてならぬさまなるを、更にあまりこちたく、「かゝる事は思ひ給へすてゝしものを、ほいなき事になむ」などの給へど、人がらのいとあてに心耻しげあるに、心のまゝにもかへさひにくゝてほだしもかゝづらひ侍る人々のうへは、たのみ聞えて心安くなむ、これより深く思ひ給へ入りなむ」とするよしをうち語らひてのたまふ。中納言も、更なる事は聞えさせむ方なく、「かゝる御すまひも、うつろはしきこえ侍らむとなむ思ひ給ふる」と聞え給へば、「そは只今、去かゆくりなからむことは、御ためも人ぎゝびんなく侍りなむ。かながらも、おぼしすつまじきさまにだに思ひ侍らば、うしろめたき思ひは慰み侍りぬべく」あど契りかはして、御贈物に、もろこしより持て渡り給へる、よになく、この世に傳はらぬ薬どもあるかぎり奉り給ふ。姫君には立ちかへり、限なき志をちぎり置きても、飽かずあはれなれば、

「ゑづゑゝろあらしに身をぞくたかましきゝならひける峰の松風」。女君も、めもあやになつかしう哀げなる御あはれありさまをも見ざらむは、今すこしさうざうしさまさりぬべくおぼえて、

「年をへて聞きならひぬる松風にこゝろをさへぞそへて吹くべき」。我ならざらむ人に、見せ聞かさまほしうめでたき御有樣けはひなるも、他かぬ心ちしてかへり給ふ。野山のけしき、やうやう色深くなりにけり。はかなく日ごろにもなりにけるなどあはれにて、まづ殿へ參り給へれば、「猶二三日かとこそ思ひしを、日ごろ見え給はざりつれば、心を惑はして思はぬ山なく、いづくに物し給へるぞ。世はなれて、人に知られでありき給ふは、猶いとかろがろしき事を」とて日ごろ物もをさをさ參らざりけるを、今ぞ御まへに物參らせ給ふついでに、諸共に聞し召す。世づかぬ御ありさまを、今はさるべきなりけりと、かゝるさまにつけても、めでたくすぐれて世に交らひつき給へば、おぼし慰みはてつるに、嬉しくいみじとおぼしたる御氣色いと哀なり。見れども見れども、はなやかに他く世なく、珍しく美くしげなるをうち笑みて、盡きせずまほり給ひて、「右の大殿も日頃思ひ歎きて、心苦しき事のそひてしも、心とまらぬやうになりゆくとこそ歎かれけれ。などてさはた見ゆる人めは、めやすくもてなしてこそ」など敎へのたまはせて、そゝのかし給ふものから、「世にあらむ程は猶朝夕のへだてなく見え給へ」とて、涙ぐみ給ふ。右の大殿には、四五日と言ひおき給ひしに、十よ日まで音もせず、かき籠り給へりつるを、おぼつかなく怪しき事に思ひ歎き、おとゞは物も參らず、お

ぼしなげきたるを、女君は我ゆゑ、かくのみ物をおぼすと、いとほしく悲しきに、常に心ぼそげにて、世の中にありはつまじきさまにのみ思ひ給へる人なれば、いかにおぼしなりにけるぞと、いみじく、よろづに思ひ亂れさわぐをも知らず。宮の宰相は、これをよきひまと、なくなくこがれ惑ひ給ふを、心弱く導き聞ゆるよなよなを、心うしと思ふ方はかたとしてこれこそはまことに深き志あめれと、思ひ知られ行く。あはれも淺からずうち靡き、腹などいとふくらかにうち惱み、思ひ亂れたる人ざまの限あくいみじきを、ゑのびつゝほのかに見る宰相の心まどひぞことわりなる。かたみに涙にまつはれつゝ立ち別れ給ふよなよな、物をのみおぼしまさるに、殿はいでやなど、おぼしのどむる所なく、御きよめをさへゑさわぎ、女房つねぼ[illegible]よりもわざやかにさうぞき、けさうせよとさへ立ち騷ぎ、姫君をも、「などかくては臥し給へる」とせめておこしすゑて、萬につくろひすゑ給ふも、かたはらいたく苦しきに、入り給ふ音すれば、物のうしろに立ち隱れてのぞき給へば、日ごろの程に、かたちは、今少しにほひ增りにける心ちして、華々と、あいぎやうはあたりにもこぼるゝやうにて、いとのどやかについ居て、女君にさし寄りて、「暫しと思ひ給へし山里に、見まほしきふみなどの侍りけるを、えみさゞ侍らざりつるほどを、おぼつかなしと尋ねさせ給ふやと、試み侍りつるに、すぎ侍るをりをりにも、かひなく思ひわびて、人わろくこそ立ちかへり侍りぬれ」と聞え給ふに、御いらへせむ方なくて、いとゞしくそばみて、顏をもて紛らはしていらへ給はざめれば、「さりや、いとゞおぼしのみこそ疎ませ給ひにけれ。珍らしくやなどおぼしなほるとこそ思ひ給

へしか」と云りめにかけて、いたくも恨みこしらへで、唯うちながめ出で給へるぞいみじく心やましき。女君の御袖ぐち裾のつまゝであてになまめかしくたをたをとして、御ぐしのひまなくかゝり、うちきの裾に流れゆきたるすゑつき、繪に書くともよのつねなりや。きはもなく美くしげなるさま、見ても飽かぬ心地ぞすべきを、さまよきほどに言ひなして、いたくもなれよらぬを、見立ち給へる親の御心ち、いといみじく恨めしう胸いたけれど、さし並び給へること人ならひたらましよ(かば)とぞ人わろく見なされ給ふや。女君うち臥してもなつかしう哀にうち語らひ契りつゝ、さるかたに淺からざりし御氣色のひきかへ、こよなくこまやかならずなりにたるもいとことわりに、我が身耻かしくつゝましう、又心のうちも隔てなくしもわらぬに、なかのうとくもといふやうにそむきそむきになりぬるを、さはいへどまことならぬ契を、淺くおぼしなるにこそはと、とわりにうらみ所なきに、我が身耻かしう思ひ知られて、鏡の影をうらみても、おほどかにあてにおはせむ女はたゞなつかしうわはれなるよその語らひしもこそわはれなるべけれと、我より深くおぼしなびかるゝかたのわらむよと思ふに、心うけれど、そのまゝに恨みいはむもわいなければ、さばれ、かくと世をかりそめに思ひなすにはうきもうからずとなむ。『吉野の山の嶺の雪、おぼつかなからぬほどに、ふみならし給ふ御恨さへ、解くる世なきほどながら、月日もはかなく過ぎて、女君の御うぶやの程にもなりにけり。恐ろしく危ふき事におぼしさわぎて、ひまなきみどきやう、ずほふ、大殿にもわやしながら、人め例ならず見せじと、そへ始められたる御いのりども、殿の内ひまなき

まで、こちたき云るしにや、かねてよりはればれしからずのみ惱み渡り給ひしを、いとたひらかにをかしげなる女にて生れ給ひぬるを、おぼしつるほいの如く、行く末かみなく思ひやらるゝさまにておはするを、いみじき事に、おとゞおぼしよろこび、御うぶやの儀式ありさま、限わる事にことを添へ、急ぎさわぎ給ふさま、ことわりにも過ぎたり。大殿よりも、御湯殿の事などまで、おぼしやりたるさまこちたきを、かひがひしう待ちとりはやし給ふに、すべてたがふ所なく、唯宮の宰相なるちごの御かたちなるに、されば よとうち見るに、胸はつぶれて、うとき人にだにわらで、昔よりへだつる事なく、かたへにまつはれたる人にしも、いかに怪しともをこがましとも思ふらむと、耻かしく心憂きに胸いたきまで思ひわまり、こもちの君、いみじかりつる事のなごり、綿などうちかつぎ、所せげにくゝみ臥せられて、寢給ひつるに、さし寄りて、「ものけ給はる」とわる聲に、うち驚きて見わげ給へれば、たゞなる時だに、いみじうはづかしげに、おぼろげの人見えにくきを、まいて思ふこゝろあり、うちはゝゑみて、「これはいかゞ御覽ずる。

この世には人のかたみのおもかげを我が身にそへて哀とや見む」とのたまへる耻かしげさに何事かは言はれ給はむ。顔をひき入れ給へるもことわりなりや。いでやさばれ、かくありはつべき身ならばこそは、世の人の目思はむ言の葉を、聞き入れられ奉るもわいなし、すべて、我が身のよづかぬをこたりのみこそ思ふにも言ふにもつきぬ心ちすれと、涙さへ落つるを、さばかりもてさわがるゝに、ゆゝしと見る人もこそと、煩はしければ、立ちのきぬる

名殘も、女の御心のうちぞいと苦しう消えぬばかりなれど、人はいかでか思ひ知らむ。ひとつに喜びて、殿うへ御湯殿、大將殿のうへむかへ湯などもてさわがるゝに、中納言の御ありさまはすさまじうと目とゞむる人もこそあれど、人からのあまり思ひすまし、さま惡しからずもてしづめたまへけるなめりとぞ見なしける。七日の夜、大將殿の御うぶやしあひにて、上達部殿上人殘りなく參りつどひたるに、宮の宰相のみぞいたはる事ありて參らぬに、いかにと人知れず思ひ惑はれしを、たひらかにねんじなしても、人のうへにうちきゝて、遙にいぶせきに、おぼしあまり、左衛門がつぼねにおはしけり。「かばかりのちぎりをおぼし知らぬにはあらじ。唯今宵いめばかり」と責め惑ひ給ふを、いとわりなき事と思へど、いと心苦しきに、のぼりて見れば人々は皆出で居たり。おとなしき人は、臺盤所の方にて、とかうことおきて、おほうへの祿どもなど見給ふ事どもありて、我が御方におはしなどして、こもちの御方、なかなか今宵ゆくてなどして、人ずくなにて臥し給へり。なかなかさもありぬべきまぎれかなと見て、おんとのあぶらなど、とかく紛はして入れてけり。女君、いと折わしとおぼしながら、あながちなりける契りのあはれにのがるべくもあらざりつるに、いと暗くあらぬほかげに、いとさゝやかに細うをかしげなる人の、色は隈なく白きに、白ききぬどもにうづもれて、かしらに菊のうへおぼえて綿ひき散されたり。こぢたく長き髮をひきゆひてうちやりたるなど、かくてこそまことにをかしう見まほしけれと思ふに、大かたはかをり滿ち、いみじうなつかしげなり。よろづをかきつくし。さばかり隈なく色めかしく色好みの深く哀と

心に哀められむと、つくし給ふ言の葉けしき、なにのいはきも靡きつべきに、女君も、心づよからずうち泣きて、いみじう哀げなるけしきに、いとゞ立ちわかるべき空もなし。とには、中納言拍子とりて、伊勢の海謠ふなる聲、優れておもしろう聞ゆるを、わやし、かばかりの人を、心にまかせて見つゝ、あどてうとかりけむ、さばかりのかたちのにほひやかに、たをやぎをかしきにはたがひて、いみじう物まめやかに、怪しきまでもてをさめて、いといたう物を思ひ亂れたるさまの常にあるは、いかばかりの事を思ひしめて、外にうつろふ心のなかるらむと、ゆかしき事ぞ限なきや。まだ事もはてぬに、中納言きぬどもを人に脫ぎかけて、いと寒かりければ、惑ひて衣着かふとて、紛れ入り給へるに、帳の内に、あきれ惑ひさわぐ氣色の怪しさに、さしのぞき給へれば、おきかへる人は、帳よりとに出でたるべし。いたくさわぎて、扇たゝうがみなどおとしたなり。女君、いみじとおぼし入りて、隱さむの御心もなきに、やをら寄りて、扇の枕上に落ちたるを、火のもとによりて見れば、赤き紙に竹に雪の降りたるなど書きたるが、塗骨に張りたるに、裏の方に心ばへある事ども、ならひすさびたる、その人のなりけり。さればよと思ふに、かく紛れむとてこぬにこそありけれと思ふにいみじう妬かるべき事のさまなれど、さしも覺えず。男はさこそあらめ、女はしも、いと深くはおはせぬ折と言ひながら、今始めたる事ならねばなかだちの人も知らぬやうもなかりつらむ、かうなどせうそこしけむものを、かゝる程のうちとけ入り給ひつらむは、おぼろけにおぼすにはあらぬなめり、かの人の志にまかせて、嬉しとは思ひながら、なま心おとりせぬやうはあらじ

かし、いと耻かしき人もかつはうち思ふらむかし、のどかに我なきひまひまも多かるものを、かばかりうちとけ給へる程のいみじう騒がしうのゝしりたる折しも、見る人もありつらむ人めこそ、我がため人のためいみじういとほしければ、いかにすべきよにかあらむ、さりとて、このわたりにかき絶えなむも人ぎゝいとかろがろし、さりとてかくのみかたみに人目もつゝむまじかめるに、知らず顔にて過ぐさむ事もいと心なき事と思ひ亂れて、あそびや何やかやとあれど、いたうもてはやさず。このうぶやのほど過ぎぬれば、例の吉野山に入りてぞよろづおぼゝ慰めける。そのほどのことゞもくだくだしければ、さのみ書きつゞけむやは。宮の宰相は、忍ぶる道の逢ふ事かたき戀ひ思ひに、なげき沈みつゝも、これは心をかはし、をりをり過ぐさぬゆきあひに心を慰みて、例のくせは、これは限なければ、ひとつことのみやは。あるべきにはあらず。中納言の漏り聞かむ所も、いとかたはらいたし。なほ宣耀殿のおいしのかみはしも、かぎりなくをかしうて、人に心おかるゝふるまひは、思ひのどめられなむかしと、猶思ひなされて、又立ちかへり、宰相の君といふ人を、なくなく語らひ盡して、いかなるまぎれにかありけむ、御物忌かたうて、梨壺にもまうのぼり給はぬ夜入りにけり。かんの君、あさましういみじとおぼすに、物も覺え給はず。さはいへど、つきづきしく心深くひきつゝみて、動きをだにし給ふべくもあらず。泣く泣く恨み侘びて、明けぬれば出でずなりぬ。珍らかに、かたみにわりなしとおぼせど、言ふ方なくて、かたき御物忌にことづけて、帳のかたびらおろしまはし、もやのみすも參り渡しなどして、去もなる人うへにもあげずな

どして、心しりの二人ばかりぞわりなく思ひ惑ふに、男は、名高くいはれ給ふ御かたちを、ゆかしくいみじと聞き思ふ御有樣なれば、見奉らむと思ふに、只今はよろづ忘れたり。そびえいとちひさきてあたりとそおはせねど、くせと見ゆべくもあらず。みぐしはいとをよりかけたるやうに、ゆるゝかにこちたうて、あながちにても見ゆる。御顔は唯中納言の今少しあてに、かをりすみたる氣色添ひて、心にくゝなまめきまされり。わぢきなく心を盡す中納言の女君は、あてにをかしげに、こまかになつかしう、らうたげなる事ぞ似る物なき。この御有樣は、にほひそめてたゞ目もあやなる光だ、こよなかりけるかしと見るに、こゝろぎもゝつきはてゝ恨みわぶるに、大かたはいみじうたをたをと、あてになまめかしう、あえかなる氣色ながら、更にたわみ靡くべうもあらず。心を惑はし涙をつくして、その日も暮れ、その夜も明けぬべきにおぼしわび、かんの君もいみはてぬれば、「殿も參り給ひ、中納言もおはしなむを、かくてのみいとわりなかるべきを、まことに深き御心ならば、志賀の浦をおぼいて出でいなば、いかに嬉しからむ」と言ひ出で給へる聲の、わりなくあいきやうづきたるほども、唯中納言なりけり。珍らしういみじきさへ聞き惑ひ、いとゞ出づべき心ちもせず。

「のちにとて何を賴みて契りてかかくては出でむ山の端の月。めづらかなるわざかな」ともいひやらず。

「志賀の浦とたのむることに慰みて後もあふみと思はましやは。我が君、よし見給へ」とぞうつくしうのたまふに、あやにくならむもわりなくて、たましひの限りとゞめ置きて、か

らのかぎりながら出でぬ。その後かき絶え御文のかへりごともなく、雲居にもて離れ給へるに、すかし出され奉りし事の、妬く悲しう悔しきに、又このごろはほれ惑ひて、物のひまもやと、うちにのみ侍へば、中納言の參り給ふを見るに、つゆも逆はぬ顔つきの、彼はわてになまめかしう心にくき氣色まさり、これははなばなと今めきて、こぼるばかりの愛敬ぞすゝみ給ふらむかしと見るに、胸つぶれて思はむ所も忍ばれず、ほろほろとこぼるゝを、中納言もいと怪しとおぼしたれば、「いはけなくよりへだてなく、みなれそなれて、みだり心ちのうちはへ苦しうのみなりまされば、ながらふまじきなめりと思ふにつけてみだれぜのされば、こゝろ弱くめゝしきやうに侍るぞや」とおしのごふ。「誰も千年の松ならねど、後れ先だつすゑの露もとの雫こそあはれあるべけれ」といひても、心のうちには、いかに我ををこがましとも見給ふらむとはしたなけれど、なつかしううち語らふ。かくのみ思ひ侘びてひとつ心にあはれを知るかたとても、かたみに心のみこそかよへ。わりなき人めの關を、あながちに憚らず、見聞きつけたらむもなのめならず、いとはしうはづかしかるべければ、かたみにいみじうつゝみ給ふほどに、あひ見る事はいめよりもげにいとはかなく難し。今ひとかたはた、すかし出されにし後は、今はいよいよもて離れつれなきに、まことに枕よりあとより戀のせめくる心ちして、左右の袖をぬらし侘びつゝ、かたがたのかたみと中納言のいと見まほしかりければ、すゞろなるやうなりとも、いかゞはせむと思ひておはしたれば、出でさせたまひぬとて、梨壺の方を見入れて、歩み進みてはひらまほしけれど、かひあければ、うち歎くをことにて、

「いづち出で給へるぞ」と問へば、「大殿におはする」と聞ゆれば、そあたざまにおはしたり。大方には忍びて、例の中納言の方なる西のたいに、忍びやかに入り給へれば、いと暑き日にて、うちとけときちらして居たりける。見つけて、「いとふびんにむらいにて侍るに」とて逃げいるに、「わが君たゞさて」といふに、聞かねば、女もなき所あれば、心安くてつゞきて入りたれば、「まことに見苦しう」とうち笑ひてゐ居ぬ。「みだり心地のあしきに、對面の久しくなるは、いみじう戀しく心細ければ、わざと尋ね參りつること」と恨むれば、「わりなしやなめげなるに」といふを、「おのれも苦しきにさて侍らむずるぞ」とてさうぞく解けば、「さらばよかなり」とて居たり。涼しき方に畫のおまし敷きて、うち休みて、團扇せさせて物語などするに、中納言の、紅のすゞしの袴に、白きすゞしの單衣着て、うちとけたるかたちのあつきに、いとゞ色はにほひまさりて、常よりもはなばなとめでたきをはじめ、手つき身なり、袴の腰ひきゆはれて、けざやかにすきたる腰つき、色の白さなど、雪をまろがしたらむやうに白うめでたくをかしげなるさまの、似る物なく美くしきを、あないみじ、かゝる女の又あらむ時、わがいかばかり心を盡し惑はむと見るに、いみじう物思はしうて、亂れよりて臥したるを、「暑きに」とうるさがれど聞かず。物語などして、暮れぬれば風涼しくうち吹き、秋來にける氣色殊に覺ゆるに、いとおこすべくもあらず。内侍の督の御方にも露の御せうそこ傳ふる人もなく、こゝらの年ごろの思ひ空しうなりなば、我が身のあとなくなりぬべきよしを言ひつゞけて恨むるさまの、いみじうあはれなるに、このわたりにもかくぞ言ひけむかし、げに

女にて、心よわく靡かではあるまじくもあるかな、さてもうしろめたのわざや、忍びても、さばかりひとつ心になびかしはてゞは、それを又なき事に思ひ歎きて、逢ひてもあはぬ戀のひとつにてもあらず、又かくそへて思ひいふよ、いかにひまなき心のうちならむと、苦しきにも、さまざまにあつかはるゝに、忍びがたくて、

「ひとつにもあらじなさてもくらぶるに逢ひての戀とあはぬ歎を」。うちほゝゑみたる氣色にて紛らはすけはひなど、すぐよかに、おし放ちて見るめでたさは、物にもあらざりけり。身に近くうち添ひて、すくよかならず、亂れたるなつかしさに、更に逢ひての戀も逢はぬ思ひも、慰みぬる心地して、思はしういみじきに見けるをやと思ふ、いとほしさも、さし置かれで、いとゞかき抱き寄せられて、

「くらぶるにいづれもみなぞ忘れぬる君にみなるゝほどのこゝろは」とも言ひやらず、うるさければ、「そもたのもしげあるなり。誰にも離れぬかたみとしも、おぼさるらむ」とておくるを更におこさず。「まことはあな物ぐるほし。殿の御まへにのたまふ事ありつれど、いみじう暑かりつればうち休みしに、急ぎ立ちて參らねば怪しとおぼすらむ。まづ參りて來む」とて起るを、いかに覺ゆるにか、あやにくにひき別るべき心地もせず。「わが君」とつと捕へてわりなう亂るゝを、「こはいかに、うつし心はおはせぬか」とあばめいへど、聞きも入れず。さはいへど、をゝしくもてなし、すくよかなる見るめこそをとこなれ、取りこめられてはせんかたなく心よわきに、こはいかに云つることぞと人わろく涙さへ落つるに、さても珍らか

に、あさましくとは思ひながら、哀に悲しき事、かたがたの思ひ、ひとつにかき合せつる心ちして怪しなど思ひ咎められむも、事のよろしき時の事なりけり。殘る隈なく見盡しつと思ふに、かばかり心に云みて、覺ゆる事のなかりつるかなと覺ゆるぞ、心まどひの一つなるに、かきくらされて、あさましかりけるなども、思ひわかぬけしきなるを、中納言はいかに思ふらむと悲しう、世にながらへて遂に我が身のうさを人に見え知られぬるよと涙もとゞまらぬけしきの、美くしう哀なる事ぞ似るものなきや。「我もなくなく、今は片時離れてもえあるまじきをいかゞすべき」と言ひ侘ぶるに、夜も明けぬれど起き出づべき氣色もなし。今はいひはしたなめても、我が身のよづかぬ有樣を見知られぬれば、たけかるべきやうもなし、心を荒だてゝも、あさましき世語りに、さるべき人とうち言ひ出でゝもいかゞはせむ、吉野の宮ののたまひしやうに、これもこの世の事ならず、さるべき契にこそはありけめとおもひなすに、いともて離れがたければ、「あはれ、げに人目のいとれいなきやうなるを、同じ心にあひおぼゝして、人目見苦しからずもてなし給はゞなむまことに深き御心とは知るべき。世にうもれ、人々しうなどはおぼすべき身ならねば、いつもいつもさりげなくて、かばかりの對面はかたかるべきにもあらず」といとなつかしげに語らひ慰めて出すも、げにさることゝ思へど、唯片時立ち離るべき心地もせぬに、おき別れむ事の侘しうおぼゆれば、かへすがへす誓ひ契りてからうじて出でぬる名殘も夢の心ちして、なぞや世に消えやしなましと、この人に出でまじらふもはづかしうあさましうもあべいかなとおもへど、殿うへの云ばしも御らん

せぬをばいみじきものにおぼしたるとおもふにぞ、せめて引きとゞめらるゝこゝちする。れいのまづうち笑みて限なき御氣色にうちまぼり給ひて、「今宵はこゝに物せられつるか。宰相の中將の、文のこと問ふべきことありとてわざとまうできたりつれば」と聞えても胸うちつぶる。「右の大殿の、うちにいみじう思ひ歎かるなりや。猶人の恨なく、もてなされよ」とのたまふも、かたばらいたきに、「人の御恨あるべきもてなしありとも思ひ給へぬは」とこたへたるもことわりなり。御まへにて御臺などまゐりて、出で給ふほどに、宰相の文、

「いかにせむたゞいまの間のこひしさに玄ぬばかりにもまどはるゝかな。くれざらむに、あが君あが君」とぞある。うけひきかへりごとせざらむも、我が身いとあやしかるべければ、例のすぐすぐしううち書きて、

「人ごとに玄ぬる玄ぬると聞きつるも長きは君がいのちとぞ見る」と殊更に書きたる、筆のたちど書きざま目も及ばずぞ、今朝はいとゞ見なさるゝや。このくれのあふせを、いかにとも書かぬ、いなとやといと侘しければ、又立ちかへり、

「死ぬといひいくらいひても今さらにまだかばかりのものは思はず」。右の大殿におはしぬるにぞ、持ちて參れる。いとうるさけれど、心をやぶらじと思ふばかりに、

「まして思へ世にたぐひなき身のうさに歎きみだるゝほどの心を」。げにと待ちとりほろほろといとゞなかるゝ。すなはち右の大殿におはしたれば、中納言、いと人め怪しかるべきに、出でゝだに逢ひなばのがれやらむやうなしと思ふに、いとむつかしううるさければ、「ひ

るよりみだり心ち苦しうて、え對面賜はらぬ。かしこまりは殊更にまゐりてなむ」といとすくよかに言ひ出でたり。恨めしう悲しきに、人めもえつゝみあへず。「聞えさすべき事ありてなむ。猶此曹司口にさし出でさせ給へとの給へど、「宜しからむには、いかでかおはしまいたらむに、みづから聞えさせぬやうは侍らむ。亂りむねいとふかくに起りて侍る程なれば」と出でずなりぬるが悲しう侘しきに、わりなくうち忍びて、哀ある人も諸共あらむかしと思ひやらるゝに、このわたりは、かたかたいと立ち離るべきかたなきふるさとなれど、人め怪しかりぬべければ立ちかへる心ちにも、あるにもあらず歎きあかしつ。中納言もおもなく交らひて、この人に見えむ事のまばゆきに、みだり心地にことづけて、とにも立ち出で給はねば、宰相の中將、日々に立ちかへり恨みわび、いかにいかにと問ひきつゝも、かひなくてのみかへる心地、いと侘しかりけり。からうじて内へ參り給ふと聞きたまふに、心もさわぎて、ありてうち見給ふ心ちは、年ごろもかくこひつくせど、ゆきあはざらむ人を見つけたらむ心地して、心まどひのするなかに、中納言もうち見合せて、氣色異に顏赤みて、いみじうもてしづめて、物遠くすくよかにて、馴れ寄るべくもあらぬに、よそに見るこゝち、猶いみじう、心もとなくわびし。御前にめしありて參りたれば、例のけぢかく召し寄せて、れいのないしのかみの御事なりけり。うちまもり御覽ず、中納言のかたちの、いみじうにはひやかに、見まほしきを御覽じて、かんの君のいとよく似たりと聞く、げにこれが髪長くて、よくけさうしひたひ髪長やかにかゝりたらむは、天女の天降りたらむも、麗しうとゞとしかりぬべし。こ

れはげにぞあいぎやうづき、華やかなるさまは、並ぶ人あらじをなど覺しやるに、更に御らんせではあるまじく、わりなき御心地せさせ給ひけり。けぢかくならしては、宰相にこりにたれば、まめやかに畏まりて、いかにもよのつねの有樣を、思ひ離れたるさまを、すくよかに奏して侍ふが他く世なく御覽せまほしければ、むごにいださせ給はぬを、宰相は我がやうに御らんじつけたらむ時、例なきさまにても、御横目あらじかしと思ひよるに、いつも御らんじつけては、かくのみかたらひなづさはせ給ふと見しかど、日ごろは何とも思ひとゞめられざりしを、うしろめたく胸のみつぶれて玄づゞろなし。からうじて御せんを立ち出でたれば、待ちうけて、れいのやすみ所にする所につれて行くを、せめてもえひきも離れず、諸共に御とのゐなどやうにてとゞまりぬ。この君だちの候ひ給ふ時は、殿上人などもいと心殊に思ひて、殿居所につどひあつまるに、宵のほどは、物騒しうむつかしければ、こまやかなる物語のやうにて、いたく誰をも見入れずなりぬれば、とかくゆき別れぬるほどに、泣き恨み給ふさま、いみじうあはれなり。「人めもいと怪しかるべし。あが君や、まことにあひおぼさば、いとかくいちじるく、なもてなし給ひそ。見るめのかたく、ゆきあふせあるまじき事こそ、かやうにはおぼさめ。あけくれかくさしむかひ、御らんぜらるゝには、何の珍らしきふしにかさもおぼさるべき。唯よづかぬをこがましき身のありさまを、殊更にもてかろめたまふべきなめりとなむ思へば、いと徒心うき」と向ひびつくりてえんずれば、「かうの給ふ、いと心憂くわびしく、なかなかよのつねに、あふせ難からむことはとてもありや。かうて見奉ることそ、お

し放ちもて、すくよげ給へるを見ることそ、心まどひの何にも譬ふべき方なき」とてわりなき氣色なるも、哀ならぬにはあらねど、さりとて、かくのみ惑はし立てられてのみも、いと怪しう、よづかぬ身の有樣も顯はれぬべければ、猶人め見苦しからぬ程にをと契るも、いと堪へがたきことに思ひ惑ひたり。忍びわたりの事をほのめかし出で、「氣色は皆知り侍りにしかど、何とて我が身は例のやうならで、誰にもあやめ顔ならむと思ひ侍りしかば、唯ほれぼれしきやうにて過ぎ侍るを、さるべからむときどきはいとはしげなる氣色も慰めさせ給へ」と言ひ出でたるに、いみじういとはしければ、煩はしき思ひ交らねば、心安くへだてありては見えじと思へば、始よりありしさまを委しう語りて、それに心慰むまじきよしをいふ。いでなもあな心う、たぐひなげなりし氣色を、かくいふに、これこそはつきぐさのうつろひやすき心なめれと見るに、あはれと思はむ限は、うちほのめかしいふべきにもあらざめり、又思ひつろふ方あらむ時は、珍らかなる事のありしやと、言ひ出でむと思ふに、いとうしろめたう、かゝる人にしものがれぬ契のありけるよと思ふも、いと心憂し。かうのみしつゝうちにもいづくにも、身を去らぬ影の如く立ち添ひたれど、まことに思ふ心のゆくばかりのあふせは、いとかたうのみもてなしつゝ、大かたはいとなつかしううち語らひ、あひ見るほどは、怪しかりける身のえさらずのがれざりける契りを思ひ知り、いみじう靡きあがら立ち離れたちぬれば、さはいへど、心に任せつべきゆきあひを、更に心安くもあらず、わりなくありがたうもてなすも、いと侘しうなりまさるに、思ひ煩ひ忍ぶる人になど、時々は言ひすゝめて、我は

知らず顔にて、いとよう、さりぬべきひまをつくり出でゝわひ見する。げにいと珍らしう、哀にいみじき心ざし、これこそはよのつねの事と思へど、猶中納言に、なからすぎはわけてける心なれば、例の事に覺えなりにたり。心弱くせめてもて離れたる、さまざまの事のみまさりてわりなけれど、彼にさし離れたるほどの心なぐさめに、はたことびとを見るべき心ちもせず。これはその紛はしばかりのむつびにや、哀になつかしう、今は大かたの人めばかりをこそつゝめ、中納言の聞きやつけむの、恐しきかたは失せて、わりしよりもしげううちほのめきわたるに、女もこよなく亂れにたる心地していとよう靡き、わはれなるも、つらき人は、まづ胸潰れておぼえけり。中納言、この氣色は皆へだてなく、見聞き知り給へれば、あやしの事どもやと、をかしうもよづかずもうち歎かれつゝ、今はたまいて、女君に見聞き知る氣色ばかりも見せず。いつまでかはと思へばいとなつかしうちうち語らひて、例の月毎のおこる事のあるにより、めのとの家の六條わたりなるに、はひ隠れて物し給ふに、宰相は尋ね來にけるものから、まぢかき柴垣のもとに立ち隠れて見たれば、うち泣ぐれつゝ曇りくらしたる夕の空の氣色哀あること、籠垂巻き上げて、紅に薄色の唐綾重ねて、詠め出でたるゆふばえ、常よりも隈なくはなばなと見えて、つらづゑつきたるかひなつきなど、物をみがきたるやうにて涙をおしのごひて、

「玄ぐれするゆふべの空の氣色にも劣らずぬるゝ我がたもとかな。いくよしもあらじ我が身に」とひとりごちつゝながめたるはしも、絵に書くとも、筆及ぶべくもあらず。まして宰

相は、心まどひまさりて、ふと寄り來るまゝに、

「かきくらし涙玄ぐれにそぼちつゝたづねざりせばわひ見ましやは」。思ひかけぬに驚かるれど、をりはたあはれなれば、

「身ひとつに玄ぐるゝ空とながめつゝまつとはいはで袖ぞぬれぬる」。けしきをだに人に知られではひ隠れ、一人詠め給ひけるほどの、つらさをも言ひやらず、「からのみつらき御心ならば、更にえあるまじうなむ、思ひなりゆく」と言ひ盡しつゝ、いと心安き所なれば、うち重ねて臥し、よろづに泣きみ笑ひみ言ひつくす言の葉、まねびやらむ方なし。明くるも知らず、諸共に起き居つゝ見るに、近づくべくもあらず、わざやかにもてなし、すくよかなるこそをゝしかりけれ、亂れたちてうち靡きとけたるもてなしは、すべてたをたをとなつかしう哀げに、心苦しうらうたきさまぞ限なきや。例の人は心ならぬ歎きむすぼゝれながら、うちとけぬとても、猶よのつねなりけり。まことに我も人も、みならひたる人の、ひきかへ心苦しう匂ひやかにうち靡きたはぶれもするに、げに懐かしう安らかにとけたるもてなし、はた言はむ方なく、これを出し立てゝよそに見る時もあるはいみじきわざかなと、ひとぶるに籠めすゑて、我が物に見まほしきまゝに、「年頃は例の男の御ありさまと見るを、かくて見奉るはいみじきものゝ姫君よりもげになむ覺ゆるを、もとの御有樣もさこそはあめるを、今は忍びて女ざまにて籠り居給ひね。かくてのみは、心のまゝに見奉るべき故も、げになき事なれば、いみじうなむ侘しき。昔よりかゝる中となりぬればいみじうあるまじき事」といへど、「そのびん

なきに隨ふこそ例の事なれ。御ためにもいとあやしき御有樣なり」とひたぶるに我が物と見なして、おきふし語らふを、げにさる事にはあれど、かゝるさまにて、あるべくありつきにける身の、俄にさて入り居なむも怪しかるべければ、さらばともえ思ひならぬを、恨み泣きつゝ臥し起き、いと思ふさまに胸あきて、れい籠り居給へる程よりも、多く過ぎ行くに、右の大殿又いかにおぼし歎くらむとおぼしやるもいと苦しければ、御文聞え給ふ。「例の心ちの常よりもをこたり侍らねば、かうてのみ籠りはべるに、つひにいかになりはつべき身にかと、心ぼそきにそへても、

ありながらあるかひもなき身なれども別れはてなむほどぞ悲しき」とあるを、こゝには「いかならむ御心地もうち任せ給はむこそよのつねならめ。時々さし離れたる御はなれゐの、心得ずなむ、いかなるべき御なからひにか」とおとゞなげき人々うちさゝめき思へる氣色見え、心ひとつには、身のをこたりを思ひ去れば、ことわりに身のみつらう耻かしきに、かうのみ心をやりて、殿のの給ふもいとほしう、忍ぶる人もいとありしやうにはいられずなりにたるを、かきつゞけながめ給ふほどに、この御文を、殿もさすがにゆかしう覺して、まづひきあけて見給ひて、ゆゝしきことをものたまふかなと、つらさも忘れうち歎かれて、「などかくのみ心えずあつしう物し給ふらむ。人がら末の世には、いとあまりすぐれて、せうそくには過ぎ給へるぞゆゝしきや。御手などこそ、いとかうは人の書き出でぬわざを」とうち返し見給ひつゝ、御かへりあはれと見給ふばかりと、そゝのかし給ふに、いとゞこゝちも、おくし

ぬべき心ちし給ふや。

「憂き事にかばかりいとふ我が身だに消えもやらでぞ今日まではふる」。いとをかしげに書き給へるを、ゆかしげなき事なれば宰相に見せでもあらばやと思ひてひろげさせぬを、さなめりと見ながら、あながちにばひとりて見るに、ふとむねつぶれて、さこそいへ、見るに顏の色うちかはり、まめだつけしきの猶いみじう物深げなるを見るに、かゝる人を賴みて我が身をもてかへて入り居なむよなど、たのもしげなく覺ゆるに、宰相は、千代の命延びぬる心ちして、かたはなるまで、起き臥し遊び戯ぶれて、この世ならぬまで契り語らひて、あまり日數の多く過ぐれば、出で給ひなむとするを、「またいかにもて離れ、殊の外なる御けしきならむ」と言ひかへして恨むれど、さてのみあるべきならねば、こしらへ出して、我も所々に出でぬ。かくのみする程に、十月ばかりより、おとなしの里に居籠ることゝなりて、心地れいならず。かゝらむと思ひよらず、唯いかならむと心細く起き臥しつゝ、これはかくれ所もとむべき心地ならねば、右の大殿におはすれば、女君、いとあてはかにらうたげなるさまして、かう物し給ふほどは、よろづ思ひけちて、あたりも離れず、あつかひ歎き給へるは、見るにいと哀なればなからむ後のしのび所に、おぼし出づばかりとおもへば、心とゞめて哀にうち語らひ給ふ氣色を、父おとゞは嬉しう心ゆきて、御いのりや何やと立ちさわぎて、思ひあつかひ聞え給ふ。女君も又たゞならずなりたまひにけり。あまりうちしきりかたはらいたき事と覺せば、人にけしきも知らせ給はず、いづかたにも人しれぬ。宰相は、かうれいならで籠り物し給

へば、おほよそばかりの慰めだに、人め繁からむを思へば、文をだに、思ふ心ゆくばかりは書きやらず、わりなく思ひ歎くほどに、しはすばかりにもなりぬ。ふし去づみ、おどろおどろしからぬ御心ちなれば、大殿ばかりには絶えず參り通ひ給へど、物も更にまゐらず、いたくおもやせて、つゆ橘柑子やうの物も見いれず、つきかへしなどし給ふを、殿もおぼし惑ひて、御いのりひまなくおぼしさわぎ給ひたるに、中納言の御心の中に、さる人こそかくはあれ、この女君なども、かくこそは物し給ふめりしかとおぼし合するに、言はむ方なく心憂く、まことに今ぞあとはかなくもゆき隠れぬべきこゝちする、心ひとつには思ひやるかたなし、さりとてわれこそかゝれと人に言ひ合すべき事にもあらず、親などにしもまちおぼさむ事、いといみじう耻しきをはいかゞせむ、猶かの人にや知らせて、同じ心に思ふべき、逢ひ見ぬ戀のかさなるまゝに恨み侘び、忍びかねても、人目をつゝむべくもあらぬもいとわびしう、又あやしかりける我が身の契を思ひ去るにも、この人はさし放ちがたうあはれなれば、六條わたりにゆきわひて、まち聞かむ所も耻かしけれど、をのこの姿となり給ひにければ、さはいへどおもなく、「かういみじき事を歎き重ねるに、月頃になればいとちぎりもうらめしう、疎ましきまでなむ」と言ひ出でたるを、宰相もげに珍らかにあさましと聞くに、いと淺からざりける契を、なくなく言ひ知らせて「かゝる事さへ出できぬとならば、猶はじめも聞えしやうに、むすぶの神の契をたがへぬさまにおぼしなりね。かくてのみは、誰が爲もいと堪へがたくなむ。たれもたれも何となく若きほどなるこそ、うちわたりなどにて、常に同じ所にある

もつきづきしけれ、おのおのおとなかんだちめなどになりぬれば、殊なる事なくては、えうちわたりなどにて御とのゐもなし。里にてもかたみにゆきあふ事、人目をおぼせは、おぼろけならぬ限はなく、見まほしさもあまりわりなきを、かゝる序に、身をなきになしつとおぼして、聞ゆるさまに隨ひ給ひね。かゝる御さまにては、いかでかあるべきことぞ。唯おぼせかし」と言ひ知らするも、いと耻かしうさることなれば、今はかゝる方にても、あるべきものに覺し慰みたるに、あらはれて今は籠り居ぬと人に知らるべきならねば、殿のうへにも知られ奉らで、閉ぢ籠りおぼし歎かせむも、いとほしうおぼゆ。よづかずなりにける身を、思ひ知りしより、世にはあらであらばやと、思ふこゝろは深くなりながら、殿うへのおぼさむ所に憚りて、今まで世にながらへて、怪しき有樣を、人に御らんぜられぬる事、我が身のはてもなく去なしつる、心憂くいみじき事とてはなばなとあいぎやうづき、美くしげなるかたちの露のまよひわりて、物思ふべくもあらぬに、いみじうおぼゝれて、袖を顔におしあてゝ泣きいり給へるが、例なき有樣を思ひとくには、をかしうあさましけれど、見るには、七八尺の髪ひき垂れて、その道はことわりうけたらむ女もなかなか何にかはせむ。さまかはりて、をかしうあはれなる人がらなるに、宰相はいとゞことわりなれど、「すべてこはさるべきにこそは。かうあおぼし入りそ」と泣く泣くこしらへて、今日明日にても、このさまをかへて、籠り居給ふべきよしをいふ。げにかうながらはあるべき事にもあらねば、さこそはあるべきなめれと思ひなるには、交らひ馴れにたる世の思ひいで多し。哀なることのみ、はるけやるべき方なきをも

と丶して、さばかりいみじう涙を流し、言の葉を盡し給ふは、こはげにさ思ふにこそと思ふ。宰相はうちあかれぬれば、いみじき文かきをしつ丶、うつ墨繩にはあらず、ともすればこの女君に、我にけしき見するたび、見せぬたびさしまじりつ丶、うらなくだにあらず、忍びまぎる丶氣色を見るに、このほども又たゞならずなりにたるを、かうのみあまたになりにたる契のほどを淺からず知らる丶なるべしと見るに、たぐひなくひとすぢならむ志に今だに、かばかりの我が身のおぼえつかさくらゐを捨て丶、深き山に跡絶えなむは、後の世の思ひやりたのもしきに、この世はかへつる事にても、そは悔しかるべきやうなし、人からのをかしうなまめきたる事こそ人にことなれ、かばかりの人に身をまかせて、入り居なむ我が身のちぎりはいと飽かぬことなるべきを、まいて人の心きはめてたのもしげなく、あまりあだめきすぎて、このましう色めき、只今だに志劣らぬさまに見えず、ひき忍ぶる心いとふかし、まして今はこれはかうぞかしと、おだしう、常の如く目馴れて、つらき心も見えむ時は、いかばかりかは物の悔しう、人笑はれなるべきと思ひつゞくるに、宰相の語らひにつかむ事は、猶いとものし、かうてのみ又世に出で交らひ過ぐすべきならねば、いかにもいかにも我が身は世にもなうなりなむとするぞかしと思ひなるに、親たちを見奉るにも悲しう、うちに參りまかづるも物あはれに、常の事と思ふ時こそあれ、今ひと月ふた月世にはあるべきと思へば、吹く風につけても、もの悲しう心ぼそき事限なし。宰相はかくことざまに思ひつゞくる心のうちをば知らず。今は我が物にこそ籠めすゑ見るべきと思ふに、いとわりなく惑はれし心は少しゆ

るび、右の大殿の君の、又もれいならぬさまを、心苦しげに歎きて、れいのわりなきほどに、身のありさまをも、世のうれへをも、ことつゞけてもえ言ひ遣らず、唯うちなげきつ丶、

「さまざまに契をらる丶身のうさにいとゞつらさを結びかためそ。冬の夜ふかく寢ばさびし」など言ひ紛はしたる有樣の、あてにあえかに、いみじうなまめきたるあはれを、さしあたりて見る時は、もとより志ゑみにしかたは、いとたぐひなくあはれにて、中納言だに籠り居給ひなば、この人をも何事にかはつ丶まむ、さてこそは見めと思ふかねごとも、胸つぶれて、嬉しういみじきに、左みぎの袖ぬる丶心地して、つらしとまで思ひよられける我が身も恨めしかりければ、わりなうかまへつ丶ゆきあふべかめるを、中納言は、さればよ、たゞかうぞかし、さばかり愛へかけつとならば、ひとへにいかなるべきことぞなど思ひ歎きてもあらず、さてしもあなたざまの深き心のあやにくに添ふべかめるよとおもふは、うらめしうもあれど、そのまゝにうらみ言はむも、ひとわろくよづかぬこゝちするに、おもひ去のびつ丶、さらぬがほに、いみじくものかなしきまゝに、こゝちもなほるともおぼえず。』しはすつごもりがた、殿にまゐりたまへれば、おほかたはさわがしけれど、夜のまのへだてもおぼつかなく、おぼしめしたる御心なれば、いつしかと、待ち喜びまもり聞え給ふに、あまり盛にはひ給へりしかたちの、いたうおもやせてうち去めりて侍ひ給ふを、胸つぶれて、「などいたくそんじ給へる。猶心地あしきにや」のたまふ。「わざと苦しと思ふ所も侍らねどもれいならで久しう侍りし名殘にや」と聞え給へば、「いと恐しき事、いのりをこそまたまた始むべかりけれ」

とて、さるべき人々召して、御修法、祭、秡、など、すべき事の給ふを見聞くに、あはれかくおぼしたるに、あとはかなく消えうせぬば、いかばかりの御おもひならむと見奉るに、えねんせず、ほろほろと涙のこぼれぬるを、もてまぎらはせど、怪しう思はずなるさまどもを、身のやくと思ひしに、命もつくる心ちしき。今はつかさくらゐ極め、出で交らひ給ふきはになりては、おほやけわたくし、人に譽められめんぼくあり、はかばかしからぬ身の、おもてを起し給へば、その歎きをも慰みて、さるべきにこそありけめと、憂をやすむるきはに、かうのみ例ならず、心地わしげなるよりも、物思ひ歎かれたる氣色の見ゆれば、「いとこそ侘しう生けるかひなけれ」とてうち泣き給ふに、いと堪へがたう悲しくて「何事をかは思ひ給へむ。みだり心ちの例ならず侍るを、かくおぼし騒がせ給ふにつけても、命さへ思ふにかなはず、御覽じはてられずやなりなむと、思ひ給ふるばかりになむ」と聞え慰めて、ねんじて、御まへにて物まゐりなどすれば、いと嬉しとおぼし慰めて、諸共に聞しめす。母うへは、なかなかいと荒々しくて、いかなる事をも見咎め給はず。年さへかへりぬれば、ひつじのあゆみの心地して、いつまであるべき身ぞとおぼせば、むつきには、御車、したすだれ、しぢなどまで新しう清らに、隨身などまで色を整へ、さうぞくどもを賜はせたり。御みづからはた更なり、うへの御ぞ、下襲のうちめまで、氷解けたる池の面のごと輝きたるに、もてなしも用意も、いとゞ心を添へて、まづ殿に參り給ひて、殿うへ拜し奉り給ふ。御かたちの光るばかり見ゆる事、今年は常よりも、いといみじと見奉り給ひて、事忌もえ去あへ給はず、うちに參り給へるに、見奉る

人ごとに目を驚かしたり。宰相の中將も、人より殊なるさまして、參りあひて見るに、かばかりに変らひそめ、世のおぼえありさま、かくもてなされたるに、身をかへにくからむやと、胸つぶれて、目をつけて見れどいと大方にもてすくよけえゆきあはず。ないしのかみの御方に參り給へるに、殿上人上達部あまた侍へば、出で居もてはやすも、今はかやうのまじらひ、はしたなく苦しけれど、いかゞせむ。宰相に、琵琶そゝのかして、梅が枝うたひたる聲も、いみじうめでたし。宰相は、この人にうつろひては、慰みにし心なれど、猶わさましう、心強くてやみ給ひにしと思ひ出づるに、胸心しづかならでまかでぬ。中納言はせちゑごとに參り、いとまめによろづを勤め給ひつゝ、ぢんのさだめなどに、年老いやんごとなき上達部などよりも、唯この人の言ひ出で給ふを、畏きことにおぼし、世にありがたきおぼえ、世のきはあり。その年のやよひ朔日ごろ、花盛常よりもことなる年なるに、南殿の櫻の花、御覽じはやさせ給ふ。世にありとある道々の博士ども召して、いみじかるべきだいの事と心をつくす。その日になりて、題賜はりて文ども作る。中納言作り出で給へる、すぐれて名を得たる博士といへど、作り及ぶなかりけり。この世には更にもいはず、もろこしにもかゝるたぐひなかりけりと、うへを始め奉り、ずんじのゝしりて、御前に召して、さるべき人々をさしわけ、おんぞ脱ぎてかづけさせ給ふ。おりて、けしきばかり舞踏し給ふかたち、用意ありさま、いつよりもすぐれて、めでたく御覽ぜらる。花の匂ひもけおさるゝやうなるを、見る人涙を落す。まして父おとゞは、あはれかゝりけるものを、我が思ひ歎きしよ、大方は誰かは去る人のありける、

かくてもげにいとようわりぬべき事にこそありけれと見給ふに、御よろこびの涙、ましてこ
とわりなりや。右の大殿はた更にもいはず。ふた所の御心のうちの嬉しさ、劣り優らざりけ
り。暮れ行くまゝに、御遊はじまるに、中納言、又は吹きたつべきかはとおぼせば、をりをり
の御あそびに、玄ぶりかくしたる音を、心に入れて吹きたてたる、雲居を分け響きのぼり、そ
ぐろ寒くおもしろきこと言はむかたなし。さまざまけう盡したるざえありさまは、すべてこ
の世のものならず、あまりかゝるはえや、なからざらむとゆゝしきに、うへ、いといみじう御
心ゆきときわりて、さらでもこの人は、つかさくらゐども、玄かるべきやうもなきに、今日か
く萬すぐれたらむ玄るしあらむこそ、我が志の玄るしならめとおぼしめして、右大將の宣旨
くださせ給ふ。これもいと人にすぐれたると覺しめして、權中納言になさせ給ひつ。めいぼ
くわり、嬉しなどはよのつねなりや。大將の宣旨うけたまはりて、夜に入りて、父おとゞひき
つゞきて出で給ふ。近衛司の格して、待ち迎へ奉る。そぐろ寒くめでたきにつけて、あはれ我
が心ひとつこそ、人に違へる身と歎かしさの絶ゆる時なけれ、大方にはかくさらさらしうな
りのぼる身を、跡はかなくなりなむ事よなど、かゝるにつけても心ひとつはかきくらされ物
悲しきも知り給はず。大殿やがてひきつゞき、右の大殿に送り入れ給ふを、待ちうけ、殿のう
ちのゝしり喜びたるさまぞ、后に立ちて見給はましにもまさりて、うれしげなるや。權中納
言は、我が身のよろこびも人に優れておもたゞしきは、唯世の人のなりのぼるにつゞきたち
にしいとほし、さばかりと思へば、さしも喜ばれず、いみじかりけるかたちざえのほどかな、

かゝる身をもてうづもらさむ事も、我が身になりて思ふにかたしかしと、よもすがら思ひ明
して、御悅の事などかきて、
「むらさきの雲のころもの嬉しさにありしちぎりや思ひかへつる」。うちと、御悅や何や
とさわがしけれど、我が心ひとつにはなかなか心づくしに思ひ亂るゝをりなれば、心おくめ
るもをかしうあはれにて、「御よろこびをこそ、これよりまづと思ひ給ひつれ」とて、
「物をこそ思ひかさぬれぬぎかへていかなる身にかならむと思へば」とあるをおぼしけ
るまゝに、ことわりにあはれなるに、いろめかしさは、こゝろこびもおぼえずぞ、うちなかるゝ
や。よろこびや何やともてさわがるゝに、いとゞひまなくて、ゆきあふ事かたけれど月日を
數へつゝ我が物となるべきぞかしと思ふに、わりなき心を慰めすぐすに、大將は身の所せく
なりゆくまゝに、げに猶捨てがたき身といひながら、かくてあるべきならずと思ひ、いと心
細くて、うちなどにとのゐがちに侍ひ給ふに、權中納言も參り給ひて、例の休み所に行きあ
ひて語らふを、忍びやかに、人のかへりごとをぞかく。うちけしきばみて取らすめる。かくせ
ばへだてがはなり、隱さねばいとほしく思ひ煩ひたる氣色を、右の大殿の君のなめりと玄る
く見て、「いで、たがぞ見む」といふに、言はむ方なしと思へるをかしさに、戯ぶれて引きばひ
たれば、つゆもへだて顏にはと思へば、えもひきかくさず、えもいはぬ紫の紙に、墨うすくあ
るかなきかの書きざま、違ふべくもあらず。「目の前のうれしさをぞ思ふらむ」など言ひ遣り
たりけるかへしなるべし。

「うへに着るさ夜のころもの袖よりも人ぞれぬをばたゞにやは聞く」とぞ書きたる。見るに猶まばゆければ、「あまり薄墨にて、何とこそ見えね。誰がぞよ」と言ひ紛らはして、さしやりたれば、あまへて「何事かある」とぞ問ふ、「いさ、たどたどしくて、え見えず」とて止みぬ。心のうちにぞ、男も女も、頼もしげなきものは人の心かな、この女君、見るめ有様はこめかしうあてやかに物遠きながらかくこそは物し給ひけれ、うちうちの我が心こそ、いかゞはせむに思ひなさるれ、よその人ぎゝ事のありさま我がためいみじき事なりや、ましてよのつねならむなべての人の心いかならむと思ひやるに、いと憂けれど、今更に何かは、露も物しげなる氣色を見えむと思へば、女君には、かけてもけしきもらさず。この月ばかりこそ、かくてもあらめと思へば、殿に日々に參り、とのゐなど云つゝ、年ごろかくてはあれど、上達部殿上人などに、殊なる事なければ、目も見入れ、物言ひふるゝ事もなきを、あたらいみじうおはするに、人を人ともせず、物遠く上ずめき給へるなど、そればかりをぞなんに思ひ聞えたりつるを、この頃となりてあまねく人に目見入れつゝいと懐しうもてなし給ひて、さるべき女房などの、うち出でがたきものに思ひ聞えたるを、なさけなからぬほどに聞きとゞめなどし給ふぞ、いとゞ人の心づくしなるや。うちの御とのゐなるに、二十日あまりの月もなきほど、やみはあやなしと覺ゆるにはひにて、五せちのころ、なべてかたきのとありし人を思ひ出でゝ、殿上人など云づまりたるに、麗景殿のわたりを、いと忍びやかに立ちよりて、

「冬に見し月のゆくへを知らぬかなあなおぼつかな春の夜のやみ」と、するつかたおもし

ろく、うそぶきたるに、ふとさし寄り侍りて、

「見しまゝにゆくへも知らぬ月なれば恨みて山に入りやしにけむ」とうたふる、ありしけはひなり。物の心ぼそきに、わざとさし過ぎたりしもたゞならず、さしもやはと思ひつる同じ心なりけるもすぐしがたくて立ち寄り給ひぬとぞ。』四月にもなりぬれば、やうやう身も所せく、ふるまひにくきほどになり行くに、せめてさりげなくもてなし、忍びありくもいと苦しきに、權中納言は心安く、あひ見ぬ事のわりなきまゝに、いかに今までかくてのみは、人目もあやしく、見咎むる人もあらむ時は、いかにいみじからむと言ひ知らせつゝ、宇治のわたりに、宮の御りやう、いとおもしろきがありけるを、さるべきさまに用意して、必ず取り込むべきものに思ひて、心もとながりいひ恨むるを、この人に靡かむ事は、あるまじく思ひとりても、唯かろらかなる御身一つならば、吉野の宮にも身を隠しつべけれど、佛のわらはれ給へるやうなる御あたりに、ともかくもあらむ事、いとむしんにびんなかるべし。御むすめどもゝさばかり恥しげなめるに、怪しあさましと見え聞えむもいとはしかるべし。それより外はさはいへど、なきに心を心と立てゝ、この人をさへ隔て恨みて、云たしといひながら、めのとなどやうの人にも、かゝる有樣あつかはれむ事、恥しかるべしと、更に思ひ煩ひぬ。さはいかにせむと、後行く末までいと煩はしや、かゝるほどは、猶この人に隨ひて、世をも背き、かくすばかりと所せく、世づかぬありさまを、ことひとに見あつかはれむ、怪しかるべかりけりと思ひなはして、その日ばかりとちぎり定めて、まづ吉野の宮に參り給ふ。おはしそめ

にし後は、すべてよろづこまかに委しう、むろのとぼその所せきまで、姫君だちの御うへまで、いたらぬ事なくあつかひはぐゝみ聞え給ひて、かばかり遙けき道のほどをも、ふりはへつゝ參り通ひ給ふさま、いと心深きを、さばかり若く、はなやかにものし給へる人の、ありがたかりける心ざまとぞ、思ひ知り聞え給ふ事淺からず。待ち悅びて、今はたいとゞへだてなく、よろづうち語らひ聞え給ひても、大將も顯はしてはあらねど、よのつねよりも思ひやり、心細きよしを聞え給へば、みこうちなき給ひて、「さりともけしうはものし給はじ、唯暫しの御心の亂れ侍り」とていとまごゝろに、でしんなどまゐり給ふ。姫宮たちにも、例の御たいめんありて、あはれに心深き事どもを、なくなく聞え給ひて「かゝるかたちをかへても、必ずこれを、つひのすみかとうち頼み、參り侍らむとなむするを、そのほどおもほし忘るなよ。今三月ばかりなむ、え參り音づれ聞えさすまじく侍る。限に盡きぬる命ならば、これこそは限に侍らめ。もし思ひのほかにながらへ侍らば、必かゝるかたちならで、今少しうとからず、おぼされぬべきさまにて、參り侍りなむとす」と聞え給ふ。暫しは怪しく、にはかなるわざかなと、つゝましかりしかど、あさましきまで、哀に深き御心を、さらばこの人を、この世の知る人に、思ひ聞ゆべきにこそとおぼすに、かくひとのこりなく、心細げなる御けしきを、いかなるにかと、あはれに心細く覺えて、皆うち泣き給ひぬ。かくてあるほどだに、殿うへに見え奉り、見奉らむとおもへば、心のどかならず。かへり給ふほど、あはれにおぼしつゞけゝる。

「又も來てうき身かくさむよしの山峰の松風吹きな忘れそ」。おやしく例ならぬ御氣色か

なと、うちなかれつゝ、

「ほどなへそ吉野の山の松風はうき身あらしと思ひおこせて」。いかなる樣になりても、身にはたがへ聞ゆまじけれど、暫しも音づれ聞えざらむほどの事をおぼして、よろづこまかに、秋冬までの御用意をおぼし心しらひたり。宮も見奉りしわたりし事あれば、よくでしんまゐり給ひ、御樂奉り給ふ。日々に、明くるより暮るゝまで、殿うへの御まへに候ひ給ふを、いとうれしとおぼして、打ち笑みて見奉り給ふごとに、涙はひまなくこぼる。右大臣殿のわりなく恨み、限なきものにおぼし給ふもあやなく、いかにいみじとおぼさむと、いと心苦しくあはれにおぼえ、女君も、やうやういとふくらかなるほどになり給うて、いとらうたげに惱ましげなる御氣色も、思ふ心のつくからに、げにうきもうからず、人こそ人には、こよなくおぼしおとすべかめれ。何となく見馴れぬる年月の、哀ばかりを思ひまどふ。中納言に、更に思ひおとされぬ我が心は人に違へりかしと思ひ知られながら、今はまして、何の心置くけしきか見えむ。夏にあらためたる御衣つらひも、人よりことに涼しげなるに、藤がさねの御ぞに、青朽葉の織物の小袿着給へる、身もなく御ぞがちに、なよなよとあてになまめかしく、かをりうつくしげなり。姫君のものして作りたらむやうにて、やうやうおさへたちなどするが、美くしきも目のみとゞまりて、いかなるさまにても、命だにあらば、殿うへにも遂に御覽せられなむ、このわたりには、これこそかぎりなめれ、又は何しにかは立ちかへらむと思へば、さしも見入れざりし女房などまで、目のみぞとまる。「若し世になくもなりなば、哀とも

おぼしぬべくや」とさしよりて問ひ聞え給へば、はぢらひて、うち赤むいろあはひ、いとをかしげにはひて、

「おくるべき我が身のうさにあらばこそ人をあはれとかけて忍ばめ」とうち紛らはし給へる、こめきらうたげなれど、かの人去れぬをぞとありし、思ひ出づれば、こよなき心ぞやと、心やましとおぼしうんぜられぬべきに、何のあはれもさめぬべけれど、今日は唯ひたぶるにあはれなるも、をこがましの心やとおぼゆ。

「忍ばれむ我が身と思はゞいかばかり君をあはれと思ひおかまし。まことは、年ごろ世の人のやうに、ことよく語る心などの侍らぬば、唯心の中の淺からぬばかりを、同じ事に思ひなして過ぎ侍りつれど、こと心とは違ふ事にて侍りければ、人よりも薄きものに、こよなくおぼしなされにたる、恥しゝもいとはしくも、思ひ給ふるかたはかたとして、世の音ぎゝ、人目いとをこがましく、人わろき名の流れ侍らむも、すべてたどり去られず、物心ぼそく、世にありはつまじき心ち去侍る時ぞ、ひたぶるにあはれに思ひ聞えさするをも、さりともおのづから、心苦しう聞きにくゝ物いひのありしはやと、思し召されぬやうに侍りなむかし」とて袖を顔に押しあて給ふに、女君何事かいはれ給はむ、いとことわりにはづかしく悲しきに、身も流れ出でぬべき汗になりてものし給ふ。いと心苦しければ、かつは慰めつゝ、なかなか今日は殿へも參らじ、見奉らむに、いみじく心弱く、堪へがたかりけりと思へば、ないしのかみの御方にぞ參り給ふ。常よりもひきつくろひて、例ならずねざりよりて、「うちへ參りて、

さもさぶらひぬべくは、とのゐにもさぶらひ、さらずばまかでぬべし」ときこえて、「人々よく御まへに候へ、常ははればれしからぬ御氣色こそ、侘しけれ」とて出で給ふを、姫君のいと美くしげにて、手を捧げ慕ひ聞え給ふが、いと美くしければ、立ちかへりつゝ居て、あやしの我が身の有樣や、人目は親子の中と見ゆらむを、知らぬ人になりはてなむずとうちまぼるに、すゞろに涙ぐまれて、かき抱き出で給ふ。御かたちの常よりも、いみじくめでたく見え給ふ。十九にこそなり給ふかし。女君は、今三つかこのかみにぞなり給ふべき。指貫の裾までおいきやうこぼれおつるやうに見えて、ごぜんどもの參るほど、えんのつまに暫し立ちとまりて、うち見廻らして、「翠竹の邊の夕の鳥の聲」とゆるゝかにうちずんじ給ふ聲、あないみじとのみぞ聞ゆる。宣曜殿に入り給へれば、御まへに人多くも侍らはで、おまへの庭の瞿麥、つくろはせて御覽ずとて、三尺の御几帳ばかりを引き寄せておはします。のどかに御物語聞え給へば、いみじく耻しげなる人々も、御几帳のうしろにすべり隱れぬるに、「こぞの秋つかたより、みだり心ちの怪しく例ならず、物心ぼそく思う給へらるゝは、世の盡きはてぬるにやとあるにつけては、いみじく、世づかぬうきも思ひ給へ知りながら、ひとへに限と思ひ給へしほどは、殿うへのおぼしめさむ事をはじめとして、數多だになく、唯かく候ふぞかしと、思ひ給へるだに、數の少きと、心もとなく思ひ給へらるゝに、ましていかにおぼされむと、御心さへ、心ときめきしう侍るこそ」とのたまふまゝに、涙のうきぬるを、かんの君は、我もさおぼす事なるに、いとわりなかりし御物耻も、やうやうおとなび、人知れず世の中思ひ去ら

る〻まゝに、ことびとこそ猶つゝましけれと、あまたゞびなきたぐひぞかしとおぼすは、いと親しく哀なるに、我が覺す同じ心なる事を、言ひ出でゝうち泣き給ひぬるに、我が心ちもいとゞめでたくおぼされければ、「年月の過ぎ侍るまゝに、かやうにいぶせきありさまも、こはいかなりしありさまぞと、世づかずあさましく、などかゝるたぐひは又あらじを、今更にといひて、立ち出でむもあるべき事ならず。深からむ山などに、あとゝ絶えばやとのたまふやうにこそ、思ひ知らぬやうにて過ぎ侍りぬれ。さりともかくてのみやは、猶いと珍しう、思ひ知られゆき侍るぞや」とて、いみじう泣き給ふ。げにさぞおぼすらむかしと聞くも。藤の織物の御几帳、瞿麥の御衣、青朽葉の小袿たてまつりて、御几帳よりほのぼの見ゆる御ありさま、世になくめでたきを、あはれ我もとより、かやうにてあるべきものをと、今始めたる事ならねば、身を思ひかぎるにつけても、いみじくあさましくおぼゆ。かんの君は、大將のはなばなとにほひ、限なきかたちのいたくおも痩せたるしも、いとゞ美くしうらうたげなるに、おほやけしくもてすくよげたるほどこそ、雄々しくも見えけれ。かやうに思ひ去めりくんじ給へるは、なほなほと、哀になつかしく見ゆるを、世づかざりける身ともかな、我ぞかくてあるべきかしと、かたみに見かはし給ひて、盡きせず哀に、悲しき事ども聞えかはし給うて、いみじく泣き給ふも、あはれに立ちはなれぐるし。暮るゝまで侍ひて、「誰々か候ひたまふ。御まへに人ずくななめり。あまた參り給へ」などいひおきてまかで給ひぬ。少しゐざり出でゝ、怪しく例ならぬ氣色の去給ひたりつるかなと、胸つぶれて見奉りおくり給ふ。御供の人、御

前などに、「こよひは宣曜殿に候ふべきぞ。つとめて、車人々もまゐるべきぞ」とて皆かへし給ひてけり。中納言は、いつしか網代車にやつれ乘りて、北の陣におはしたりければ、忍び出づる心ち、夢のやうにおぼされながら、車に乘り給ひて、宇治へおはする道すがらも、こはいかに去つる我が身ぞと、かきくらさるゝに、月澄みのぼりて、道い程もをかしきに、木幡のほど、何のあやめも知るまじき山がつのあたりを、うちとけ、をさなくより手ならし給ひし横笛ばかりぞ、吹きわかれむ悲しさ、いづれの思ひにも劣らぬ心ちして、身にそへ給ひけるを物の心細さまゝに、吹きすまし給へる音、更にいふかぎりなし。中納言、扇うちならして「とよらのてら」と謠ひおはす。おはし着きたれば、いとおもしろき所にさる心ちして、うちの去つらひなど、いとをかしく去なしたり。女房なくてはあるべき事ならねば、中納言の御めのとご二人ばかり、さてはむげに物の行くへも知るまじき若き人わらはべなど、ねてわたし置きたりければ、いとありつきて待ち受けたり。車よりおるゝより、いかに去つる事ぞとあさましく、いななをとて、又返るべきにもあらず、かばかりに取りえては返すべきにもあらず、我ながら哀なる心ちして、その夜は明けぬ。つとめて、格子どもあけ渡したるに、うち見いでたるも、うつゝの事とは覺えぬを、中納言は、思ひかなひぬる心ちして、嬉しきまゝに、頭洗はせなどして、髮ゞ搔き乘れなどして見れば、尼のほどにふさふさとかゝりたり。眉ぬきかねつけなど、女びさせたれば、かくてはいとゞにほひまさりたりけるをやと見えて、いみじく美くしげなるを、かひありいと嬉しと思ひ惑ひたれど、我が心をいかに去つる身ぞとのみ

覺えて、世の中の事もいぶせく、ほれぼれとして、もの〳〵み悲しければ、起きもあがらぬを、中納言は悲しと思ひて、「これこそは世の常の事なれ。年ごろの御有樣は、うつしごと〳〵やおぼしつる。素よりひたおもてにさし出で〳〵、あまぬく人に見え交らはむの御このみに、殊更交らひ給ひしにこそありけれ。めでたくとも、我が身をあらぬにかへて過し給へる事あるべき事ならず。怪しくもかくておはせむこそ例の事なれ。殿にも聞かれ給はむ更にあしと世に思ひ聞え給はじ」と言ひ知らせあばむるに、げにとことわりに耻かし。我が身の例ざまならばこそあらめ、ありしながらならずとも命だにあらば誰にも對面する事もやと、思ひ慰めてあるに、髮のむげに見苦しければ、吉野の宮のとらせ給へりし藥の中に、夜に三寸髮必生ふとありしを、かゝらむものぞとおぼして、もち給へるして、日々に洗ひてこの藥をつくるに、人にも見せで、さばかりこのましう、なまめける身をおりたちて、中納言のあつかひ給ふにうちまかせて、我もほれぼれしく、忍びねがちにて、はかなく日ごろにもなりゆく。京には、つとめてでせん御車など參りたるに、「夜更けてまかでさせ給ひにき」といふに、所々尋ね奉るに、更に見えたまはず。れいも月ごとに五六日、必かくろへ給ふぞかしと思へど、御めのとの家にもおはせず。ささぎさも吉野の宮に、十餘日も籠り給ふ折もあるぞと、思ふほども過ぎ、御供にあるべき人も皆ありて、歸らせ給ひにしものをといふに、いはむ方なく悲し。大殿は、いみじく世を思ひ歎きたりしかども、猶あやしかりける身かななど思ふにこそあめれ。「さりとも、かばかりになりぬる身を、その事となくて、背くやうにあらじとこそ思ひつれ。

こゞの冬頃よりいといみじくあやしと見ゆるをりをりありしを、などて見もあやめざりけむ」と泣き惑ひ給ふなどはおろかなり。よろづの事すぐれて、世のひとつものにて、うちまゐりむかへ給へば、物も思ひ忘れ、老もそむくばかりのさまかたちにて、見るかひありし御さまなどをおぼしつゞくるに、すべて物おぼえ給はず、なき人にておはす。殿のうち騷ぎ惑ひたるさま更なり、よろしからむやは。なべての世にもたぐひなかりし、御さまかたちを思ひ出で聞ゆるに、いかになり給ひにけむ、そこになむさまをかへて、物し給ふなりといふ事だに聞えで日ごろになりぬる事を、あはれに悲しき事を言ひ思はぬ人なし。うち院などにもましていみじかりつる世の光の、失せぬる事をおぼしめし歎き、かつはいかでかさるやうのあらむと、山々寺々ずはふ讀經をはじめ、おはやけわたくし、天の下騷しきまで、世にかはらぬ御さまにて、たち給ふべき御いのりを、世に餘るまでの〳〵しる、去るし、さりともあるやうあらむと、頼もしながら、音なくて日ごろ過ぎ行くまゝに、世に優れ給へりし御さまを、ひと目も見聞き奉りし人は、戀ひ悲みつゝ、野山に交りて求め奉り、世の中に光さすべきかげの、雲にまがひなむばかりに暮れ惑ひたり。まいて右のおとゞの御心ちよろしからむやは。女君は、「かくおぼしてのたまひしにこそ」と出でたまひし日の事おぼしいづるに、消え入るやうにて伏し沈み給ふ。右のおとゞは、父おとゞの御心ちに劣らず、「かつはむげにあひおぼさゞりけるかな。いふかひなく幼き人もあり、又も心苦しき氣色を見ながら、かくやは」とてうらめしさを添へて泣きこがれ給ふに、世にはあやしく、あさましき事を言ひのゝしるあまり、

「權中納言の女君に通ひ給ひけるを、うしむげにいみじくおはせし人にて、うんじてかくれ給ひにける」と、世に言ひ出でゝ、「このうまれ給へる君も、その子になむあなる」と言ひのゝしるを、大殿にも聞き給ひてげにさもあらむ怪しと思ひて、いとかしこく心深かりし人にて、世づかぬ有樣を人に見え知られぬ、さていかでか変らはむと思ひて隱れたるなりけりと心え給ふに、悲しく、かゝる事ぞといはず、心一つに思ひあまり、身を失ひてけるよと、泣きこがれ給ふに、右のおとゞ、猶おぼつかなきに參り給へるを、近く入れ奉りし、たいめんし給へるに、いとしも深からぬ御志にやと、見奉りしも玄るく、かく覺しすてたる事を、我が心をやりて、打ち泣き給ふもいとつらく、物のせちにおぼさるゝには、心上ずもなきわざなりければ、うつし心もひきかへ給うてけるにや、世に人の申すさまとて、玄か玄かと、委しく聞え給うて、「はじめはいとやんごとなきものに、又なきものに思ひかしづき聞えたりしを、近き世となりては、怪しく世を思ひなげく折々侍りしを、今なむさはさやありけむと、思ひ給へあはする」とのたまひいでたるに、右のおとゞ涙もとまり、あさましくいみじとあきれ給ひて、參りつらむ事もおもて耻しければ、かへり給ひて、母北の方に、おとゞののたまひしさま、玄か玄かと語り聞えたまふに、あさましとはおろかなり。この君をのみ、限なきものに思ひ聞え給うて、こと御かたがたは、殊の外にのみ思ひおとし給へるを、ねたしいみじとのみ思ひつめける。御乳母のいと心のうちわはぬがかゝる事ほのけしき聞きつけて、かゝるにほひにおとゞの見給ひつばかりの所に、「大將殿は、權中納言の事にうんじて失せ給へるなり。この

生れ給へる姫君も、その人のなりける。我が御子と覺して、いみじく喜び給へりしほどに、生れ給へりし御さま違ふ所なくものし給ふに、見あやめ奉り給へりけるに、七日の夜、入り臥し給ひたりけるを、見つけ給へりし」など、つぶつぶと書きつけて落したりけるを、うへ見つけ給うて、殿にも見せ奉り給へるに、あさましと覺して、姫君を見奉り給ふに、違ふ所なく、それなりけるも僞りにはあらざりけりとおぼすに、言はむ方なく心憂し。ねたくなり。たちばらにおはするおとゞにて、この御むすめを長くかうじして見給はずなりぬ。「いと心うし、このうちにもな物し給ひそ。今におきては、まほりいさめむも無益なり。人の聞き耳、おとゞのおぼさむ所もあり。大將も、世々捨てゝも聞き給はむ事、いとはづかし。聞きつけて、憂しとこそ思ひけれとだに聞かれ奉らむ」とて、外に放ちわたして見聞え給はず。女君の心の中、いかばかりかはおぼされむ。いとゞ消え入りさえいりて、いみじうおぼし入りたるを、左衛門、思ひやるかたなくいみじと見奉りて、憂しとても、今は誰にかはと思ひて、心苦しき事をおぼし入りて、むげに限になり給へる氣色を、五六枚に、哀に悲しげに書きつゞけて、御使にこしさぶらひ尋ねとりて、「これたしかに奉れ」とて取らせたれば、うちにもて參りて奉る。』こゝにはかなくて、二十日にもあまりぬれば、いかゞはせむ、やうやうありつくにつけても、殿うへの覺すらむさまなど、いと悲しく思ひ續けられ、我が身もいめを見る心ちして、いとど心憂く苦しきを、かくいつまでやすらかに、うち臥したるばかりを、身のやすまりにておはするに、藥の玄るしにや、御ぐしも引き伸ぶるやうに、美くしげにこりかゝりて、眉なども

刈り拂はせて、日ごろになりゆく。いとありつき、女ざまになりはて丶、花々とうつくしう、匂ひやかなる見所、今少し勝りて、顔いといたく思ひ亂れ、くんじ玄めりて、ひとへに打ち賴みて、身に添ひたる程の、今は我が身、かくてあるべきぞかしと思ひ知り、なよなよともてなしたるは、ありし人とも覺えず、らうたげにたをやかなるを、すべて限なく思ふさまなるを、昔より寢ても覺めても、かやうならむ人を見ばやと願ひしに、佛神の、我が思ひ叶へ給ふなりけりと思ひ喜び、いかで悔しと思はせじ、ありし世を思ひ出でさせじと、よろづにもてなすに、いかに慰み行く。やうやうその人の、とありしかゝりし言ひしなどやうの事さへ、さし並びにし身あれば、思ひ出でらるゝ折々多かるを、みづからは人近くもてないて、たが事のこのましきぞと言ひはぢしめらるゝも聞きにくければ、さらぬ顔に忍びすぐす程に、この御文を見て、つゆ隔てあらじともて入りて見せ、我が爲も世の聞き耳も、殿の聞き給はむ所も、いとかたはらいたく、ふびんなることに侍るかしな、この人もげにいかなる心ちすらむ、我ゆゑいたづらになりぬる身ぞと、思ひ入るらむ人も、いとほしのことやといふも、げにとてもかくても、世づかぬ身のゆかり、我も人も、世の亂れあるべきを思へば、唯人一人の、あまりくまなき御をこたりと思ふぞうとましきまでおぼゆれば、さる方にても、動きなく過しつべかりし身をと、これにつけてもうち涙ぐむものから、うちかこちかけたるさまの、わりなくあいぎやうづき見まほしきに、片時も立ち離れむ事、いと玄づ心なけれど、かゝるも心苦しけれど、唯夜の程とて出で給ひぬ。いかにしやるべき我が身にかと、悲しきまゝに、しほし

ほとうち泣きくらさるゝに、暮れて月いとあかく水のおもても澄みわたるに、いと思ひ出づること盡きせず、胸よりあまる心ちぞする。

「思ひきや身を宇治川にすむ月のあるかなきかの影を見むとは」。中納言は、道のほども玄づ心なく、面影はかれずながらおはしつきて、かしこには、夜いたく更けて、いみじう忍びて立ち寄り給へるに、左衛門對面して、事のありさま泣くなく聞えて、唯あるかなきかに今は限のさまと聞え入り給ふやうなる、心ぼそさ悲しさは、誰にかはと思ひ給ふべくなむといふも、ことわりなれば、見奉らむとあるも、今は心こはくても、たけかるべきやうもなく、限なき御有樣をも見奉り給へかしと、あさはかなる心には、物のわりなくおぼゆる心にまかせて入れ奉る。ほのかなる火影に、いとゞ身もなく哀げなるさまにて、髮はいと長くうち添へて、腹はいとふくらかにて、うち臥し給へるを、この世ならざらむものゝふ奥のえびすといふらむものにてだにうち見む、あはれおろかなるべくもあらぬを、ましてさばかりの志には、うち見るより目もくれ惑ひ涙にくらされて、添ひ臥してかなひを捕へて「やゝ」と驚かせば、いとたゆげにうち見あげて、あないみじ、いとゞしき世に、こはいかに、又はと思ふもいみじければ、息も絶えつゝ涙流るゝけしき、いと悲しくことわりなるに、我も玄のびがたく、涙にくらされて、「あないみじ、さるべきなり、いとかうなおぼし入りそ。我は命だにあらば、親の御ゆるされもありなむ。たゞならぬさまにて、なくなる人は、罪もいと深く」と言ひ知らせて、御湯をさへすくひ入れ給へど、たゞさえに消え入るやうなるを、悲しういみじとはよ

のつねなり。「かばかりにては何かは」とておんとなぶら近くとりなさせて見奉り給ふに、ひき入る〻顔手つきあてにをかしげなることぞ限なきや。これをむなしくしなしたらむ悲しさ、思ふにいみじければ、我もおなじさまにそひ臥して、明けぬれば、別れ出で給ふべき心ちもせず、いと忍びて人召して、御いのりはじむべき事心の限のたまひなどして、添ひ物し給ふ。いかにと、つ〻ましながら、たのもしく覺ゆるもはかなし。うちにもありつかず、世を思ひ亂れ給ひつるもいかにいかにと去づ心なけれど、うち見るあはれをいどみすてむ事も、いと難ければ、御文ばかりを、たち返し書きつくして、五六日とこれにそひ居て、なくなくわつかひ給ふ。悲しくあるまじき事と、そらさへ恐ろしながら、いかがはせむに、いのちをかくるやうなるも、いとゞ見捨てがたく、哀に悲しきまゝに立ち離れず、心をかけていとひまなく、苦しげなる事限なし。世の中に、大將の失せ給ひぬる事を、おほやけわたくし歎き悲みて、「中納言の事によりて」とぞいひ罵れば、いと聞きにくゝもあり、大殿の聞きおぼすらむも、いと煩はしくてかたはらいたければ、世を憚かるやうにてありきもせず、さまざまいのりをせさせ、よろづにあつかひ、泣くなく言ひ置きて、又宇治に立ちかへり給へれば、いとゞ人少なにて、これもいとふくらかに所せう苦しげにて、萬を思ひつゞけ、かきくらし思ひ亂れて、詠め臥し給へるさまは、いかで、この日ごろ隔て過しつるぞと、あさましきまでおぼしつらむ、心の中も、いとことわりにいみじければ、又こゝにても、ぬらしそへつゝ言ひ慰さめ、かの人のありさまなど、へだてなくうちかたらはむも、いとあさからず、おぼつかなげに思ひ

やりげにて、しづ心なく、文書きかはしくして、更に我にも劣るまじげなるを、ほのかに並び立ちて、人目もいかに、我が身のやつれとなるらむと、思ひぬべかりし。女君の御事をだに何とも思ひとゞめざりし御心なれ、これを恨み言はむも我が身につきなかるべき心ちして、見知らぬ顔なれど、心の中には我を又なく思はむだにありし有樣にてはこよなしかし、ましてかくのみ心を分けられては、何にかはせむなどぞ思へど、いかにもいかにも、このほどまでは、この人を背き隔つべきにあらずと、さはいへど男にならひにし御心はうち思ひとりて、やすらかなる氣色を、いと思ふさま、めでたく喜ばしと思ふ事かぎりなし。大殿には、忍びありき給ひしにならひて、今日や今日やと待ち暮し給ふに、あらぬさまなるも、尋ね出づる事なくて、ふたつきばかりにも餘りぬるにぞ、世を背きても、そこら、さばかり尋ねもとむるに、見聞きつけぬやうあらじ、遙なる田舍などまでは、よにおはせじ。又國々の境まで、もとめぬ所なし、中納言こそ、さしも思ひよらざらめ、心善からぬつかひ人などは、我が君のかくて心安からず忍びかよひ給ふ女あひなしなどやすからず思ひて、ひたぶるにゆゝしきさまにや思ひなしてけむとおぼしよるにも、物おぼえ給はず、今は戀ひ泣き給ひし事さへ絶えて、ほれぼれと伏し沈み給うにたるを、殿のうち、又これを歎きあつかひ奉る。ないしのかみもまかで給ひてありしゆふべのたまひしさまなど思し出づるに、さはかく、身を限に思ひとゞめ給ひけるにこそありけれ、かくと知らましかば、その夜出さましや、我諸共にとこそいふべかりけれ、幼かりし程こそ疎々しかりしか、かく離れ出でゝは、出で入り下り上りにも立ち添

ひ、あつかひ給ひしこそ、我が身の光ある心ちして、頼もしく嬉しくおぼえしか、唯二人ありつるに、ゆくへなくなりぬるいみじさよ、男のさまにて世にまじらひしかと、思ひとくには、女のさまにて世に交らひ給ひしかど、いかなる世界に行きかくれ、いづれの山に跡を絶え給ふらむ、心あり物思ひ知り顔なりし君にて、女ながらかく思ひなりにたり、男の身となり、おきにし身の幼かりし程こそ、さ心ひく方に任せても過しゝか、今はかくて過ぐるに、いつかれ埋もれたるは、いとわさましく心憂きことなり。殿の御身もいたづらになり給ふべきなめり、我が御身は、限ある御身なれば、尋ね覓むべきにもあらず、人はたゞ、大かたの世のひゞきばかりこそあるめれ、まことに心に入れて、尋ねぬにこそあめれ、又いみじくとも、この世の外にはいづちかおはせむ、我かくてのみあらじ、男の姿になりて、この君を尋ね見むに、いかなるさまにても尋ね出でたらば、諸共にかへり來む、尋ね得ずなりなば、やがて我が身もかたちをかへて、深き山に跡を絶えなむ、殿の御身には、人々おのづから仕うまつりてむ、年頃女にていつかれつる身の、俄に差出でゝ、おきてわつかひ聞ゆべきやうなし、唯かくながら、立ち後れ奉りて、我が身の世にあるべきにもあらずと、夜晝涙に沈みて、我さへ唯消え失せなば、世の音ぎゝも物ぐるほし、殿におぼし言はむもいみじかるべければ、うへに、心細げに聞えなし給ひて、「この人の行くへ知り侍らぬ事あまた侍らねば、いとゞいみじく心細く、悲しきをばさるものにて、殿のむげに、いたづらにならせ給ひぬべきを、男の身にて、唯かくて見奉るなむ、いといみじくはべる。我もとの有様になりて、この人を心の及ばむかぎり、尋

ね奉らむとなむ思ひ侍る」と、れいならずいとあるべかしうのたまふに、母上、こはいかなることぞとわさましくなりて、「いなや、いかなる御心がはりぞ。あえかに、女のさまにてなりは て給へる御身に、いづくをいづくと尋ね給ふべきぞ」と唯泣きに泣き給へば、「そはさなむ侍る。山々國々尋ねもとむといへど、大方ひゞきのみして、いかにも志のなきにこそあらめ。さるべきにてはらからとなり侍りけめ。などてか心を入れてもとめむに尋ねいださぬやう侍らむ。且は我もとめぬよと思ひ侍らむ。求め侍らむに、更に世にいみじうとも、忍びはへし所々に、おひたちたる人ともなく、心ばへのあはれにねんごろなりしさまの、さるべき程にも過ぎたりし戀しさの堪へがたく侍る」とも言ひやらず泣のびがたげなるを、げにもうち泣きて、「いかなるべき事にか、とかくおぼしやるもげにさるべく、御心にこそあなれ」とのたまふを、いとうれしくおぼして、「我さへ失せたりと、世の人の聞き侍らむ、世づかず怪しく侍れば、女房などにも、四五人より外は見え侍らねば、ありなしのけぢめ知るもはべらじかし。唯あり顔にておはしませ。おとゞにも暫しな聞かせ奉りそ。問はせ給ふ折あらば、心ち例ならでとを申させ給へ。ゆめゆめ例ならぬ氣色人に見えさせ給ふな。殿はあるかなきかの御氣色にて、渡り御覽ずるやうもあらじ。我はたあなたのうへの物し給ふ人泣げければ、渡り見奉らぬものとなり。これはこのけぢめあやむる人も侍らじ」とて仕うまつる人のお前に參るには、かへすがへす口がため給ひて、狩衣指貫うへにきこえ給ひて、御めのとごの春宮の進にて、親しくおぼしめすを、御帳のうしろに召して入れて、長き御ぐしをおし切りて、例の

醫にとりなし給ふほど、母上御めのとなど、「こはいかなることぞ」とあさましくいみじけれど、もとの御ありさま、たゞこれぞあるべきことなれば、いかにもとも妨げ聞えず。この世の物ならぬ御さまなれば、おぼし得る所おろかならじと、おぼし慰めながらぞあさましき。この玄ゑは、年ごろ御聲をだに承る時なく、雲井にならびて、俄に召しよせられて、かくなり給ふを見る心ち、いと珍らかなり。烏帽子うち給ひて、狩衣指貫奉りたる、聊かうひうひしく、あたらしき事と見えず、あかつき、唯うせ給ひにし大將に、一つたがふ所なく、男女さまにておはせし折だに、顔は唯二つにうつしたりと見えしを、同じさまになり給ひて、まして唯その人のかへりたるやうにて、いとあさましきを、これを殿に疾く見せ奉らばや、ないしのかみにて、そゞろに過し給ふも、御かしづきのみこそめでたけれ、この御爲に、大將にて、これをあはせ奉らむに、いかばかり嬉しくめでたからむと、母上も御めのとも、なかなか嬉しかるべき事に、皆慰めぬべし。「ゆめゆめ、うちなげき例ならぬ氣色人に見え玄られ給ふな。唯ありさまにてを」と返す返す言ひ置きて出で給ふ。この君を尋ね出でずば、我が身も世にかへるべきにもあらずかしと思ふには、親たちの御事は更なる御事にて、春宮をあさゆふに見奉り馴れて、たゞならぬ御さまにやと見ゆるを、見捨て奉らむ悲しさは、更に言はむ方なく、引きとゞむる心ちし給ふに「おとゞのいみじく危うげになりまさり侍れば、參り侍らむ山とも、いつとなく思ひ給ふるがいぶせさ」など書きつくして、

「あはれとも君忍ばめやつねならずうき世の中にあらずなりなば」と聞え給へる、御返事

もいとあはれげにて、

「君だにもあらずなりなば世の中にとゞまるまじき我が身とをしれ」との給はせたるを

かぎりなく見て、これをやがて、たゝうがみにさし入れて、六月ばかりの夜深き月に、御めのと子のかぎり三人、供のものゝいふかひなく、何事もあやむまじき、いとたのもしきつはもの七八人ばかりして出で給ふ。いとあえかに、も屋よりとにだにさし出でずおはせしひとのいとかるがるしく、つきづきしくうちさうぞきて出で給ふを、見奉る限の人あさましく、とくいまれながら、のたまひおきにしまゝにおはします同じやうにもてなしたれば、知る人もなし。この男君、かく出で立ちて、いづことさして趣くべき方も覺えぬまゝに、この御めのと子、「大將殿は吉野山におはしますひじりの宮の御許にぞおはしまし通ひて、つひの住家とは契り聞え給ひければさやうにておはしますらむ」と申せば、げにもさもあるらむ、大方に人の尋ねのゝしるは、我はさなりといふべきならねばこそあめれと思ひて、さしてそなたへおはして、日ざかりにはいと暑くなりぬるに、宇治のわたり玄給ひて、そのわたりに、大きなる木のかげの川づら近きに立ちよりて涼み給ふに、川近くていとおもしろき所のあるを、見るも知らず、をかしくおぼして歩み入り給へど、あなたの方に經の聲ばかりして、殊に人も見えず、をかしき所かなとおぼして、小柴垣のもとに立ちよりたまへれば、すだれ卷きあげたるを、人こそありけれと驚かれて、やをら見れば、前に水くもでに流れて、繪に書きたるやうなるに、よきほどにすだれ卷きあげて、あざやかなる几帳のかたびらうち掛けて、十四五

ばかりなるわらはのいとさよげなる、二藍の單衣に紅の袴あざやかに踏みやりて、帶ゆるらかにうちして、うちはすめる。几帳にすきたる人も見入るれば、紅の織物の單衣に、おなじすゞしの袴なるべし。いとなやましげにて詠め出でゝ、伏したる色あひ、はなばなと光るやうにぼひて、ひたひ髪のこぼれかゝりたるなど、繪に書きたるやうにて、いといみじくあいきやようつき美くしきかたちの見まほしきが、りやうりやうしう、ものよりけに妬げなるまみ見しやうなる人かなと見るに、大將に覺えたりける。心惑ひして見れば、いといたううち詠めて、物思ひたるけしき、似るものなく見えて、顏のやう華やかさ、唯それと覺ゆるに、我が身を思へば女ざまに似給へると思ふに、ふと立ち寄りて、「いかにしてかくておはするぞ」と問はまほしけれど、さしても知りがたく、浮きたる事により、人に咎められぬべければ、念じて見るに人げやすらむすだれおろしつる口惜しさぞかぎりなき。忍びかね、もしさてもおはせば、我をも怪しと見知りや玄給ふらむと覺ゆるに、見えばやと思ひて、小柴垣のもとまで歩み出でたるを、うちにもあやしく、ひとげのすると思ひてすだれをうちおろして見出し給へるに、言ふ限なく、けうらになまめきたる男の、いみじくあてなるがさし出でたるに、いとあやしくおぼえなして、うちまぼらるれど、世に出でまじらひことごとしき人の見知らぬやうはなきに、更にありしにはあらず、なほなほ下れる際とは見えず、我がありし世の鏡の影にて、うち思ひ出づれば、内侍のかんの君限と覺し、ゆふべいみじくうち泣きて、まほにはあらず、うちそばみ給へりし御顏に覺えたるかなと、ふと思ひ出づれど、うつたへに、その御

有樣かはりぬらむと思ひよらず。世にかゝる人のありけるよと、目もあやに見やらるゝに、そのまへなるわらは、殿をこそ、世にたひぐなくめでたしと見奉れ、かゝる人のおはしけるよと、いとよく見知りて、驚きて、奥なる人呼びて見すれば、「あないみじ、こはこの世に失せて、のゝしり尋ね聞ゆる大將にこそおはすめれ。いでや、かゝておはしけるを知らぬならむ。殿の歎かせ給ふなるを、かくと人に告げばや」などいひあへるを、女君は、哀にもをかしくも聞き給うて、涙のおつれば、奥に引き入り給ひぬ。とばかり立ちやすらへど、「殿の人のおはしますやうに、氣色見ゆなどのたまはするものを」とて、音せねば、うはのそらに、たゞより て問ふべき事ならねば、かひなくうち歎かれて、「これは誰が住む所ぞ」と立ち出でゝ問はせ給へば「式部卿の宮の御領」と申す。ましてなほ頻はしかなりと聞きて、見つることのはゞかりをだにえほのめかさず、ことびとなるにても、必ず見まほしく、心にかゝる面影は、身にそひぬる心ちして、うちつけに、このわたりさへ過ぎがたければ、夕風吹き出でぬれば、過ぐる心ちいと口をしく、この面影心にかゝりて、世にもあらば、かやうなる人を見ばや、宮をかぎりなく思ひ聞えさすといへど、ことにもあらずと、これにさへ心とまりて思ひおはす。中納言は、忍ぶ方の心苦しさ、玄づ心なげにて又おはしにしかば、こゝには月の重なるまゝに、いとゞ起きもあがられず、つれづれとうち詠めつゝ、かくてのみあるべきなめり。とるかたなく、あぢきなくもあるべきかなと見るまゝに、人は我におとらず、深きかたに心を分けて、これに五六日、又かれにさばかりと籠り居給ふたえさを、さもならはず、待ちわたり思ひ過さむ

こそ、わいなく心づくしなるべけれ、さりとて、もとの有様にかへり改めなどせむ事は、あるべき事ならず、とものかくもたひらかにもしあらば、吉野にまゐりて、尼になりてあらむとおぼすを、慰めにし給へるを、中納言は知り給はず。今はおだしく、かくて見るべきものと、うちとけおぼして、かぎりかぎりと見ゆるありさまのいみじく心苦しきに、淺からず心を分けて、大方の世に憚りて、ありきも玄給はぬまゝに、なかなか心やすくこのふたところに通ひ見給ふ。年ごろ世と共に、心に物のかなはぬと、歎き侘びつる思ひのかなふとおぼして、うちうちは、心やすくも嬉しくも、又心いとまなく苦しくも覺えて、玄づ心なく立ちかへり給ひつるに、これもいと心苦しげにうち惱み給へるを、いかならむといづくにも心のみ盡くる心ちして、うち臥して語らひ給ふに、御まへなる人々、「いなや、このひるよに失せ給へるとの、しる大將殿こそ、これにおはしましつれ」といふに、怪し怪しと聞き給ひて、うちほゝゑみて、「さてさて」と問ひ給へば、「狩裝束にて、あの小柴垣のもとにこそ立ち給へりつれど、煩はしさに音も玄侍らざりつれば、立ち煩ひて歸へり給ひぬ」といふに珍らかなれば、女君に、「まことか、見やし給へる。誰をかくいふぞ」と聞え給へば、「まだ見ぬ心ちする人のありつるを、さいふめりつればもし我が身の身を離れけるにや」とぞはゝゑむものから涙のおちぬるを、猶わりしさまにて、あらまほしきとおぼす心の深きと、例のはぢしめうらみ給ひて、「さてもいかゞありつる」と問ひ聞えたまへば、「我によそへらるゝにて、推し量り給へかし。めやすきならむやは」といらへてやみぬ。彼の人は、吉野の宮に尋ねおはして、まづ人を入れ

て、「大將殿の御許より、參りたる人なむある」と言はせたれば、よゝやまに失せ給へるよし、騷ぎもとめらるゝに、彼の人の尋ねおはしたりし後には、いとゞあはれに覺束なく思ひ聞え給ふに、彼の御使に來たる人にやと喜びながら、「たなたに」と呼び入れ給へば、唯大將殿の同じさまに、清らなる人の違ふ所なき人りおはしたるに、驚き給ひて、「いかに」とのたまへば、大將「玄か玄か世に失せ給ひて、二月ばりにあまりぬる。この宮になむ時々參り通ひ給ひけり。つひの世のとまりと覺しめしの給ひしと告ぐる人の侍りしかば、もし申し置き給へる事や侍りけむとうけたまはらまほしくて、そのはらからに侍る人」とのたまへば、「一昨年の秋の頃より、この世ならず契り給ひて、立ち寄り問はせ給ふ事侍れど、このうづき朔日ごろに物し給ひしに、大かたの世を心細げにのたまひて、いつばかり、その折などはのたまひおかず侍りし。唯みなづき晦日ふみつき朔日の過ぎむ事の、いみじく難う覺ゆるを、それつれなくながらふる命、世にありなし。ふみつき晦日などのほどに、必ず吹く風につけても、音づれむとなむ契り給ひし事侍りしかば、つゝしみ給ふべき事、このごろにぞ物し給ふらめと、思ひやり聞えて、あさゆふのねんずのついでに、必思ひやり聞え侍れど、この世にはものし給ふらむを、げに只今の覺束なきこそ、いといみじく。いぶせくおぼすらめ」とのたまふに、たのもしくなりて、「はらからとてもあまた侍らず。唯二人侍るをだに、心細くあまたなきなげきを玄侍るにぞ、事も知られで失せ給ひにたれば、思ひ給へ遣る方なく侍るに、その中に、又年さだすぎ給ひにたる親の、いたづらになり給ひぬべきが、いといみじく侍るなり」とて、

泣き給へば、ひじりもいみじく去ほたれ給ひて、「はかばかしかるまじく侍、我が身のほだしとなりぬべきだに、恩愛の思ひといふもの佛だに猛きことに說き給へるに、ましてさばかりの御有樣を、いとことわりの御事にも侍るかな。さりとも、必ず尋ね逢ひ奉り給ひなむ。な思し入りそ」といとたのもしげに聞え給ひけり。いみじかりける人の御さうかなとうちかたふきて、これぞ我がむすめに緣ある人に物し給ふめりと見給ふに、かつかついと嬉しく頼もしくて、所につけたる御あるじなどをかしくしなし給ひて、いにしへよりの御物語など細やかに聞え給ふも、よろづ思ひ慰めつる心ちして、俄にさまを代へて、この君の有樣を、いつしか立ちかはり顏ならむも、いとうたてなり、かゝるさまになりて、ありしやうにうづもれたるべきにもあらず、音づれむとのたまひけむ程も、いくばくにもあらざなり、きやうに出でゝかくなむありしと傳はり聞かむも覺束なし、その程こゝにありて、この御せうそこを待たむとおぼして、「かうなむ思ふ」と聞え給へば、「いと嬉しき事に侍る。さらばおはして待ち聞え給へ。さのたまひしちぎり、世にたがへ給はじ」と聞え給へば、喜びながら、「我さへ失せぬとおぼし歎かむ御心、いと物騷しかりぬべければ、七月朔日に、必ず音づれむとありける所にまうで來て、うひうひしき有樣、少しならし侍るほどなむはべるべき。覺束なくなおぼしめしそ」と、聞えさせおきしまゝに、たゞあるさまにもてなさせ給ひて「北宮より御せうそこ侍らば、煩ふことなむとて、それに御返しは申させ給へ」など、うへの御もとゝ委しく聞えたまふ。いかにと胸つぶれ、心もそらにおぼしつるに、いとうれしけれど、世離れたる所にながゐ

去給ふも覺束なく、「世づかざりける御有樣どもかな」とうち泣き給ひて、「猶侍らむかぎりはさほを代へむとなおぼしそ。頼む方なきおのれをふり捨て給ひて、かへりて御罪にもならむ」などかきの御さぞやなにやと、萬の物ども奉りたまへり。御供に御めのと子一人、下部一人、かばかりにて居給ひて、女しくて渦ぐし給へるに、文をも習ひなど去給ふ。いとよき御學問の師なりと覺して、世づかぬ身の有樣など聞え給へば、「去か去か、大將のほのぼの憂へ給ひし聞き侍りき。聊なる事のたがひめに、暫しさる心のつき給ひしなり。大將も、もとひ御有樣になり給ひぬらむいとよし。こくものくらゐに極め給ふべきさうおはせし人なり」と聞え給ふ。宇治にて一目見し面影を、心にかけて、又見る世ありなむやとおぼすさへぞ苦しき。

「いもせ山思ひもかけぬ道に入りてさまざまものを思ふころかな」。帳の内よりさし出づる事もかたくてならひにし身の、行くへも知らぬ山にすゞろにてある、心ながらもいと怪しく、春宮におぼし隔たりにける夜な夜なのあはれなど、まどろまれぬなかにも宇治の川浪ふと立ちまじり、いみじくこひしく、又逢ひ見まほしくおぼしいでらる。

「ひとめ見し宇治の川瀨の河風にいづれのほどにながれわひなむ」とてうちなかれぬ。』

宇治には、いと苦しげにて月も立ちぬれば、中納言片時も立ち離れず。いかにせむとおぼし惑ふに、人がらの、かたちを始めいとにほひ多くおいぎやうづき、なかなかいと見まほしきに、もてなしありさま、はなばなしくならひ給ひにしかば、いとあえかにうづもれ、いぶせくもなく、わらゝかにをかしく、いと馴れたる心つきて、物を思ひ歎きても、ひとへに思ひ沈み

てはあらず。泣くべき折はうちなき、をかしく言ひ戯ふるゝ折はうち笑ひ、言はむ方なくにくからず、あいぎやうづき給へる人の、まことに物心細く苦しきまゝに、いとたゆげになよなよと、心苦しげなるを見給ふ中納言の御心ち、我が身に代へても、この人をいかでたひらかにとおぼし惑ふ去るしにや、ふみ月前日、思ふほどよりは、いたくほど經て、光るやうなる男君生れ給へるうれしさ、よのつねならむや。こもちの君も、手づからかきふせてあつかひ給ふさま、いとあはれなり。若君をば、目も放たず、うとからぬ人のちある迎へ寄せて、めのもとにも世に顯はれてかゝる人のあらましかば、いかにかひがひしくもてなされまし、よろづかく忍びたることと、かひなく口をしければ、この程はことなく、このあつかひに心入れて、あからさまにも立ち出でず。日に添へて、この若君の美くしく光出づるさまを、母君の御もとにさし寄せつゝ「あはれなりける契を、昔よりかゝる御さまにて、思ひなくあらましかば」と言ひ出で給ふにぞ、げにと、怪しかりける身かなと思ひ出づるに、かの所の七日の夜扇見つけたりしとなど、いとにはひやかにのたまひいでゝ、かたみにをかしくもあはれにもおぼす。この御有樣は、十よ日にも過ぎぬれば、今はかくにこそはあめれと、心おちゐはてゝし身を、いかに去つることぞと、思ひ亂れ給ひしかば、もとの御さまにやなりかへり給はむと、うしろめたく去づ心なかりしを、この若君を、いと悲しげに思して、常に抱きあつかひ給ふめれば、これを見捨てゝは、ふり離れじと思ふたのみさへ、いと強くなりて、今一かたのこの世ながら、身を代へたる心ちして、悲しくいみじき事を思ひ入り、それもこの頃にこそ

はといきときるべくもあらぬも、後めたく悲しく、身のいたづらになりにたるやうなるも、誰ゆゑにもあらず。「むげに聞き放ち侍らむ事の情なきやうなれば、いかになるまでも、あつかひとぶらはむ思ひ侍るを、暫しの程も覺束なく、去づ心なくのみ覺ゆるを、忍びて、こゝに迎へ侍らむいかゞあるべき。御覽じ放たれにし人を」とのたまふを、あさましと思へど、さらぬ顔にもてなして、「げにおぼすべき事にこそは。なかなか見しその人と見顯されたらむこそ、ことびとよりは恥しかるべけれ」と、顔のうち赤み給へるが華々と美くしげに見るかひありとうちゑまれて、「いさや、暫しの程も覺束なからじとてぞや」と言ひ紛らはし給ふ。こなたをば、今はおだしく覺して、忍ぶる方の心苦しさも、又心うつれるひとかたに隱れ居て、あつかひ給ふさまいと心やすげなり。父おとゞは、おどろおどろしげなるちかごとを立てゝ、そのまゝに見給はず。幼くより母北の方は、おとゞの御思ひのかぎりなきにおぼし讓りて、いとすぐれてはなき御思ひにはありけむ。「思はずに心づきなかりける御ありさまかな」とうちうめきて、身に代へてもそひ居給はず。はらからの君たちも、並びなかりつる御おぼえに、皆心おきて、かゝる世のさわぎも、殊にいとほしとも思ひ聞え給はぬさまなれば、げにぞあはれに悲しげなる御さまなりける。いかゞはせむに、中納言に忍びてうち任せられて、あつかはれ給へるも、いと哀げなる人の、いみじくくづほれたるあはれさ、更に思ひ忍ぶべくもあらず。晝なども忍びて、つと添ひ居て、よろづに言ひ慰め、契り語らひ給ふに、いかゞはせむに、心こはからず、言ひ慰めらるゝらうたさなど、見る折はたぐひなくのみ覺えて、こ

のごろは、こなたがちにのみ添ひ居て、よる夜中の事もあらむに、遠く立ち離れてはとみの有様え聞くまじきにより内へも久しくおはせず。御文は日に立ち返り立ち返り覺束なからねど、それが嬉しかるべきにもあらず。かくのみこそはあるべきなめれ、我が心一つにこそ、萬の事につけて歎き絶えせざりしか、大方の世につけては、かたはらなくなりにし身をあいなくもてしづめて、類ひなくだにあらず。かくのみまちどほに思ひ過ぐさむ事こそ、猶あるべき事にもあらね、右のおとゞ世人の言ひ騒ぐほど、猶暫しかうし給ふこそあらめ、世になう悲しく去給ふ御むすめにて、ひたぶるに、一かたに思ひゆるし給はゞ、あなたづよにこそあらめ、我いかなりとも、その人と知られあらはるべきやうなければ、かゝる宇治の橋守に、網代のひをのよるのみかぞへむ程の心づくしや、さりとてもとのまゝにかへりなるべきにもあらず、いかにして吉野の山に思ひ入りて、後の世をだに思はむと思ひなるには、この若君の捨てがたく、うき世のほだしつよき心ちし給ふ。七八日ありて、例のおはして、さすがにへだてなくある有様、たのもしげなき事など、愁へたるを聞くもなかなかなり。さし隔てゝ、異ざまにもいひなさば、さてもあるべきに、さはたえ隔てず、幾世見るべき人にもあらずとおぼせば、いとよくもてなし給へるさま、いかなる人か愚に思はむ。限なき思ひに思をそへ重ぬる心ちして、なのめならずあはれなれど、人のさまいとあだにて、人ごとに去みかへれるくせなれば、淺く思ひなさるべし。例のこゝにも、暫し立ちとまり給ふべしと思ふに、夕方きやうより人來て、「いみじく常よりも苦しげにせさせ給ふを、その御けしきにや」とさゝめき聞ゆれば、去づ心なくて胸潰るゝに、日頃ありありて、今日のうちに驚きかへらむも、いかゞおぼすべきと思ふも、いと恐しくわりなき心ちすれど、そはおのづからながらへ行かむ志は、見なほし給ふやうもありなむ、かれは今一度見で、空しくなさむ事は、猶飽かず悲しければ、かゝるよしを言ひ置きて、急き出で給ふも、げにさる事と心安くうち言ひながら、あさましく珍らかに思ひし心、我をこそ人に恨みられしかば、むづかしく、胸やすからぬおもひのあるべくもなかりしものを、かゝるさまは憂きものにもありけるかな、かゝればこそ、佛も罪深きものに思ひ置き給ひけれ、右のおとゞは常に恨みられ、かの女君も、うらめしげなる氣色の折々ありしむくいにや、我かゝるめを、同じ人に代へて見つらむなど、さしかた行くさきなつかしく、物もいふべき人もなければ、押しこめて思ふぞいと苦しかりける。つとめて「頼むべきやうもなきさまの、いみじくいとはしげなるを、近くてなりはてむさま、聞きはて侍らむとてなむ、心のどかならず立ち返り侍りにしかば、いと心より外に覺束なく、ちご君もかたがた」などあれど目もとまらず。いみじく思ひ入りても限あるわざなるを、いかなればいとはしくもと聞え給へるを、ほのかにならひにける人なれば、あながちなる物恨みのけしきなく、さわやかにもあるかなと見給ふもをこなりや。うちたえ、いかで吉野の山に、人奉りにしがなと思ふあまり、若君の御めのと、心ばへらうらうしくて口をしからぬ心ばへなるを、若君思はゞこれこそ我が方ざまの心淺からずいひたらむ、ことひとにうちまねびなどせざらめやと覺して、いとなつかしくうち語ひ給ひて、「見馴るゝ程はなけれど、若君を思は

ぢ、よも淺からじと、たのまるゝ心ちの深く覺ゆるを、聞えむこと人に知られでは聞きてむや」といとなつかしげにのたまふを、嬉しくめでたしと思ひて、「いかでか身を捨てゝよし侍ふ」とも聞こゆ。「これなる人々にも。まして殿には知らせ奉らじ。吉野の山の奥におはするひじりの宮に、御せうそこ聞ゆべき故ある、たばかりてむや」との給ふ。「いとたはやすく侍ふ事」と聞ゆれば、嬉しくて「月ごろの程かひらかにおはしますらむやいかにと、心細く思ひ給へられしを、今日までは事なくたひらかに侍り。御覽せられしさまにもわらずぞなりて侍る。いかで參りなむとぞ思う給ふる」と書きて、いとよう封じて「これさらば慥に」とて賜へり。この人の御本臺、誰といふ事知る人なかりければ、もしかの吉野の宮の御むすめ、持ち給へりと聞きしにやとぞ心うる。かくいふ程、はつき朔日ごろなり。我が身に親しく侍ひめくものゝあるを、たしかにたしかに敬て奉りつ。吉野には、この男君すゞろなるやうなれば、學問などして、思ふさまに、嬉しき人に行き逢ひ奉れると、思ひよろこびて、事に觸れて、姫君たちの御有樣、なべてならず奥ゆかしけれど、ひじりだちたらむ御あたりに、ふとけしきばみよらむも、いかゝと憚られて、かばかりになりぬれば、さりともとのどめつゝ、この音づれむと契りたまひけるほどの過ぐるまゝに、心もとなくうち侘びらるゝゆふべ、つきづきしきをのこの、「この御文參らせむ」とぞいふなる。「いづくよりぞ」と問ふなれば、「宮の御方に慥に參らせ給へ」といふなり。取りて御覽ずれば、大將の御文、いと珍しくてまらうどの君に見せ奉り給ふ。嬉しとはよの常なり。心惑ひして、あらぬさまにとあるに、法師などになり給

へるなめり、すゞろに承はるやうもあらじと、胸つぶれて、使を召し寄せて「いづくにおはしますぞ」と問はせ給へど、そことまうせどもなかりつるものをと思へば、申し出でぬを、いともいみじくきよらにて問はせ給ふに、いとかたじけなくなりて「宇治のわたりにおはしますとぞ承る」と「宇治はいづくのほどぞ」「式部卿の宮の御領とぞ承りし」とまうせば、されば よ、見し人はこれにやと思ひあはせられて、嬉しく悲しき事限なし。みづからも御文聞え給ふ。「六月その日思ひ立ちて、都を離れて、宇治の方に立ち宿りて侍りしより、この宮に尋ねまうで來て、御せうそこ聞えむとありしと、ひじりの宮のたまふを頼むことにて、そのまゝに、この山に跡を絶えてすぐす。さまいかなるさまにてかおはします。いかでか對面は給はるべき。參りぬべき所にや」など、こまごまと書きつゞけて、宮の御かへり添へて賜ふまゝに、この御使に御ぞ一襲、乘りておはしましゝ御馬と賜はせて、「これに乘りて疾く參りつきて、御かへりごと又たしかに賜はりてこ」とて、賜はすれば、あさましく覺えなく、嬉しき事と喜びて參りぬ。御返りまゐらするより「只今參れる御返り賜らむ」と申さすれば、御覽するに、宮の御かへりはうち見給ふ。今ひとつの御文御覽ずるにぞ、さはこの誰にかと思ひしは、ないしのかんの君の我を尋ねにと、さまをかへて、世を出で給ひけるにこそありけれ。はあはあ口惜く思ひ寄らざりけるよと珍しく悲しきに、えも見やり給はず。我もわらぬさまになり、かの君も殊更になりにけるも、さるべきにこそありけれと、泣く泣く御かへりこまかに書き給ひて「委しうはみづから聞えまほしきに、このわたりにおはして、このをのこして

御せうそこを賜はせよ」と聞え給へる。見給ふぞ、夢の心ちして嬉しき。おはすらむ有樣、見聞えてこそはともかくも、殿にも御せうそこ申さめとおぼして、いと忍びて、このをのこを玄るべにておはして、そのわたり近き人の家におはし居て、せうそこ聞え給へり。中納言は、かの御心ちのいみじきにも心惑ひて「そのめのとに、はらからにてものし給ふ人の、忍びておはしたるを、人にも知らせず、いみじく忍びて對面せむと思ふに、心さかしらなるやうに、殿の聞き給はむもいとわびし。人にけしき見せじとなむ思ふ」と語らひ給ふ。「いと易き事に侍ふなり。つぼねにきやうよりまうでくる人のやうにて、暗きまぎれにおはしまさせて、夜更けて對面せさせ給へ」など聞ゆれば「さらばさやうにも」とのたまふ。殿の御めのと子など、はたうちとけても見え給はねば、殿のおはせぬには、殊に御まへにもさぶらはねば、心安きたそがれのまぎれに、めのとのつぼねの廊の前あるに入れ奉りて、人の靜まるを待つほどに、夜いたく更けぬれば、皆人ねぬるに、やをらめのとをしるべにて、西のはあちいでにする奉りて、やをら出で給へるに、かたみに夢の心ちして、物も聞えやり給はず。月いと明きかげに、髪はつやつやとひまなくかゝりて、限りあく美くしげにて、いといみじく、女君なつかしくうちなきて居給へるも、いなや、こはただとおぼえ給ふ。えもいはず清らに、なまめきたる男にておはするも、うつゝともかたみにおぼえ給はず、ゆくへも知らず、聞きなし奉りて思ひしさま、出でゝ來しかたに、怪しく似奉りたる人のあるかなとうらめしきに、忍び難くて、もし御覽じ知るやうもやと、すゞろに立ち出でたりし事などこまかに語りて「さてもいかで

かくてはおはしますぞ」と問ひ給ふに、いらへ聞ゆべきやうもあく耻しけれど、えんに押しこめてあるべき事ならねば、「年ごろは、世づかぬ身の有樣を思ひ歎きあがら、さる方にいかゞはせむ、ありつきぬべきよと思ひ侍りしに、心より外に憂き事のいでき侍りにしかば、さてあるべきやうもあく、思ひ侘びて、身を隱し侍りにし」さまけしきばかりうちのたまへる、さなんありと心得はて、「今はさは、かくておはすべきにこそあなるを、かくのみ人知れぬ御さまにては、いかゞ過ぐさせ給はむ。殿にはいかゞ申し侍るべき」とのたまへば「その事にはべる、かくてのみなむ、更に侍るまじう覺ゆるを、世づかぬ身なりしほどのみ耻しさを、ことびとに見えわつかはるべきにはあらず。あさましと、見え知られにし人にこそはと、ひたぶるに身をまかせて侍りつれど、今はながらふべきやうにやと、生きとゞまり侍るには、かくてはあらじとおぼえ侍れど、さりとてありしさまに、身を又なしかへむ事はあるべきにもあらず。とてもかくても、身の世づかぬ置き所なく覺え侍るを、この吉野の山にかたちをかへて、跡を絶えなむと思ひ侍る」とうち泣きてのたまふ。「わが君かゝる事なのたまはせそ。殿うへのおはせむかぎり、我も人も世をなむ思ひ限るまじき。御事により、殿はむげにふかくになり給へりしを、見おき奉りてなむ出で侍りにし。げに何にかは、かくては忍びかくろひておはしますべき。又ことざまにては聞え出で給はむもあいなし。我なむたゞあるさまにもてなしておれと、言ひ置きて出で侍りにしかば、誰にも見え知らるゝ事も侍らざりし身にて、そのけぢめのありなし知る人も侍らざなり。さてこそやがておはしまさめ。さても中納

言物し給ふらむ、あしかるべき事にもあらず。今はじめたるやうにもてなして、なかなか人め安くこそ侍らめ」との給ふを、いらへはともかくものたまはず。「かしこの人にゆくへ知られであらばやと思ひ侍るあり」と聞え給へば「そはいとあしき事。人がらさておはしまさむに、げにいとやんごとなきことにはあらねど、口惜しかるべきには侍らず。いかにもさらば、まづ忍びて渡らせ給ひて、殿の聞えさせ給ふやう侍りなむ」と聞え給へば「殿にかくこそありけれとは聞しめされじ。唯世づかざりける身を、もてわづらひたりけるさまを」とうちはぢらひ給へるも、年ごろいとすくよなかりし人の御もてなしとも見えず、つきすべくもあらぬに、夜明けぬべければ、やをら出で給ひて、これより京ざまに趣きておはするも、今はかぎりと思ひたちしほどの、おはれに思ひ出でられ給ひて、おはしますをも知らせたまはず。殿は、月日ごろのへだゝるまゝに、多く御いのり、山々寺々盡して、限におぼし入りたるに、今宵のいめに、いと尊き清らなる僧の参りて、「かくな覺し歎きそ。この御事どもは、いとたひらかに明けむあしたに、その案内聞き給ひてむ。昔の世より、さるべきたがひめのありしむくいに、天狗の、男は女とおし女をば男のやうになし、御心に絶えず歎かせつるなり。その天狗もごふ盡きて、佛道にこゝらの年を經て、多くの御祈どもの去るしに、皆事なほりて、男は男に、女は女に皆なり給ひて、思ひのごと榮え給はむとするに、かくおぼし惑ふも、いさゝかの物の報なり」と見給ひて、こなたのうへに、「かんの君を、物覺えざりつる月ごろ、え見奉らざりつるに、只今夢に、かうかうなむ見えつる」と語り給ふに、あさましくて、ありしさ

まの事委しく聞え給ふに、夢はまことなりけりと嬉しながら、この人も世に出で給ひにけるを、我も知られで、とあさましくあきれ給ひて、やうやう明けがたになりぬと聞く程に、うへに人よりて、うちさゝめき申せば、驚きて「あはせはしたむなり」とのたまふ。人々は皆まだ寢たるに、こなたにとても、幼かりし時より、交らひつき給ひにし大將こそびゞしかりしか、あえかに人にも見えず、籠り給ひてし人とは思ふに、かたくなしくとおはすらむとおぼすに、御まへに參り給へるに、起きあがりて、御殿あぶらかゝげて見奉り給ふに、唯大將の御にほひありさま、二つにうつしたるやうにて、これは今少しそゞろかに、なまめける氣色まさり給へり。かれは少しさゝやかに、ちひさき方により給へりしぞ、飽かぬ所なりしかど、まだ年の若かりしに、これは今少し物々しく、飽かぬ所なくぞ見え給ふ。うちまほり給ひて、いめのやうなるもゆくへなき、まづ堪へ難く覺し出て、「聲も聞き出で給へりや」と問ひ聞え給ふ。「去かありし御さまにはあらず。女ざまになりて猶いと世づかず心憂かりしかば、もとのやうに身をかへ試みむとて猶暫し隱れたりつる。髮などのおふるほど、人に見え知られじとなむのたまへしを、御氣色に隨ひてこそは」と申し給ふも、いかにいかにと聞きもやり給はず、「まさしかりける夢のつげかな」と嬉しさに、喜び泣さへ去給ひて「よし、この人を內侍の督にと聞えてそこにこそは代りし給はめ」とのたまへば「年頃さて籠りゐ侍りし身なれば、さやうの交らひはし侍らじ。又かの御ありさま聞きさだめて、暫しかくてさぶらふと、人にも見えしられ侍らじ。まづかの御迎して後にを」とて明けぬれば出で給ひぬ。なごりなく胸

あきてうれしきに、起きゐて、御粥などいさゝかまゐる。宇治にはいつばかりにか、御迎には聞え給ひつ。これには御對面の名殘うれしく、いめのやうに覺えて、今はあさましと思ひ給へば、若君ひき具したまはむもいとあやしく、さりとて見捨てむこともいとかなしきにおぼし煩へど、親子の御契絶えぬものなればゆきあひつゝ見ぬやうあらじ、さばかりなりしわかきみの、このちご悲しとても、いとかく人げなくて通はむを僅に待ちとりて過ぐすべきかはと、猶過ぎにし御心のなごり、強くおぼし取りて、さりげなくむつかしげなるほぐ、引きやり燒きなどし給ひて、若君をめかれず見給ふに、いみじくをかしげにて、やうやうものかたり、人の顔まもりて、ゑみなどするを見るぞ、いみじうかなしかりける。中納言、れいのあからさまと見えて渡り給へり。今は限と思へば、つゆにくげなる氣色、まいて漏さずひきつくろひて、限なきさまにて居給へり。紅の單衣がさねに、女郎花の上着、萩の小袿、いたくおも痩せ給へりしが、このごろなほり給へるまゝに、いとゞはなばなと、にほひを散したるさまして、御ぐしもつやつやと、かげうつるやうにかゝりて、たけ少しはづれたるすゑのふさふさと、物を引き廣げたるやうにかゝりたる、すそつきさがりば、八尺の髮よりもけにいみじくぞ見ゆる。ひたひ髮よりかけたるやうにかくれたるたえま、頭つきやうだいなど、こゝぞと覺ゆるくまなく、うち見るには、いみじからむ物おもひもはるけ、憂も忘れぬべく見ゆるに、心のゆく心ちして、こもちばえこそあまりにし給へれ、などてすぎにしかた、おはせしありさまをめでたしと思ひけむ、かくてはこよなくまさり給へりけるを、かゝるさまにてさし出で交

らはせ奉らむに、うち見む人毎に、心惑はざらむやと、限なき氣色にかき撫でつゝ、我が身にもかへつばかりに思ひまどはるゝ人の御心苦しさ、はた今は慰みて、ことことなく語らひてふし給へるに、又人來て「只今いと限のさまにて、消え入りたまひぬべし」と告げたり。さのみ立ち返りつゝ、驚き返らむもいみじくいとはしくあるまじき事に思ふに、「さるけしき見えば告げにこ」と言ひおき給ひける人、去りに走り參れるに、忍びあへで「唯ともかくもあるほどまでぞ。いきとまるまじき人なめれば、情なく見えじと、思ひ侍るばかりぞや。いとよろづをようおぼしことわり、あながちなる物恨みなどのなきに、心安く嬉しくてかくも侍るぞ。ともかくも見なしてむ、後の心を御覽じて後、言ひ恨みさいあませ給へ」と、涙をおとしつゝ、わりなげに思ひ給へる氣色を、かくてあらじと思ひなりにたれば、何かは苦しからむ。かねても思はざりし人の、心にもあらず、かゝらむものとは思ひしを、唯あやし、ほどを知らぬ人に、見え知られむよりはとばかり、おもひなりにしにこそあれ、かくてありはつべきものとおもはましかば、うれはしくめざましからましなど思ひつゞけて、わりなくにほひやかにうちほゝゑみて「度ごとの御ことわりこそ、おぼし去るにつけてなかなかなれ。物は思ひ去らぬこそよけれ」との給へば、くぬくぬしく言ひ恨みむよりも恐しければ「すべてわが君、はやういけと、さわやかなるあらしはをまからむ」とて、え動き給はねば「今はやういとはしき程にも」と言はれて、恐しくかへりみがちにて、いでもやらず見給ふほどに、かはり給ふ氣色見えじと、さらぬ顔に忍ぶれど、出で給ひぬれば、若君抱きて、つゆまどろまず泣き明し給

ふ。つとめてだ「この夜中ばかりになむ、辛うじて、おのがさまざまになりてなむ。頼むべきさまにも聞えざなり。今少しならむ有様も見はて丶、やがて參りなむ」と書き給へり。「うけたまはりぬ。聞き給へるほどよりも、めやすくも、これにつけても、まづ昔の事こそあはれに」と書き給へり。このほどこそよかるべけれとおぼせば、宮にせうそこ聞え給ふとて、日ぐらし、この若君をつと抱き給ひつ丶、忍びてうち泣きなどし給ふ。そのくれに、例の近き所におはし給ひて、せうそこし給へれば、ありしやうに、めのとのつぼねに入れ奉りて、人の気づまるを待つほど、うへは胸気づかならず心さわぎして、乳母にもかゝる氣色見えず、唯この君をつとまもらへて、かきくらされ悲しと、人やりならずおぼすに、夜更けぬべし、人しづまりぬれば、初のやうに入れ奉りて、御せうそこ聞ゆれば、心ちも気づかならずかきみだりて、「さはこれ暫し」と抱きうつさせ給ふに、驚きてうち泣き給へるを、うちまもりつ丶、身をわけとゞむる心ちして、ゐざり出で給ふを、人は何よりも、この道のやみは思ひかへさるべきわざなるを、さこそいへ、男にてならひ給へりける名殘の、心強さなりければなるべし。「京にぞ暫し思ふやう侍れば、おはしまさせで、吉野におはすべきやうに、殿には申し気たゝめて、まうで來つる」とて、我が御めのと子のむすめにて、親しく仕ひならひ給ひし三人ばかりゐておはしたり。月のいとあかきに、やをらかげに添ひて忍び出で給ふほど、若君の面影は身に添ひて、引きかへさる丶心ちしながら、車に奉りぬ。ひきかへあまたして、夜一夜おはしまし明して、又の日ぞおはしましつきたる。みこもかゝるよし聞き給ひて、これにはびんなかるべければ、姫君たちのおはするかたを気づらひて、おろし奉り給ひて、明かにさしむかひて見奉り給ふに、かたみにいとめでたき有様も、夢のやうに嬉しく哀にもおぼす。殿よりも、覺束なく心もとなき御せうそこ、遠きほど丶も見えず、うち気きりて、そのわたりのさるべきものは、皆奉るべきよし仰せらるれば、皆もて參りあつまる。心やましき思ひ絶えず、いぶせかりしうき世の中離れて、安らかにおぼさるれど、あけくれ見馴れし限なく、やまぐちしるかりし顔つきぞ戀しく、人やりならずはれぼれしくうち詠めて、俄にか丶るさまを、怪しと見驚き給ひぬべき耻かしさに、あなたの姫君たちにもたいめんし給はず、つくづくとうちふし給へるを、男君は、立ち離れながら、中納言の心のうち、苦しくおぼさる丶にやと心得給ひて、「あやしく世づかぬ御ありさまも、見奉り知り給ひにけむ人を改めて、かくは馴れさせ給はむも、あぢきなき御事に侍るべきを、いかにおぼしめし定めさせ給ふぞ」とのたまふを「心より外に、心えぬ契のありけるに、いざ疾くまではいかゞ侍らむ。心憂しと思ひながら、何心なくいはけなきありさまを、身に添へて怪しかりぬべく侍りしかば、見すてつる心苦しさばかりをなむ思ひ侍る」とて忍びがたくうち泣き給ふ氣色、いとあはれなり。「げにさおぼさるべき事に侍る。その御ゆかりしもぞ、離れにくき御契侍る」と聞え給へば、さりけり、殿などには聞え奉らじ、殿、御けしきふかく「中納言には、かけはなれなむの御心なめりと見ゆるも、いかなるべきことにかと心苦しく、我もかくてすゞろにあり馴れにし身をかへて、參りそめにし後は、二夜と隔つる事なく、見奉り馴れにし春宮に、久しく離れ奉りて、た

〻ならぬ御氣色の見えしも、かく見奉らで、ゆくへ知らぬ野山の末に、わくがれ過すも、又いとうつし心にもあらず、さりとても、俄にさし出で〻、人に見え知られむさまの、うひうひしくまばゆきにより、身をもならす程思ひ念じつ〻、我がかはりには、この人さておはせば、春宮に對面給はる事も、おのづからかまへ出でむ、とかくおはしまさむ程も、この人にことよせ奉りてこそは、もてかくしあつかひ奉らめなど思ひなすにぞ、胸のひまふけて、「かうかうの事のありしがいと覺束なきを、我がかはりにもてかくし聞え給へ」といとこまかに語り聞え給へり。聞くもいと哀にて、「猶ふるさとには、いと立ちかへりにく〻侍れど、殿うへを思ひ聞えさするかたはさるものにて、その御事によりてこそ、えさらず思ひたつべく侍るあれ」など、うちかたらひつ〻、我がありしかはりに世に交らひ給ふべきとおぼせば、かたちざまは、いといたく違ひ給ふ事も世にあらじ、大かたの世の事ぞたがひて怪しからむとおぼせば、さかしきやうにはあれど、承り行ひしおほやけごとゞも、その人かの人の言ひつけし事、こたへ給ふべきさまなど、さかしげなく、いとよく聞え知らせたまふ。琴笛の音、かきたまふ手など、さばかりの人の物ぐるはしく、まつし心なきやうにて、籠り居給へるなれば、たどたどしからず。唯同じ聲に吹きならし、彈きならし給へるさま、ことひと〻あへて分くべくもあらず。手などは、ましてかき似せむとまねび給ふに、つゆたがふ所もなし。御聲けなひなむもとこれは男の女まねび給ひし、かれは女のすくよかにつかひならし給へりしなれば、もとよく通へる御けはひ、いづくかはたがはむ。猶さるべきはあはれなりけるはらからの、御契

なりやとぞ見えたる。つれづれなるまゝに、さしむかひて、おほやけわたくし、かゝる御物語の中に、麗景殿の細殿に、折々行きあひし人のことなどをさへかたり出で〻、右のおほいとの〻君のはじめよりのありさま、おとゞのあけくれ恨みられしを、うちうちのみだれは知らず。世にある程にては、音づれぬうらみ、いみじう侍りなむものぞ。げにすべてつゆ飽かぬ事なく、いみじう優れてめでたきを、權中納言の事思ふに、心より外の事にぞ侍りけるかし。今はうけばり、我が物といみじう思ひとゞめてあつかひ給ひしを、昔ながら物のたまひよらむ事や」など、皆語り聞え給ふ。この姫君たちの御有樣を、近く見聞くに、いと優れて思ふやうなるを、つれづれなる長き夜のなぐさめにもすゞし難くて、さるべきをりをり聞え馴れ給ふを、初の御有樣も、いとさやおぼれる程は見え給はず。たがはぬけはひありさまを、宮はいかにすくせに任せて、我があたりを放ちて、今すこし偏に心をすましはてむとおぼすべかめれば、これはさなむと、辨へ知らせ給ふ事もなかりければ、あやめもおぼさず、はじめのならひに何心もなきを、あさましう思ひの外なるなれあれしさを、いめのやうにいみじうおぼし惑へど、男の御心には限なくあはれに、深き御志もまさるにや。いふかひなく見馴れゆくまゝに、あてにけだかくにほひあり。思ふさまなる御かたちありさまを、かばかりのひじりの御あたりに、おひ出で給はむありさま、この世近くはあらじと、あなづりつる心さへぞ悔しうおぼさる。まことや、宇治には若君の御めのと、明くるまで歸り給はねば、怪しと思ふに、御格子など參るほどまで見え給はず、人々尋ねあやしがり聞ゆるに、言はむ方なくあきれて、

思ひよるまじき物の隈々などまで尋ね求め奉るに、いづくにかおはせむ。いふかひなく思ひ惑ふ程に、殿おはしたるに、かうかうと聞えさすれば、うち聞き給ふより、かきくらし心惑ひ給ひて、物も覺え給はず。「さてもいかなりしことぞ。日ごろいかなる氣色か見え給ひし。故郷のわたりより、音づれよる人やありし」と問ひ給ふを、我さへさわがれぬべければ、めのともえ申し出でず。「さるみけしきも見え侍らず、見奉らせ給ふ程はさりげなくて、一所おはしますほどは、若君を、目もはなたず見奉らせ給ひつゝ、うち忍び泣き明し暮させ給ひしを、ば、世の中に、うらめしくも覺束なくも、思ひきこえさせ給ふ人やおはしますらむなどこそ、心苦しく見奉り侍りしか。かうざまにおぼしめしなるらむみけしきと、つゆも見奉らざりき」と聞ゆるに、言はむ方なし。限なくのみもてかしづかれたりし身を、いとかく忍びかくろへたるさまにて、あなたざまの事を、心に入れてあつかひつゝ、こゝにはありもつかず、都がちにわくがれたりつるを、げにいかに見もならはず、怪しくあいなしとおぼしけむを、うち見るには、すべてさりげなく、安らかなりし御けしきありさまの、返す返す見るとも見るともわくよなく、めでたかりし戀しさのやらむかたなく、時のほどに心ちもかき亂り、さし方行く末も覺えず、悲しく堪へ難きに、廻りあひ尋ねあはむ事覺えず、いかにせむと悲しきに、若君の、かゝる事やあらむとも知らず顔に、何心なき御ゑみ顔を見るが限と思ひとちむる世のはだしと、いとゞ捨て難くわはれなるにも、あはれ、かゝる人を見捨て給ひけむ心づよさこそ思へと、あさましく、ことわりは返す返すいひやる方なく、胸くだけて、悔しくいみじ

く、人の御つらさも限なく思ひ恨らるゝ。臥し給ひしおまし所に、ぬぎ捨て給へりし御ぞとものとまれるにはひ、唯ありし人なるをひきさて、よゝと泣かれ給ふ。かばかりの事を夢に見むだに、覺めての名殘ゆゝしかるべし。かたちけはひの、いふ方なくあいぎやうづき、にはひみちて、憂きもつらきもわはれあるも、いとにくからず、心美くしげに、うち言ひなし給ひし戀しさの、更に譬へて言はむ方なく、胸よりあまる心ちして、人のをこがましと、見思はむ事もたどられず、あしずりといふらむ事もしつべく、泣きてもあまる心地して、沈み臥し給ひぬる御けしきの、いみじくいとほしくわりなきを、見奉りなげかる。さても心合せ知りたる人なくては、いかでか出で給ひけむ。さりとも、人知りてこそありけめ、いかなりけることぞと思へど心得ず。もし見よと思ひて、書きおき給へる歌などやうのものやあると思へど、さやうのねぢけばみ、かゝづらうべき人にも物し給はず、「かのわたりなりける人の見ければ、言ひ知らず、きよらにあてにおはする殿の、いとわかきなむ、立ちかくれていとめでたき女を車に乘せ奉りておはしにし。いかなる人にかと、怪しがる」と人のまねび聞ゆるに、おのがさまに身をもてなし習ひて、たゞや出でゝおはしつらむと思ひつるだに、少しあやしかりつるを、ましていかなる事ぞと思ふに、今少し胸心まどひて、思ひやらむかたなし。昔よりよしなき事どもを思ひしは、物にもあらざりけり。すきずきしくよろづに色めきて、はてはかくわびしく、身を責むるやうに、悲しき事を思ひ歎きて、明け暮るゝよ、若君の御顔ばかりに、命をかけて、今少し涙まさりける。事のよろしき時や、あはれなる歌などもよみ、思ひつ

〻けらるゝにこそありけれ。思へば胸くだけて、いみじく苦しく覺し去をるゝほどに、右のおとゞの君は、このたびも、いと美くしき女君うまれ給へりしかど、くづほれ給ひし人の、今もたひらかならむ事もおぼしたゝで、消え入りつゝ、さすがにあるかなきかにて「殿を今一度見奉らず、おぼしなほされて止みなむとするよ」とて、泣き入りたまふ。母上いみじと見奉り給ひて、なくなくかくなむと聞え給ふ。「世にあらばこそ、世の謗をおぼさめ」と聞え給ふを、氣は猛く見じと放ち捨てゝも、月ごろの過ぐるまゝに、戀しく悲しくて、唯ほれ惑ひ給ふ心ちなれば、いと堪へ難く聞き給ひて、さはれかし、いかなるもさるべきにこそはありけめ、限のさまなるを見て別れなば、いかばかりかは悔しく悲しかるべきとおぼして、渡りて見奉り給ふに、いみじくをかしげなる人の、あるかなきかなるさまにて、いとこちたく、長き髪をうちそへて臥し給へるは、いかならむ仇敵なりとも、更におろかに思ふまじきを、まいて、さばかり悲しくし給ふ親の御めには、何せむにいとひがひがしく、いかにつらしとおぼすらむと悔しく悲しくなりて「わが君や、かうなり給ふまで見奉らざりけるよ。限なく思ひ聞え、さすが、あまりに思はずなる事を、うち聞きしがうれはしく、安からざりしまゝに、いひかうじ玄、聞えてける悔しき事。さはれや、唯いけて見聞えむにます事あらじを、佛神我が命にかへ給へ」と聲も惜まず泣き惑ひ給ひて、御湯など、せめてすくひ入れ給ふに、あるかなきかの御心ちにも、殿の御聲と聞きて、目をせめて見あげて、御顏うちまもりて、涙の流るゝさまを、いみじく悲しく心苦しきに、御祈どもをつくして、つとかゝへて惑ひ給ふに、やうやう物お

ぼゆるけしきになりゆきて「尼になし給ひてよ」と、息の下にのたまふを、ゆゝしく悲しくおぼゝして「おのれがあらむかぎりは、かゝる事なおぼしかけそ」と泣き惑ひ給ひて、よろづにあつかひて添ひ居給へるが、嬉しく哀なるに、念じて湯などまゐるけにや、こよなくなり給ひにたれば、いつしかと殿にゐて渡し奉り給ひて、片時も離れずあつかひ聞え給ひつゝ、中納言のいみじき思ひに沈みて、きし方行く末を忘れ給へるも、ありし名殘ならましかば、名殘なく恨めしからましを、かゝればこそなど思ひなすも、折よかりけり。このたびの姫君こそ、めのとあまた取りて限なく悲しと見奉り給へど、殿より絶えて、御せうそこだになきを、心憂しつらしと覺すも、おいなかりけり。吉野山には、かくてのみたえ籠りて、過し給ふべきにもあらぬに、殿うへたち、いみじく心もとながり聞え給へば、げにさのみやはと、いと忍びて立ち出で給ふに、この宮の姫君を、暫しにても立ち離れ給はむ事、覺束なく覺えて「やがてこの度」といざなひ給ふを、心細く悲しきながら、跡絶えて住みなれし山の蔭を、幾らばかりも見馴るゝ事もなき人にうち靡きて、我が身ひとつにもあらず、中の君をおくらかすべきにもあらねば、引き具せむにも所せし。この世の外に住みはてゝ、同じ麓へだてぬ御住ひならず、見奉る事かたく、宮の御有樣をも思ひやり、きこえさせむおぼつかなさは、いみじかるべし、又さるいみじき所に、人にも似ず、うひうひしくて、俄に立ち出でゝも、人わらはれに、うき事添ひてかへり入らむも、まつのおもはむ事耻しきをと思ひて、殊の外に思ひ離れて、さそはるべきけしきもなきを、いみじくうらむれば、さすがに涙ぐみて、

「住みわびて思ひ入りけむ吉野山またやうき世にたちかへるべき。たゞおぼせかし、こゝながらも」と言ひけち給へる、いといみじくよしよししく、あてになまめきたり。

「住みわびて今はと山に入る人もさてのみあらぬものとこそ聞け。よしや、身こそ恥かしく」と恨みても、げに俄に引き具したらむも、春宮に遂に聞かせ給はでわるべきならねば、覺しわはせむ事いと苦しく、またげに俄にもあり、おはし所などして、わざと迎へ奉らむ、このたびはかくろひ忍び出づれば、むげにものげなきやうなり、宮の見給はむ所も、少し御心驚くばかりにてこそなどおぼして、出で給ひぬ。暗きほどにまぎれて、京におはしつきて、この女君をば、かんの君のおはしましゝやうに、その御方のみちやうの前に入れ奉りて、男君はおまへに侍ひ給ひて、殿見奉り給ふに、とりかへばやの御歎ばかりこそかはるとなりけれ。嬉しきにも涙にくれて、え見奉り給はず。いみじく美くしげに、懐かしう花やかなる女の、髪はつやつやゆらゆらとかゝりて、いといみじくめでたくて、なよゝかなるさまにて居給へるも、いめのやうに、えもいはず清らなる男にて、わりつきびゞしくて侍ひ給ふも、うつゝとも覺えず。又いかゞなりかはり給はむと、あやうく云づ心なきぞことわりなるや。月ごろの事どもなど聞え給ひて、もとよりかゝるべかりし御さまどもの、いとめづらかなりし。おのおの御心違ひなく、このまゝにて物し給ふべきなり。かたちざまのことびとならましかば、惡しくもあるべかりけるかな。いさゝか違ふ所のなきにこそ、わさましくさるべかりけることかなと覺ゆれ。「今ははやう大將にて交らはれよ。見るにつゆ違ふ所なし。せうせうはあらぬ

人と見ゆともいかゞせむ。論じあらがふ人あらじ」。右のおとゞのむすめ、權中納言わざと添ひ居てあつかひまどひけるが、おとゞもかうじ許して我が殿に迎へられにけり。げにうちうちこそ、さま異なる事とも思へ。人きゝびんなしや。誰がためもとうちうめき給ふにも、かんの君は胸うち潰れ給ひけり。ないしのかみ、日ごろ例ならず惱み給ふといひなしければ、春宮よりも御使參りて、「いかゞおはしますらむ。宮にも、御心ちれいならずのみおはしまして、よろしくは疾く參らせ給ふべきよし、御けしきになむ」と聞え給ふ。今の大將の御心ち、いみじくぞあはれなりける。かの右のおとゞの御わたりの、思はずなりし事のまぎれをうんじて、吉野の宮には隱れ給へりけるといひなして、内にも「疾くまゐり給へ」といそがし給ふにも、いかにうひうひしからむと我が心もいとまばゆくおぼゆ。世の人の物いひいづるなかにつけても、つきづきしげなれば、「大將は權中納言の事に歎きわびて、吉野の宮には隱れ給ひて、世を背きなむとおぼしけるに、このみこの御むすめ、みつきこえ給ひて、世をえ背きは給はぬものから、猶都に立ちかへらむ事は、この事の心やましさに覺し絶えたりけるを、大殿の聞きつけ給ひて、今は限になりにたる親の顏を、今一度見むと思さゞりけることと泣き悲み恨みつゝ強ひて聞え給ひければ、それをさへいなび給ふべきならで、いかゞせむに出で給へるなりけり」と言ひのゝしり喜ぶ事限なし。みかどもきこして、まづ樣をかへず、今まで世に物し給ひけることを、限なくおぼし喜びて、めしあれば參り給ふ。いみじく云たてゝ、すのこに歩み出で給ふより、喜び騷ぐも、あまりはしたなくおぼさる。年ごろ仕うまつり馴

「住みわびて思ひ入りけむ吉野山またやうき世にたちかへるべき。たゞおぼせかし、こゝながらも」と言ひけち給へる、いといみじくよしよししく、あてになまめきたり。

「住みわびて今はと山に入る人もさてのみあらぬものとこそ聞け。よしや、身こそ恥かしく」と恨みても、げに俄に引き具したらむも、春宮に遂に聞かせ給はでわるべきならねば、覺しあはせむ事いと苦しく、またげに俄にもあり、おはし所などして、わざと迎へ奉らむ、このたびはかくろひ忍び出づれば、むげにものげなきやうなり、宮の見給はむ所も、少し御心驚くばかりにてこそなどおぼして、出で給ひぬ。暗きほどにまぎれて、京におはしつきて、この女君をば、かんの君のおはしましゝやうに、その御方のみちやうの前に入れ奉りて、男君はおまへに侍ひ給ひて、殿見奉り給ふに、とりかへばやの御歎ばかりこそかはるとなりけれ。嬉しきにも涙にくれて、え見奉り給はず。いみじく美くしげに、懐かしう花やかなる女の、髪はつやつやゆらゆらとかゝりて、いといみじくめでたくて、なよゝかなるさまにて居給へるも、いめのやうに、えもいはず清らなる男にて、ありつきびゞしくて侍ひ給ふも、うつゝとも覺えず。又いかゞなりかはり給はむと、あやうく玄づ心なきぞことわりなるや。月ごろの事どもなど聞え給ひて、もとよりかゝるべかりし御さまどもの、いとめづらかなりし。おのおの御心違ひなく、このまゝにて物し給ふべきなり。かたちざまのことびとならましかば、悪しくもあるべかりけるかな。いさゝか違ふ所のなきにこそ、あさましくさるべかりけることかなと覺ゆれ。「今ははやう大將にて交らはれよ。見るにつゆ違ふ所なし。せうせうはあらぬ

人と見ゆともいかゞせむ。論じあらがふ人あらじ」。右のおとゞのむすめ、權中納言わざと添ひ居てあつかひまどひけるが、おとゞもかうじ許して我が殿に迎へられにけり。げにうちうちこそ、さま異なる事とも思へ。人きゝびんなしや。誰がためもとうちうめき給ふにも、かんの君は胸うち潰れ給ひけり。ないしのかみ、日ごろ例ならず惱み給ふといひなしければ、春宮よりも御使參りて、「いかゞおはしますらむ。宮にも、御心ちれいならずのみおはしまして、よろしくは疾く參らせ給ふべきよし、御けしきになむ」と聞え給ふ。今の大將の御心ち、いみじくぞあはれなりける。かの右のおとゞの御わたりの、思はずなりし事のまぎれをうんじて、吉野の宮には隱れ給へりけるといひなして、内にも「疾くまゐり給へ」といそがし給ふにも、いかにうひうひしからむと我が心もいとまばゆくおぼゆ。世の人の物いひいづるなかにつけても、つきづきしげなれば「大將は權中納言の事に歎きわびて、吉野の宮には隱れ給ひて、世を背きなむとおぼしけるに、このみこの御むすめ、みつきこえ給ひて、世をえ背きはて給はぬものから、猶都に立ちかへらむ事は、この事の心やましさに覺し絶えたりけるを、大殿の聞きつけ給ひて、今は限になりにたる親の顔を、今一度見むと思さゞりけることと泣き悲み恨みつゝ强ひて聞え給ひければ、それをさへいなび給ふべきならで、いかゞせむに出で給へるなりけり」と言ひのゝしり喜ぶ事限なし。みかどもきこしめして、まづ樣をかへず、今まで世に物し給ひけることを、限なくおぼし喜びて、めしあれば參り給ふ。いみじく玄たてゝ、すのこに歩み出で給ふより、喜び騷ぐも、あまりはしたなくおぼさる。年ごろ仕うまつり馴

れし御前御隨身などは、闇にくれたる心ちしつるに、うち見奉りつけたる心ちども、譬へむ方なし。涙さへぞこぼれける。つれなくも靜めて、うちに參り給ひて、陣あゆみ入り給ふより、めづらしがり見奉る。御せんに參り給へれば、とばかり御覽ずれば久しかりつる月ごろのほどに、いとゞこよなくなりまさりにける心ちして、かをりわてなる所さへ添ひにけり。あはれ、かゝる人のやがてさまをかへてましかば、いみじき世のうれへにこそあらめと、うちまもらせ給ひて、涙をさへおとさせ給ひけり。

「雲のうへも闇にくれたるこゝちして光も見えずたどりわひつる」とのたまはす。うちかしこまりて、

「月のすむ雲のうへのみ戀しくて谷にはかげもかくしやられず」と奏し給へるさま、さはいへど、いとすくよかに、物わざやかなる所さへ添ひにけりと、目もあやに御覽せらる。春宮に參り給へれば、物遠き御簾のとにて、宣旨の君ゐざり出でゝ、いみじく珍しがり聞えて、「ないしのかんの君の御心ちは、猶惱しげにや物せさせ給ふらむ。御せんにも怪しくのみ見えさせ給ふにも、よろしくは參らせ給へかし。覺束なく心苦しげなる御氣色の折々侍るを、そゝのかし聞え給へ」などいふ。胸潰れて、朝夕馴れ奉りしものを、今はかぐのみこそは雲居なるべかめれ、ありしよりけにうち惱み、覺し亂れたるらむ御けしきの、ふとおぼゆるに、えつゝみあへ給はず、涙のこぼるれば、そゞろにはしたなき心ちして、事ずくなゝるほどにて立ちても、御まへのかたのみとばかり見やられて、

「かへしてもくりかへしても戀しきは君にみなれしえだづのをだまき」。まかでゝ見たまへば、內侍のかんの君は、帳の前に添ひ臥し給ひて、のどやかに詠め出でゝ、おぼし出づる事どもありけるなるべし。今ぞおしのごひ隱し給へるけしき、いとゞにほひまさりて、起きわがり給へるも、さまざまげにいかにも心苦しく見奉り給ふ。うちわたりの事どもなど語り給ふに、かくてありしかしと、覺し出でられわはれなり。大將は右のおほいとのゝ君の有樣の、更にいとすぐしがたく見まほしきを、中納言のいとおりたち見なれけむぞ、うたてゆかしげなく、飽かぬふしなれど、唯一人思はゞこそあらめ、人知れずは、春宮を思ひ出で給へり。吉野の君をさとのとまりにて、そのなかにおしませては見まほしければ、氣色もゆかしくて、かんの君に聞え合せ給ひて、御文かき給ふ「ことわり書き盡さむかたなければ、おのづからきかせ給ふらむ。

めならへば忘れやゐにし誰ゆゑにそむきもはてず出でし山路ぞ」ときこえ給ひけり。この殿には、世に出でおはしたりとうち聞き給ひて、いかなりける事ぞと聞き惑はれ、ひたぶるに背きはて給ひなましかば、世をかけ離るゝ御心のありけるかと、ことよせて慰みぬべきを、さはおはしながら、かき絶え給ひけるうらめしさはいみじけれど、いかゞとおぼしける、おとゞの御胸つぶれ給へるに、この御文待ちつけ、取りもあへず涙をおとしつゝ、「いかにも女は、見えそめぬる人に忘らるゝをと聞くばかり、いみじき事なし。それのみにもあらず、聞きにくき事さへありて、うとまれはてなむよの聞えのいみじきをば、さばれ、かばかりの御

心とは見つれど、いかゞはせむ。この御返事聞え給へ」とそゝのかし聞え給へど、すべてあるまじき事と、思ひはなれ給へど、心にまかすべくもあらず。添ひ居て聞え給へば、又御心に違ひてもと、恐しさに頭もたげて、

「今はとて思ひすてつと見えしよりあるにもあらず消えつゝぞふる」。あてにをかしげなるを、のこりゆかしく心とまりてかんの君に見せ奉り給へば、かたちありさまは、いとをかしげにこそありしかと、手もそゞろに見なれたりしほど、哀におもひ出でられて、去のびの森のゆかりを、かたがた心にはなれぬちぎりと思ひみだれ給ふ。春宮の御事を、いぶせく哀に思ふ。吉野山を、いかにいかにと思ひやりながらも、この人は見ではあるべき心ちし給はねば、くれにとおぼすに、かの殿にも、もし立ち寄り給ふやうもこそあれと、手づからたちぬ去つらひ、女房ひきつくろひなどし給ふを、女君、いといみじかりし程のまぎれに、中納言にも殘なく、うち解け見馴れあつかはれしものを、又さへやはと、かたがたに、中納言の思はむ事も、いとほしく耻しく、こなたざまは、世にうちとけ見給ひしものから、月ごろのへだてもに耻しくまばゆく、朝夕見馴れしほどだにいと耻しげに物し給ひし人を、我が面影もつゝましければと、今始めたる事ならねば、我が心に任すべきにもあらぬに立ち寄りもし給はゞと傍痛くくるしきにうちなかれぬ。御ぐしまゐらせ、えならぬ御ぞにたきしめさせなど、手づからあつかひ聞え給ふにも、いとあはれなるに、いかならむと胸つぶれて、苦しくおぼすに、夜いたくふけて、なれしあたりともなく、氣色ばみ忍びてぞおはしたるさまぞ限なきや。ほの

かなる月影に、いと細やかになよなよとうちふるまひて、さし歩み出で給へる、いづくかはたがはむ。今はと思ひ奉りしに、かはらぬ御有樣を、夢のやうに珍しく見奉りて、皆うち泣きぬ。こと多からぬ程にて、「いづら」などの給へど、とみに動き給はぬを、おとゞいと心もとなくおぼして、「いでや、かゝれば、聞きにくゝもいはれ給ふぞかし」とうめき給ふに、いと恐しくて、あるにもあらずぬぎ出で給へり。目にあひ見るべきものとも思はず、あさましくて出で給ひしを思ひ出づるに、うつゝともおぼえず。うち泣きぬるけはひ手あたり、ほのかなるほかげなど、あてにあえかに、なよなよとあはれげなるほど、まことにいみじき人なりけりと、いとゞ心とまりて、「身のことわりを思ひ知りつゝも、猶うらめしかりし御心ばへを背きぬべくやと、試みに、吉野の峯の奥深くは尋ね入りて侍りしかど、覺束なさも忍びがたく、をさなき人の哀など、わりなきほだしに、人わろくおもひかへされ侍りにしも、いと罪深きも、君は心安げに承りしこそ」などこまやかに、いとしたり顔につゞけ出で給へる、こと人とは思ひよるべきにもあらず。答へむかたなきまゝに、

「世をうしとそむくにはあらで吉野山松の末吹くほどゝこそ聞け」とのたまひ出でたるこめきらうたげなり。げにかくぞいらへむかしと、いとにくからずほゝゑまれ給ひて、

「その末をまつもことわり松山にいまはととけて浪はよせずや。身さへ心憂く、おき所なき心ちし侍りてなむ」とありしよりけに心耻しげにあばめ給へるけはひ、なかなか何しにうち出でつる事ぞと、汗も流れ給へるさま、いみじからむ罪、殘あるべくもあらず。唯いみじく

なつかしく、哀にうち語らひてすごしゝならひ、今しも變るべき事ならねば、さこそ覺すに、わさましき御心がはりを、今はじめたらむよりも、耻しくいみじけれど、おびえ騷ぐべきほどならねば、歎き亂れたるけはひ去るきを、げに怪しからむとあはれにおぼす。中納言のうけばりたるけしきも解けてはあるべきほどゝも思はざりつれど、なほざりごとにてやむべくもあらず。哀なる事誰にも劣らぬ心ちしながら、吉野山の峯の雪にうづもれて、とけてもゝ寢られず、思ひおこすらむ哀さも、忘れず思ひやらるゝぞ淺からぬ志なるや。猶まばゆくて晝はえとまり給はず、よをうちとけず、猶うらみ顔にてよるよるおはす。近きけはひなどの、男ながらみだれうち語らふなどは、たをたをとなよびかになつかしかりしを、これも同じなつかしさ、なまめきざまなれど、さすがにまことの男は、又さま異なる事にや、おやしとのみおぼすに怪しく心得がたしと、かへすがへすおぼさるゝに忍びかねゝ、

「見しまゝのわりしそれとも覺えぬは我が身やあらぬ人やかはれる」とうち歎き給へる、に、思ひあやめらるゝふしあるべしと、をかしくもことわりにもおぼえて、

「ひとつにもあらぬ心のみだれてやわりしそれにもあらずとは思ふ」と、いとゞまねび似せ給へば、わくべくぞあらぬや。中納言、はかなく日頃の過ぎ月の重なるまゝには、若君のいみじく美くしげにおよすげまさりて、やうやう起き返りなどするほどになり給ひにたるを、片時目も放たず見居給ひて、言ひ知らず見るかひあり。にほひ多かるさまして、いと哀と思ひすましたる氣色、さすがに思ひ放たず、抱きあつかひ給ひしものを、いづくにいかなるさ

まになり給ひて、これを見ず知らず、ゆきかくれにけむとおぼすに、夜晝よどむ時なき涙に紅に色かはりて、命も盡きぬべき契なりけりと、覺しつゞけて過ぐすに、「大將は尋ね出でられ給ひておはすなり。うちなどにも參り給ふなり」とまねぶ人あるを、うち聞きつけたる心まどひぞ又物に似ぬ。さは世に物し給ひけりと思ふに、命はかゝる心ちするものから、さてもあさましや、さてならひにし人なれば、とかくあらむ程とおぼすにこそありけれど、さばかりいとよう女び給ひにし身を、猶さてこそあらめと、おぼし立ち出で給ひけむほど、いと珍らかに、世に似ぬ心ちしながら、いかならむ、とかく思ひ知らむも、事のよろしき時の事なりけり、おほよそばかりにても、まゝいと見まほしく、氣色もゆかしければ、辛うじて思ひ立ちて、若君ぐして京の宮にまづ出で給ひて、陣に事の定あるに必ず參り給はむと推し量りて參り給へれば、思ひしも去るく、さきはなやかにおひちらして參り給ふめり。もてかしづかれ給ふさま、げにかくてならひけむ人の、うち忍びかくろへては、あいなくおぼしなりなむ、ことわりなりと覺ゆるに、いといみじく、あざあざと清らにはひかをり、なまめきたることさへ添ひにけりと見ゆるに、目もくるゝ心ちして、うちまぼるに、見合せて、いかにあやしとこの中納言思ふらむと思ふに、我も氣色うちかはる心ちして、いとすくよかにもてしづめて、いかなるひまに、物を言ひよりて氣色みむと、ことごとなくめをつけて見れど、さ思ふべしと心得て、立ちとまり物言ひよるべくもあらず。殊にそれかとも思はぬさまにてことはつるまゝに、急ぎまかでぬるを見るに、われをこそひたぶるに思ひすて給はめ、若君をさる人

ありきかしと、いかゞなりにけむと、思ふべくやあらむと思ふに、恨めしく悲しく、人わろく涙にくれて出で給ひぬ。よもすがら思ひあかして、猶忍ぶべき心ちもせねば、

「見てもまた袖の涙ぞせきやらぬ身を宇治川に去づみはてなむ」　さまざまかきやるかたなく、恨み盡し給へるを、大將は見給ひて、ありしそれとこそ見けれど、をかしくもいとはしくも覺ゆれば、かんの君に見せ奉り給ふ。常にあらましごとにてだに、ひたおもてにあらまほしげにて、過ぎにし方をこふると言ひあはめしものを、けにいかにあさましく思ふらむと、さすがは胸うち騒ぎてあはれなるに、大將は我にあらずとあらがひ給ふべきにもあらず。この人のよづかぬものぞかしと思ふらむ心のうち、ひとつはいとほしく耻しかるべけれど、我が身を世になく清めむとても、かんの君の御事をあはつけきやうに人に見せ聞かせじと思へば、「唯さ思はせて、御返りは心ときめき人にて、見あやむるやうにもぞ侍る。これ聞え給へ」とせちにかんの君にそゝのかし聞え給へば、うち見む所耻しくいとほしけれど、いとあえかにわりなくいなぶべき、我が身ゝとのさまにあらねば、この御文のかたはらに、

「こゝろから浮べる船をうらみつゝ身を宇治川に日をもへしかな」とばかり書きつけ給へる殊にめもあやなり。猶わりがたくもとばかりうち見て出し給へるを、待ちとりことわりにぞ悲しき。我が心のをこたりと深く思ひうとまれにけるも言はむ方なく、思ふにもあまる心ちして、をこたりをかき盡して、又たちかへり、

「いとゞしく歎ぞまさることわりをおもふにつきぬ宇治の川船」。』内侍のかんの君、去も

つき晦日に參り給へり。春宮は、あさましきまでかき絶えておぼさるゝに、珍しう嬉しくて、いつしかと待ちおはしますに、まうのぼり給ひてもいかにおぼしめさむと、いとほしうかたはらいたくて、うち出で聞えさすべき言の葉ゝ覺え給はず、いと苦しげにて臥し給へるがちひさく身もなき心ちするに、いと所せう、ふくらかなるを見奉るゝ心苦しうて、やをら添ひ臥し給へるにも、右のおとゞの女君に、そゞろに見なれし程の事おぼし出でられて、さまざまに哀なり。宮はことひとゝはたおぼしよるべきならねば、日ごろの覺束なきいぶせさなど、うらもなくうちとけてのたまはするもいと心苦しうて、委しきありさまなども聞えさせまほしけれど、さすがにうち出でむにつけてまばゆき事のさまなれば、暫しうち思ひめぐらして、「日ごろもいかゞと、覺束なく思ひ聞えさせて、いつしか參り見奉らまほしう侍りながら、樣々みだりがはしき人のうへと思ひ給へわつかひし程に、今までになり侍りにけるも心より外にゝと聞え出で給へるけはひも違ふ所なかりければいかでかはおもほしもよらむ。その夜はうち語らひて、日ごろの御物語など聞えかはし給ひて、「御文などだに見えで、月日へだゝりしほどの覺束なさ」などのたまはせて、うち泣かせたまへるも、いとあはれに心苦し。我も切哀におぼさるゝまゝに、うち泣かれて、いとなつかしうかたらひ聞え給ふ。御けはひ有樣あいぎやうづき、聞かまほしき事年ごろよりも猶まさりにける心ちせさせ給ひて、こよなく慰みておはしますもいとほし。明けぬるにぞ、大將の、忍びて奉れとて侍りし御文ひき出で給へる。おぼえなきこゝちすれど、ひきあけ給へれば、ないしのかんの君の御手な

りけり。心も得させ給はねど、御覽ずれば、「あさましきほどのみだれは、なかなか聞えさせむがたなくなむ。

見馴れにしその面かげを身にそへて哀月日を過しけるかな。ないしのかんの殿、參らせ給ひぬれば、月ごろのいぶせさも、さりとも今ははるけ侍りなむと思ひ給ふるに、命をかけてなむ」とあるをつくづくと御覽ずるに、猶怪しけれど、仰せらるべき方もなければ、唯うち泣きておはしますに、宮の宣旨、故母后の御めのと子にて親しかるべき人なれば、さるべき御めのとやうの人もなきまゝに、またなくおもほしたる。みちやうのもとに參りて「日ごろいおぼつかなさ、御前にも忍びがたげなる御けしき見ゆる折々の侍りし」など聞ゆるまゝに、「この月ごろ覺束なき事の侍るを、誰に問ひ求め、いかにかまへ、いかやうにもてなすべしとも覺え侍らねば、心もとなくいらせ給はむを待ち聞えさせ侍りつる。つとさぶらふやうなれど、おのづから離れ奉り、里に罷り出づる夜なる夜なも、唯御まへには參らせ給ひてより時の程もおはしまし離るゝ事侍らねば、おのづからけしき心得させ給はぬ事も侍らじ。この月ごろうちはへ、例ならぬ御けしきを見奉り歎きながら、唯かく久しき御さとゐのおぼつかなさなど思ひ給へしほどに、いと怪しく心得ぬさまの御心ちと見奉り知り侍りて、おぼえなくあさましながら、れいせさせ給ふ御事などをはからひて、御帶の事などせさせ奉りては侍れど、いかなりける事とも思ひわかれはべらず。さりとも、去るべなくてやはと思ひ侍りながら、うはのそらには問ひ尋ぬべき事ならねば、心ひとつに思ひ亂れ、疾く人らせ給はむと思ひ給ひて、おのづからけしき心得させ給ふ事や侍りけむと、覺束なくも又知らせ給はぬ事なりとも、同じ心に歎きも合せ侍らむと、心もとなく待ち聞えつる」とてうち泣きたるに、言ふべき方なき心ちして、とばかり物ものたまはでおぼしつゞく。さはいへど、をのこの御身にてならひ給ひし御心なれば、道々しく、あるべきさまもおぼしまはされて、さりとて我さへ知らずと言はむも、宮の御ためいとほしく、まことにとかくおはしまさむ程も同じ心にこそはなどおぼして、我もうち泣きて、宮の御まへのつくづくと聞きふし給へるはかたはらいたけれど、それは今おぼしあはする折もありなむとおぼして、「去か、みづからも怪しく見奉り知られ侍りしかど、せめて思ひよらぬ程の御事は、聞えさせむ方なくて、誰にも聞え合せず。又ひとへにさ物せさせ給ふべしとも思うたまへず侍りしほどに、大將の御事のあさましかりしに、なにごともわすれたるやうにてまかでしほどに、みづからさへやがてみだり心ち重くなりて、月ごろは、いふかひなきさまにて、明し暮し侍りつるも、いかにいかにと、覺束なく心にかゝりて思ひ聞えさせながら、御文をだにいぶせきやうにて、月ごろになり侍りぬる覺束なさも、よろしくなりては、いつしかと心もとなく思ひ給へし程に、いとゞ大將の忍びて若しさる事やといめをなむ見しかど、その後思ひあはすべきよすがだになき心ちするに、疾く參りてそのほどの事も見あつかひ、聞ゆべきやうにのたまひしに、やうやう思ひ給へ合せられて、いとゞ疾く參らまほしう侍りしが、又かく同じ心に見奉り知り給ひけるなむ、心一つに思ひあつかひ聞えましよりもたよりある心ちして、嬉しくなり侍りぬる」と

のたまふけはひも、月ごろにつゆ違ふ事なし。まして人は、御かたちなどまほに見奉る事なく、つゝましげにて、御帳の内にのみかしづかれて、物し給ひしならひなれば、いかでかことひとゝは思はむ。唯昔のかんの殿と思ひて、心あはせて、大將の君を導き聞え給へると思ひよるに、月ごろ心一つに、うはの空に思ひつるよりも、ちからつきぬる心ちして、その程の御事、とやかくやと聞えあはするにも、過ぎにし方よりも、道々しう、御けはひなどの、唯ほのかにことつゞけてものたまはざりしを聞きわくほどに、物うちのたまへるも、あいきやうづき、聞かまほしきさまに、いとをかし。「さてもいつの程にかならせ給ふらむ」、「いざしはすばかりのほどにやあたらせ給ふらむとなむ覺ゆるとぞ、大將はのたまひし」とのたまへば、「さてはむげに、今日明日といふばかりにこそ侍りにけれ」と驚きなげくを、宮はつくづくと聞きふし給へるに、いとあさましう心得ず。日ごろも宣旨のをりをりうちあげゝど、今内侍のかみ參り給ひなばと思ひつるに、そもいと心得ぬ事どもをのたまふかな、大將には、夢の名殘も見えつる事なきを、いかにのたまふ事にかと、さすがにありのまゝにうち出づべき事のさまならねば、大將にはおほせ給ふなめりとおぼすには、又ありつる御文もいかなる事ぞと、かへすがへす覺束なく心得がたけれど、遂ふ所なきそれなれば、又さすがに見し人とも はた見えず。彼はいふよしなくなまめき、けぢかく物し給ひしに、此は又かぎりなう、あいぎやうづき見まほしきさまのし給へば、いかなる事ぞと心得給はぬまゝに、唯見し人はさはいかになりにけるぞ、それや大將とのたまふならむ、さらば又これは誰にか、はらからなどあ

またありとも聞かざりしものをなどおぼさるゝに、日頃いぶせく心もとなくて待ち出で給へるにあらぬ人にやとおぼすより、つゝましさも悲しさも取り添へ、ひきかつぎて泣かせ給ふを、かんの君はことわりに聞えむ方なく慰めやるべき方なければ、我もうち泣きてぞ御傍に添ひ臥し給へる。暮れぬるにぞ大將參り給ひて、かんの君にたいめんし給へれば、大將もうちなき給ひて、宮の御有樣、宣旨の憂へつる事ども聞えしさまなどのたまへば、大將もうちなき給ひて、よひなど過ぐるほど、人ぞづまりぬるにぞ、いとよく紛はして、宮に對面せさせ奉り給へる。かたみに夢の心ちして、聞ゆべき言の葉も覺えねど、さてのみはあるべき事ならねば、事の心を委しく聞え知らせたりとも、珍らしき夜がたりにのたまはせ出でなどすべきならねば、何かはへだて聞えむとおぼして、初よりの事をこまかに聞え知らせ給ふにぞ、珍らかにあさましうも又さは我が御事をば、またなくえ去り難うはおもほさゞりけり。哀とも思ひ給はましかば、かう立ち離るゝ事なくならひてかくわりなく心憂きさまになりにけるを、さばかり見知りながらかけ離れ出で交らひて、人にゆづりよそよそに思ひなし給ふべしや、又などかそのをり去かぬかとのたまはざらむ、人にうち出でかゝる事などいふべきにもわらず、日ごろの程なども覺束なう、戀しうもうらめしうも思ひ出で聞えて、なつかしう哀と覺えしも、まことにさてうづもれ籠り給ふべき身ならねば、遂にはさこそあらめと、このほどの有樣をともかくも人にゆづらず、見あつかひ給へりけるを、たとしへなく、心憂きさまを見給へすてゝけるよと、人の御つらさも、身の心憂く耻しさも、つくづくとおもほし知られて、涙のみ

こぼれて、御いらへものたまはせぬを、去かおぼさるゝにこそと、ことわりにあはれにて、日ごろのをこたりなど、なくなく聞え給へど、聞き入れ給ふべうもあらず。なくなくこしらへ慰めて、明け行くけしきなれば、出で給ひなむとするにも、朝夕起き臥し馴れし御あたりは、立ち離れがたういとあはれにて、

「忍びつゝ行きかよへとや朝夕に馴れにし君があたりともなく。さらなることにも侍らず、唯かくて侍らばや。怪しと思ふ人はべるとも、誰々も、さまでかたはにはおぼされざらまし。いとうしろやすき御うしろみとこそおぼしめさめ」と聞え給へば、

「かくばかりかき絶えましや朝夕に馴れしあたりと思はましかば。今更もて出でゝ、うき名をさへ流しはて給はむこそ、わへなく」とてうち泣かせ給へるも、なかなか事多く言ひつゞけて恨みむよりも、ことわりに煩はしければ、「よしよし、聞ゆるもあいなかりけり。かばかりのたいめんは、今よりも難うは侍るまじけれど、唯朝夕起き臥し見馴れ奉りしを、よそよそならむがいぶせう侍るぞや。所せき御位ならで、心安きさまにておはしまさば、内侍のかみのゆかり、疎からぬ御うしろみなるさまにていとよう仕うまつりなむ」など聞え給ふ程に、いたくあかくなれば出で給ひぬ。吉野の姫君右のおとゞのなとばかりはえおぼえ給はねど、年ごろのあはれなど浅くしもあらねば、その後もさりぬべきひまひまには、かんの君、いとよくまぎらはしてたいめんせさせ奉り給ふ。宮は人の心の思はずにうらめしさに、なべての世にうき名をさへ立ちて、心憂き身のすくせなりけりと、さまざまにおぼし亂るゝに、

いとほどなき御身の所せきさへ、月日重なるまゝに、つゝみあふべくもおぼされぬまゝに、起きもあがり給はず沈みふしておはしますを、かんの君宣旨とはなちたる人々は、唯御心の例ならぬとのみ思ひて、院にも聞えさせ、うちにも聞し召して、誰〻誰りおぼしめし歎く。うへは御惱みもさる事にて、昔の御心猶忘れさせ給はで、内侍のかみの近く添ひ侍ふらむ有様のいとゆかしうおもほされて、御なやみにことつけて梨壺に渡らせ給はむとおぼさる。かねてさる御せうそこなどもなくて、去めやかなる書つ方、いと忍びて渡らせ給ひて、みちやうのうしろに、やをら立ち隠れて御覽ずれば、宮の御まへは、白き御ぞのあつぞえたるを、みぐしぞめにひきかつきてぞおほとのごもりたる。かんの君は、少しひきさがりて、薄色とも八つばかり、うへ織物なめり。少しおぼえたるあはせのきぬ、袖口長やかに引き出でゝ、くちおほひしてそひ臥し給へる、いみじう美くしの人やとふと見えて、愛敬はあたりにもちりて、唯大將の御顔、二つにうつしたるやうなれど、かれはねびもて行くまゝに、け高くなまめかしく、よしめけるさまぞ、似るものなくまさり給ふめる。これは唯すゞろに見るにゑましく、いみじからむものおもひ忘れぬべきさまぞいと限なかりける。年ごろも名高きかたちゆかしくおぼし渡りつれど、いまだかばかりのひまもなかりつるを、今まで御覽せざりつるさへ悔しうておぼゝしのどむべき心ちもせさせ給はず、今しもかたかるべき事ならねば、かばかり飽かぬ事なかりける人を、おとゞの宮づかへのかた思ひ放ちたる徒らなるふようの人とかけ離れけむとおぼしめせば、今もさやうの御けしきども聞えて、引きや籠めむと危く去づ

心なく、我ながらおもはしのどむべくもあらぬ、御心いられもさるべきにやとまで覺さるゝを、御心を去づめて猶御覽ずれば、白きうすえふにおし包みたる文の、いまだむすぼゝれながら、宮の御傍にあるを、少しおよびに取り給ふ手つき、うち傾きたるに、こぼれかゝれる髪のつや、さがりば、目もあやなる程よりは、裾の上にうちやられたる程、いと長くはあらぬにやと推し量られて、たけばかりにやあらむと見ゆれど、くせと覺ゆるほどの短さにはあらず。袿の裾には八尺餘りたらむ髪よりも美くしげにぞ見ゆる。少しうち歎きて、「あな覺束なや。今朝も御かへりだになくて、いぶせげにの給へるものを」とてひき隱しつるを、たれがしなどおぼめくにべきはあらず。大將の、宮に聞ゆることあるべしとぞ心得させ給ふべき。いつとなく立たせ給へるに、中納言の君とて宣旨のおとゝなる人參りて、「うへの渡らせおはしましけるは、いづくの隈にか」とてさしのぞきつ。帳のかたびらおろし渡しつるにぞ立ち出でゝ、今おはしますやうにてつい居させ給ふ。宣旨の君こそ、かやうにおのづから渡らせ給ふにも、御まへに侍ひて物など聞えさする人にてはあるに、風起りて去るに侍ふほどなればはかばかしく、御まへにさし出づる人もなくて、はた隱れつゝ侍ふに、ありつる面影も身を離れぬ心ちすれば、聲けはひも聞かまほしくて、「内侍のかんの殿は、これに侍ひ給ふか」と仰せらるゝに、聞えさせむ方なくて、少しうちみじろき給ふけはひなれば、「例ならぬ御事、いつもなく物し給ふらむは、いかにおはします事にか。院にはかくと聞し召しつるにや。御いのりなどはなきか」と仰せらるゝにつけて、聞えさすべき言の葉も覺えねど、覺束なく

て止むべき事ならねば、「そこはかとなくて、月頃にならせ給ひぬるに、この頃又心よからぬやうなる御けしきの、折々まじり侍れば、御心のゝけにや侍らむ」とばかりはかなげに言ひ紛らはし給へるけはひも、唯大　なるをあさましきまで聞かせ給ひて、幾千代聞くとも、飽く世あるまじう聞かまほしければ、御かへり聞えぬべき事をのたまはせつゝ、いつとなくおはしませど、あまりいらへ聞えさせむも、今ははしたなきこゝちすれば、唯折々うちみじろき給ふばかりなるを、いと覺束なくおぼせど、そゞろにおはしまさむも怪しければ、「例ならぬ御事いつとなからむは、いとたいだいしき事になむ。猶御いのりなどのあるべきこそ」とて、出でさせ給ふにも、ありつる面影、身を離れぬ心ちせさせ給ふ。春宮の御なからひは、さまで親しかるべきならねど、院のうへの御事をおろかならず思ひ聞えさせ給へば、その御心よせ、殊にこまやかにおもはし置きたるなりけり。かんの君は、明暮さし向ひへだてなく御物語も聞えさせ、琴笛の音をも同じ心にうち遊びつゝ、過ぎにし昔思ひ出でられて、帳の内にうづもれ入りて、はつかなる物ごしに御聲を聞きつるも夢の心ちして物あはれなり。

「雲のうへも月の光もかはらぬに我が身ひとつぞありしにもあらぬ」とぞ覺さるゝ。去はすにもなりぬれば、このほどにやと去づ心なけれど、まかでさせ奉りても、院のうへ、日ごろの覺束なさゝへ取り添へつゝ、渡らせ給はむに、若しけしきも御覽せむにと、つゝましければ、例なき事なれどいかゞせむ。神わざなど去げからぬほどなればとおぼしめして、なかなかこのほどは、御心ちの苦しげなるをり、かくとも聞えで、かんの殿、宣旨、さるべき心知

れる女房二三人、つと御まへに侍ひて、心もとなく思ひ明し暮すべし。大將も、この程は忍び忍びに參りつゝ、御なやみにことつけて、この御方のとのゐがちなるを、今更に人わやしと思ひ咎めむと、宮の御まへは苦しう思さる。うへはありし面影のみ、身を離れぬ心ちせさせ給ひて、見ではえやむまじうおぼされば、大將い參り給へるを、例の近く召し寄せて、こまやかなる御物語のついでに、例の盡きせぬかんの君の御事仰せらる。今はあながちに、去ぶり遁るべき事ならねど、さ聞えそめにし事なれば、「人からのせめて物づゝみをし、知らぬ人に見え聞えむ事を、苦しき事に思ひて物し侍るをおとゞの心を破らじとにや、そのすぢを思ひ絶え侍りしなむ。今はさりとも年もおとなび物思ひ去る程になり給ひにたれば、さしも侍らじを猶おとゞにこそはそのよしを聞え侍らめ」と奏して侍ふをつくづくと御覽ずるに、こゝぞと覺ゆる所なくねびとゝのひわざやかに清らにめでたきかたち有樣を御覽ずるに、まづ違ふ所なかりし人の面影、ふと思ひ出でられて、御涙もこぼれぬべきを、せめてまぎらはさせ給ひて、「おとゞにも、去か度々ほのめかしたりしかど、深くいなびてやまれにしかば、強ひては言ひにくき事のさまなるを、唯忍びて、宣耀殿に導かれなむや」と語らはせ給へど、さやうに輕々しくは、御覽じそめさせじ、麗しくもて出でゝこそ、參らせ奉らめとおもへば、その事はともかくも聞えさせず、かしこまりてまかで給ふ。うへにも「かうかうのたまふ事ありしかば、今ははゞかりおぼしめすべきやうもなし。かゝる御けしきの侍るをり、唯參らせ奉り給へかし」と聞え給へば、「いざや、猶もて出でゝ參らせ奉らむも、さてならひにし御事

なれば、まばゆき心ちなむする。唯同じみ垣の内に侍ひ給ふめれば、忍びても御覽じそめて、御志に任せて、女御后にも居給はむはいとよし。さしも聞えかへさひにし事を、いかに思ひ改めて、かく奉るぞと、世人の思はむ事も怪しかるべければ」とぞのたまはする。大將も、げに中納言の事などおぼし出づるに、もて出でゝ參らせ奉らむことなど、いかゞとおぼすに、いとくちをしう他かぬ心地し給ひける。春宮には、かねて思ひつるよりもいたくもなやみ給はず、いと美くしげに、唯大將の御劍なる若君うまれ出で給へるを、宣旨などは、いと哀にかたじけなく見奉れど、もて出づべき事ならねば、忍びてかんの殿の御方の、女房の出づるやうにもてなして、中納言の君抱き奉りて、殿に參りたれば、大將殿、母上に、忍びて聞え知らせてあづけ聞え給ふ。いと哀に嬉しくおぼえて、おとゞにもかくと聞え給へば、驚きて、御めのとなどなべてならぬをえりて侍らはせ給ひて、いみじくかしづき聞えてぞ養ひ聞え給ふ。世にはたゞ去のびたる御あたりより、出で來たまへると言ひなしける。右のおとゞのわたりにはさりげなくて、いつのほどにかゝる御ことゞもはありけるぞとめづらかにおぼしけり。ありしむかしのやうに、畫などうちとけてはものし給はず。夕暮のまぎれなどに立ち寄り給ひて、明くれば立ちかへりたまふ。うちの御とのゐなどはなちては、おのづから、よなどふかむ給ふことなにになし。吉野には、ほどのはるけさに、常にもえ渡り給はず。かみなつき去もつきなどにぞ四五日わたり給ふ。その後は、いつしか迎へ聞えさせ給ふべき御心まうけをぞ去給ひける。春宮は、なかなかその後は消え入りつゝ、生きとまらせ給ふべくもおはしま

さで。「院のうへを今一度見奉らばや。尼になりなむ」といふ事を、まれまれはのたまはせつゝ、頼みすくなげに見え給へば、つゝむ事なき御事なれば、心安くて院に聞えさせたれば、さばかりに物し給ひけるを、今まで見奉らざりける事、心安き所にて御いのりもすばかりとおぼして、年の内に院へ出でさせ給ふべきよし聞え給へり。うちのうへは、かくと聞かせ給ひて、内侍のかみもや具してまかでむとすらむとおぼさるゝより、心ぼそくあはたゞしき心ちせさせ給ふもかつは怪しと覺しながら、おとゞの參り給へるに、「春宮い御惱み猶怠らで、まかでさせ給ふなるは、内侍のかみも諸共にや」とい給はすれば、「去か、さこそ侍らむずらめ。參り給ひしより、片時も離れがたくなむおぼしめされてとどうけ給はる」、「彼處にては院のうへなどつとそひおはしまさむに、びんなきやうにやあらむ。御年はねびさせ給へれど、盡きせず今めき給へるものをさやうにて御覽せむは、そこにはげに惡しからずおぼすべき事なれど、思ひすて給はむなむ、ことわり知らずうらめしかるべき。よのつねの女御、御息所も物し給はず、おほぞうの宮仕さまなめれば、宮出で給ふとも、猶さてこそは侍ひ給はめ。引き具しまかで給ひなば、うちわたりもことなくさうざうしかるべし。わかきをのこども、その御かたがたをこそ、心にくゝおくゆかしき御わたりには、思ひてつどふめれ」と仰せらるれば、「げに必ず添ひ奉りて、まかでぬべきにゃ侍らず。院のうへの添ひ聞えさせ給はぬが、うしろめたくおぼしめさるゝ、御かはりの御うしろ見にとこそのたまはせしことなれば、かしこにてさへそひ侍らはるべき。うちへゃ侍らねば里へこそはまかでぬべきを、まことにお

ほやけざまの宮づかへも、勤め侍ふべき人なれば、朔日のほどは、まかでゝもはべりなむ」と聞えさせ給へば、いみじう嬉しとおぼされて、「いとよかなり。昔より覺し捨てられし方の事は今はかけじ。唯女宮などだに、いまだなかめるがいとさうざうしき、かはりに思ひ聞えむとなむ思ふに、同じ心ならずやと思ふこそかひなく」と仰せらるゝものから、御涙のうきぬるを、なほざりには覺されぬ事と見るも、今はいと嬉しくて、「度々御けしき侍りしも、かつかつ年ごろのほいかなふ心ちし侍りて、限なく喜び給へながら、あさましきふようの人と、思ひ給へすて侍りて、御けしきにも隨ひ侍らず、今とても、さる方におぼし召し捨てさせ給はざらむなむかたじけなくうれしう侍るべき」とて、涙をさへこぼして喜び奉り給ふものから、猶もて出でゝ奉らむなどは思ひ給はぬもあやしう、ほのかに見しにも、いとさいふばかりの物づゝみにはあらざりしを、人のかしづきむすめなどの、哀にすぎもていで華やかならむは、うたてこそあるべけれと、猶怪しくぞおぼさるべき。春宮は、まかでさせ給ひぬれば、院のうへ、つと添ひおはしませば、つゝましくて、かんの君はとゞり給ひぬ。大將ぞいぶせからむ事をおぼせど、今は宣旨、中納言の君などいふ人々、心しりになりにたれば、御文など忍びて聞えさせ給ふ。院は、珍しきさへ取り添へて、月ごろの覺束なさにも、つとこの御方におはします。さはいへど、御心ちもやうやうよろしくならせ給ひにたり。唯かゝる位なむいとほいなき。さまをかへて、ひとすぢに後の世の務をせばやとおぼして、院のうへにもたびたび申させ給へど、いとかなしう惜しうあたらしくおぼし召すもさることにて、まうけの君の

おはしまさぬにより、ゆるし聞え給はず。まことや、宮の中納言は、身にそうかけにていかならむひまもがな、物言ひかゝらむと、それにより外の事なく、伺ひありき給へど、昔こそ取りわき御中よかりしか、今は右のおとゞのわたりの事ゆゑ、少しそばそばしかるべく世の人も思へり。我が御心も解け近くならしよりて恨みいはむに、いらへやるべき心ちし給はねば、いとかけはなれてもてなし給へるが、妬く心やましく、わりなく悲しきより外の心なくて、この女君にも、ありしやうにも恨み侘び給はぬを、左衛門などは、大將殿の顯はれもて出でゝこそも物せ給はね、さすがに夜々などはかはらず渡らせ給へば、なかなか今はしもつゝみ給ふもことわりぞと思へり。女君も大方にうち語らひて過ぎしむかしだに、心より外なる事にて、疎まれ聞えしかば、あいなかりしを、今はまして露の隈ありて、見え聞かれ奉らむも耻かしくこゝろ憂かりぬべくおぼして、ひとくだりの御かへりごとも、今はおぼしもかけぬも、いたく恨み給はぬも、怪しくめやすくもなりにける御心かなとぞ覺えける。大將のとのいとゞかへらむまゝに、吉野山の女君迎へ聞えむとおぼして、二條堀河わたりを、みちやうつきこめて、みつ葉よつ葉に造り磨き給ふ、いとめでたし。右のおとゞの君こそは渡り給ふべきを、中納言の御事の、猶心やましくおぼさるれば、さやうに顯はれ、もて出でゝあらむ事は、いかにぞやおぼしける。人がらありさま、はたゆくてにまぎらはして、止むべうもおぼされず。限もなしと思ひ聞ゆる吉野山の君も、唯よしあり心にくゝ奥ゆかしく、あてになまめかしく、けだかくなどあるかたこそ似る物なけれ、ひとすぢにこめきらうたげに心苦しき

さまは、これになずらうべき人ありがたくやと見る程に、わくる心あるべくもなきながら、いかにぞや、なまくちをしきひとふし、思ひ出でらるゝにぞ、何のあはれもさむる心ちし給ひける。春宮の御まへは唯ひたぶるにあてなるより外の事はなく、うち語らひ物など聞え合せむに、よしありゆゑあるさまになど、物し給はぬぞかしなど、さまざま覺し合するに、御心の中ぞ耻しかりける。年も立ちかはりぬれば、例のうちわたり今めかしく、大宮人さまざま思ふ事なげに心ちよげなるに、うち群れて、せちゑや何やと、車ぎぬにもさはらず、帝は月日に添へてありし面影は、身を離れぬ心ちせさせ給ひて、おぼし侘びて、朔日のほど過ぎて、事繁かりつるほど過ぎてのどやかなるに玄のびて、宣耀殿のわたりをたゝずみありかせ給ふ。箏の琴ほのかに聞ゆ。嬉しくて、暫し立ちとまりて聞かせ給へば、うぐひすのさへづりといふしらべを、ふたかへりばかり彈きてやみぬなり。琴の音も、唯大將のにたがふ所なきをあはれなりける妹背の中かなとおぼしめさる。玄とみなどはおろしてけるに、妻戸のいまだかゝらざりけるが、風に吹きあけられたるうれしくて、やをら入らせ給へど、知る人もなし。聞きかたに立ち隱れて御覽ずれば、人二人ばかり居て、碁打つなるべし。かんの君は、帳のうちに、琴を枕にて寄り臥して、手まさぐりに、そこはかとなく搔き鳴らして、火をつくづくとうちながめて、物をいと哀と思ひたる、似る物なくめでたきを、同じうちながら、今までよそ人に思ひて過ぎにけるも、ありがたくおぼし知られて、人見咎むるとも、今宵過ぐすべき心ちもし給はねば、心もとなく、前なる人もはや寢なむと覺しめさる。かんの君は、さまざま過

ぎにし方戀しくおぼしつゞけられ、若君の今はとひき別れしほどの心の中、何心なくうちゑみて、見合せたりしをなどおぼし出でられて、いみじう戀しく悲しきまゝに、

「物をのみひとかたならず思ふにもうきはこの世のちぎりなりけり」とて、ほろほろと涙のこぼるれば、はしたなくて、ひきかつぎて臥し給ひぬ。恭打ちつる人々もうちはてゝ、御殿ごもりぬめり。「御ふすま參りね」とて火も遠くとりやりて、「あなたの妻戸はまだかゝらじ」とてこなたざまに來る人あり。いと恐ろしけれど、暗き方にやをら立ち隱れさせ給へれば、妻戸かけなどして、「あやしくひとけのするこそむくつけゝれ」とてふと入りてみな寢ぬ。見れば、帳のそばに人もなし。心安くて、やをら寄らせ給ふまゝに、きぬを引き遣りて添ひ臥し給ふに、いまだとけても寢給はざりければ、あさましと驚かれて、ことびとゝはおぼしよらず、中納言の伺ひて尋ね來にけるとおぼすに、妬く腹だゝしくて、御ぞをひきかつぎて動きもし給はぬを去の侍て引きやりつゝ、年ごろ思ひし心の中、おとゞのあながちにいなびしうらめしさ、春宮の御なやみのをり、ほのかに見そめてし事など、なくなく言ひ續けさせ給ずに、あさましくなりて、あらぬ人なりけり、中納言と思ひしは、ひとすぢに心憂く妬かりしを、これは我が身いうきも、御覽じ糾はされなば、いかなゝ事ぞと覺し咎められ奉り、あはあはしかりける身の有樣を、御覽じ糾はしては、あなづらはしき方さへ添へて、ゆくてにおぼしめし捨てられなむ事も、心憂く耻しうて、猶この世にいかで立ちまじらず、跡絶えなむと、深く思ひし身を、大將の春宮の御事を憂へつゝ、さやうの去るべにもおぼしたりしを、こと

わりに心苦しう思ひなりて、かくまで立ち出でにけむも、悔しう悲しう、などて宮の出で給ひしに、諸共に出でずなりけむ、殿も前日のほどなどは、さて侍ふべく、女房なども、さうざうしかるべき事に思ひわりしを、何かは、臨時の祭などまでは、さてもそれ過ぎてこそは、殿へもまかでめなどうち思ひける心も、あさましう思ひつゞけられて、取りもあへず涙のこぼれぬるを、「わが君、かくなおぼしそ。さるべきにこそあらめ。唯同じ心にだにあひおぼさば、よも御爲かたはなる事あらじ」となくなく聞えさせ給ふさま、まねびやるべき方なし。男の御さまにて、びゝしくもてすくよけなりしだに、中納言に取りこめられては、え遁れやり給はざりしを、ましてよのつねの女びなさけなくは見え奉らじとおぼすには、いかでかは負けじの御心さへ添ひて、いとゞ遁るべうもあらず亂れさせ給ふに、せむかたなく恥しうわりなくて聲も立てつばかり覺いたるさまなれど、人目をあながちに憚るべきにもあらず聞きとがめて寄り來る人ありともいかゞはせむ、驚かぬ御氣色なるに、せむかたなし。よそに御覽じつるよりも、ちかまさりはこよなくおぼされて、今より後、晝の程のへだてもいぶせく、片時立ち離れさせ給ふべくも覺え給はぬに、いなやいかなりける事ぞと、なほ心劣りもしぬべき事ぞまさりたるを。おとゞのあながちにもて離れ、あらぬさまにもてなしゝも、かくてなりけり。かくのみ誰に寄りて、さすがにかくとはえうち出づまじきことのさまなれば、かたはなる物耻に、とつけたりけりとぞ覺しよりける。さてもいかでありける事ぞ、誰ばかりにかあらむ、この人を一日見てむに、ゆくてにめてなして、止みなむと思ふ人はあらざりけ

むを、おとゞなど、さるけしきを知りながら、ゆるさずなりにけむ、むげにあさはかなる若きんだちなどにやあらむと口惜しけれど、いみじからむとがも何と覺ゆべくもわらず。見るめ有樣のたぐひなきに、何の罪も消え失せぬるこゝちし給ひて、なくなく後の世まで、契りたのめさせ給ふに、さすがにあやしと、おぼしめし咎めさせ給ふにやと覺ゆる御けしきの、色にこそ出し給はねどいとしるきにぜむ方なく耻しう、汗も涙も一つに流れ添ふ心ちして、人のあやしと咎めむも、さすがに苦しうおぼさるれば、出で給はむとても、淺からず契り語らはせ給ふさま、まねびやらむかたなし。

「みつせ川後のあふせは知らねどもこむ世をかねてちぎりつるかな。この世ひとつのちぎりは、猶淺きこゝちするを、いかゞあらむと思ふなむくちをしき」とのたまはするまゝに、ほろほろとつゞきぬる涙に、いとゞきこえ出でむ言の葉もおぼえず。いみじうつゝましけれど、「猶ひとことと聞かでは、えあむ出づまじき」と、やすらはせ給ふもいとわりなければ、

「行く末のあふせも知らずこの世にてうかりける身の契とおもへば」。朝夕聞き馴れさせ給へりし聲けはひは、おぼし召しあやめらるゝ事やと、つゝまーうて、いわくわうだゑ納らはし給へるけはひの、あいぎやうづき聞かまほしき事ぞ限なき。片時立ち離れさせ給ふべき心ちも玄給はねば、御身を分ちとむる心ちして、返す返す契り置きて、こゝの妻戸より出でさせ給ふ。中將の内侍といふ人ばかり、御供なりける。今や今やと待ち奉りけるに、明くるまでになりにければ、待ち侘びて、うつ伏し臥したるを、ひき起して渡らせ給うて、やをら夜の

おとゞに入らせ給うても、ありがたかりける人の手あたりけはひは、つゆも御身を離れず、今も見てしがなと、御涙もこぼるれど、御文取り傳ふべき人もなければ、大將をぞ、只今參り給ふべきよし仰せられて、待ちおはします。さばかり到らぬくまなき中納言の心にだに、逢ひての戀もあはぬ歎も、皆忘れし人の御さまなれば、又かばかりなどいふ人だに御覽せざりければ、唯かたくおぼさるゝもことわりなり。大將參り給へるよし聞かせ給ひて、御まへに召したるに、いと清らかに耻しげにて侍ひ給ふに、うち出でさせ給はむこと、いみじく傍いたけれど、大きやかに結びたる文を、御ふところより引き出でさせ給ひて、唯大方なるやうにて「内侍のかみに聞えむ事を、殿のゆされわりし後、何となくて今までになりにけるを、今日よき日なれば、奉りて、やがて御かへり見せ給へ。おほぞうのみやづかへなどにては、おとゞの見給はざらむには、心えず思ひなして、かへりごとなどあらむ事難かるべければ、わざと物しつる」とのたまはすれば、賜はりて立ち給ひぬ。御けしきのあやしければ、若しけしき御覽じたるにやとばかりおぼしよりける。宣耀殿に參り給へれば「夜より御心ちあやましとて、まだ御との籠りて」と大納言の君といふ人聞ゆれば驚きて「など告げ給はざりける。いかやうにおぼさるゝぞ。御風にや」などきこえ給ふも、いと傍いたければ、起きわがりて「胸の痛く侍ればおさへて」とのたまふ。御顏はいたく赤みて、泣き給ひけりと見ゆるもしうへの近づき寄らせ給ひけるにやと、この御文のけしきも、いみじくゆかしければ、近く寄りて「今朝御前に召し侍れば、參りて侍りつるに、これひとづてならで奉りて、やがて御かへり、只今